

フェーニング大陸物語

※本作品はフィクションです。実在の人物や団体、国家、思想、宗教などとは関係ありません。

時は近代。停滞の中世・夜明けの近世を越え、技術革新、国家の所有者は王から大衆へと移った。第一次フェーニング大陸大戦から百年。フェーニング大陸史は大変革の荒波の飲み込まれようとしていた。

一年前のその日のことを私は決して忘れないだろう。大きな声とそしてブーイング。歓迎と非難という両極端の騒音の中、私の指導者としての人生が始まった。冷めぬ熱気と衝突が議場を覆っていた。それは国家の活力と若々しさを表していた。

"俺こそが国家・我が国だ。我が国はこうあるべきだ。"

その時皆、国家に対して当事者意識を持っていた。まさしくナショナリズムだった。

国民一人一人……とくにこの場にいる議員たちの場合言うまでもない。

そういった国民がいる中で、誰か一人を自国の指導者に立てなければならぬ。当然、意見は左から右まである。誰を立てても国民は採めるだけだ。

そして、私のような……二十五才の若すぎる男が指導者になろうとしているのだから、こうなるのは仕方ない。

議場の雑音のボリュウムが一段階下がってきたとき私は話し始めた。

「私、ウォール・グリーンはユマイル民族戦線議長に就任することになりました。この国の最高指導者になった私は、祖国の永遠の発展を達成することを国民とお約束いたします」

「何が約束だ。戦争の危機を煽る戦争屋が。国民の生活が第一だ！！」

突然左側からヤジが飛んできた。見ると野党に転落した労働党の議員の一人だった。

「戦争の危機？我々が住んでいるこの大陸、フェーニング大陸はユマイル民族戦線、フェーム帝国、ネルシイ商業諸国連合の三国が群雄割拠しています。これが現状です。

我が国、ユマイル民族戦線は間違いなく最弱！！人口も領土も経済力もすべてが劣っています。国力増強がなければ、そもそもわがユマイルが併合・侵略され消滅します。国

民の生活の話など消えてなくなってしまうでしょう」

私の一言で下火になっていたように見えていた議場がまたボツと燃え始めた。一度燃え始めた勢いはなかなか止まらず、与党ユマイル保守党、野党ユマイル労働党のそれぞれの議員たちが罵り合い、あるいは睨みあっていた。

「第一次フェーニング大陸大戦の惨劇から百年近く。勢力均衡によって保たれてきた平和は、超大国フェーム帝国の落日とネルシイ商業諸国連合の台頭で激変しています！！国力で劣る我が国はいち早く工業化を推し進め、民需を犠牲にしても軍拡・鉄道網を確立してまいりました。しかし、軽武装のネルシイ商業諸国連合が軍拡路線に傾けば均衡が完全に崩れるでしょう。今戦いの準備をしなければ、我が国など一瞬で植民地です！！」

私が喋れば喋るほど、騒音は大きくなった。私の話が彼らに伝わり、彼らはヤジを飛ばし、ヤジはこの議場いっぱい共鳴して増幅されている。

「軍拡と工業化の強化が急務です。そして、進まない政治からの脱却のため中央集権化を推し進めなければなりません。議会でのくだらないパフォーマンスよりも、素早い行動です。高度に統治された、迅速な意思決定が必要なのです。」

最後にこの言葉を示させていただきます。大陸統一なくして発展なし！！」

与党保守党の議員はみな立ち上がり、私に拍手と笑顔を送る。労働党の議員は激しいブーイングを浴びせ、顔はみな変顔大会にでるかというくらい酷い有り様だった。彼らにとって私は害悪でしかなかったのだろう。中には立ち上がり私に近づこうとしてくる議員もいた。

「……ウォール……ウォール起きてよ」

「う……ん……」

夢と現実の境界というのは実に気持ちが悪い。夢だと自覚してしまっているのだから、夢の続きは見れない。けれど現実に戻るのは意識があと少し足りていない。

もどかしい時間な気がする。

起きると近くに女性の顔があった。すらっとしたシャープな顔、目元もきりっとしていた。無造作に切られた短いベリーショートヘア、髪はつやがありさっぱりとしていた。私は机に突っ伏して寝てしまったようだ。

「お疲れみたいだね、ウォール議長」

「……ああ。ハンナ諜報長官」

ハンナ・オンバーン。私の政権下で諜報長官を務めている。そして幼馴染でもある、年齢も私と同じ二十六才だ。

「何か夢でも見たの？」

「議長就任演説を思い出していた」

「あったね」

「一年も前のことになってしまった」

「もうそんなに経つんだね。一年かあ……」

ハンナがしんみりと言った。

「そうだな。とても一瞬に感じる」

「ウォールは何も変わっていないの？一年前と」

「変わっていない？」

「ええ、『大陸統一なくして発展なし』って言葉」

私はハンナの問いにまっすぐと捉えて答えた。

「何も変わっていない。我々の手で新しいフェーニング大陸統一国家が必要だと思う。」

大陸の未来のために」

「……どうして？」

「弱いものが踏みにじられないためだ。争えば必ずそうなる。みんなが人間らしく生きるには平和な社会を実現する必要がある」

「大陸の統一は容易じゃない。必ずその過程で争いが起きるのに、ウォールはどうして統一したがるの？」

「未来の子供たちに、このだらだらとした争いを続けさせないためだ」

「そっか」

そこでハンナの言葉は止まった。うつむいて、何も言わず考え込んでしまう。

時々何を考えているのかよくわからないことがある。私は他人の気持ちを察するのが苦手だが、ハンナの場合には特にそう感じる。近しく信頼できる人間であるはずなのだ。

「何が用があつてきてくれたんじゃないか？ハンナ」

役職をつけない「昔の呼び方」にハンナは嬉しそうにほほ笑んだ。

「ごめん、忘れていた。そろそろ会議の時間だよ、少し早いけど」

会議。という、行政調整会議のことだろう。

国権の最高機関たる、ユマイル国民議会。そして、そのトップでありユマイルの国家元首に当たる"ユマイル国民議会議長"は司法・行政・立法・軍事を掌握する。

具体的には議長の下、立法はユマイル国民議会、行政はユマイル行政機関、司法はユマイル司法機関として存在しているのである。

「そうだな、そろそろ行こうか」

ドアを開け議長室から出ると、ハンナは後ろからついてきた。いつもそうだ、彼女は私の後ろを歩きたがる。本当は私の前を歩いたって問題ないほどの、素質と能力を持っているだろうに。

並んで歩くと幼き日々を思い出す、かつてハンナのほうが少し身長が高くて、それがなんとなく恥ずかしかったのを覚えている。

会議室には皆スタンバイ状態だった。

議長席は奥の机の誕生日席。無駄に長い机のせいで人と人との間は尋常ではなく遠い、別に病氣療養をしているわけでもないのになぜそんなに距離を開けてしまうのか。真つ赤に染められたカーペットと中央天井の高い位置にシャンデリアがある。

議長席の左隣には、エマリー・ユナイテッド軍最高指揮官代理。私を見るなり会釈をした。女性でとても若く二十六才という年齢だ。それでユマイル軍の最高位にいるのだから、私がエマリーを軍代理に任命したときは与党の保守党の議員からも反発があった。軍最高指揮官代理という職業は少々特殊で軍人でありながら、行政機関の一員でもあり、行政機関の調整会議に常任で参加することが許されている。

その隣にウージ・ボーン財務部長。四十二才、男。父はあの大物議員ザース・ボーン。銀行を勤めた後、保守党に入党し、議員として順当に出世している。特に才能もないどこでもいるであろう政治家だが、保守党からの圧力もあり財務部長に任命した。親の七光りだと世間で叩かれている人間だ。しかし、財務部長をトラブルを起こさず粛々と続けられている時点で優秀である。目立たないだけなのかもしれない。

私が議長席に座り、右隣にハンナが座った。

ハンナの隣に、フィール・アンブレラ外交部長兼庶務部長。女性で二十六才。髪が長く根暗で暗い表情をしている。貴族アンブレラ家の令嬢であり、とても高貴な出生だ。

こちらにも保守党経由でアンブレラ家から圧力があり、最初任命した時には不安だったが、さすが上流階級、教養と気品の高さは折り紙付きで外交もうまくこなせている。フィー

ル外交部長の経歴を見ると軍に入隊経験があり少々不自然に思った、本来名門貴族が軍など入らないだろうに。

会議室にはこの国の最高幹部五人が集まった。そして後ろにはそれぞれの部署の補佐官たちが控えている。

「今回の議題は緊張化するユマイル民族戦線・フェーム帝国間の国境紛争問題です。ハンナ諜報長官、説明を」

私が手で促すと、ハンナは後ろの官僚から資料を手渡された。

「昨年発生した第七次ユマイル・フェーム国境紛争は我が国の勝利で終わり、暫定的な国境協定でフェーム帝国側に大幅な譲歩を強いることができました。競合国家と位置付けるネルシイ商業諸国連合どころか、ユマイルにすら負けたフェーム帝国は屈辱的出来事と捉えられており、今後新たな国境紛争の可能性があります」

ハンナが説明を終えた。

「何か意見のあるものはどうぞ」

私がそう促すと、エマリー・ユナイテッド軍最高指揮官代理が口を開いた。

「私も第八次ユマイル・フェーム国境紛争の可能性は十分にあると思われます。国境付

近の軍備を強化するべきです」

口を挟んだのは、ウージ・ボーン財務部長。ゆっくりと抑揚のないのろまな声で喋りだした。

「しかし、あんな徹底的にやられたフェーム帝国が再び我が国に攻撃をしてくるなど、有り得ない。それにユマイル・フェーム国境を警備しているのは優秀な師団なんだろう？ エマリー軍代理？」

エマリー軍代理に視線は向けられた。

「ええ、そうです。ですが、徹底的にやられたフェーム帝国が軍の近代化に乗り出す可能性は十分に考えられます。国境紛争を全面戦争に発展させないため、争いを未然に防ぐためにも軍事力を誇示する必要があります」

国境紛争は戦争ではないと、近代フェーニング大陸で扱われている。そのため第一次フェーニング大陸大戦以降、公式的には「国家間の戦争」は一度も起きていないのだ。

しかし国境紛争が長引き両者が引けなくなれば、動員がかかり戦争状態に突入してしまうだろう。衰退のフェーム帝国とユマイル民族戦線が潰しあえば、ネルシイ商業諸国連合が完全に覇権を握ってしまうのは明白。すでにネルシイ商業諸国連合はフェーム帝

国を経済力で抜き大陸一位なのだから。今、国境紛争は起きないほうがいい。

ウージ財務部長は反論した。

「今の時代に皇帝を置いて騎士だのあるいは教会だの、そんな中世の亡霊のような国に火薬が扱えるとは思えませんな」

ウージ財務部長は馬鹿にし高笑いをした。

「しかし、ウージ財務部長。油断は禁物、万全を期すべきです」

「万全といいますが、国予算には限りがあるのです。師団を移動させるだけでも随分と金がかかるんですよ。推測でことを運ぶわけにはいかないでしょう」

「何かあってからでは遅いではありませんか」

エマリー軍代理とウージ財務部長の議論は平行線のままだった。

「ハンナ諜報長官、フェーム帝国の近代化はどうなっているのか？」

「実際第七次ユマイル・フェーム国境紛争以降、フェーム帝国が近代化に着手しているのは本当。けれど諸侯・貴族やあるいは王族たちの強い反発にあって難航している。急速な近代化はないと思う」

「急な近代化がないなら要らないのではないですか、追加の師団なんて」

ウーヅ財務部長がここぞとばかりにハンナの説明に乗ってきた。

「待ってください……！」

恐る恐る声を出したのはフィール・アンブレラ外交部長兼庶務部長だった。

「外交部としては……緊張を高めない程度での国境の軍備増強は賛成です……。軍事的背景があればフェーム帝国との交渉はやりやすくなると思うので……。彼らフェーム帝国は我々ユマイルを見下しています。軍事的対等性は必須です」

これで賛成派はフィール外交部長、エマリー軍代理で二人か。

「ハンナ諜報長官はどうなんですか？」

「私？私は賛成ですよ。そもそも、ウォール政権の目標は大陸の統一なんでしょう？第八次ユマイル・フェーム国境紛争で負けたなんて大陸統一が夢のまた夢になるし、世論や議会が許さないと思う」

ハンナの主張は一理あったし、私の考えを代弁していた。思わず目が合った時、ハンナは私にウイंकをしてきた。まるで私の考えがお見通しであるかのように。

「ハンナの言う通り、ここで国境紛争が起き、負けるとなれば統一どころではない。国境の軍備は強化する」

少数派……というより唯一の反対派に回ってしまったウーヅ財務部長は居心地悪そうに唸った。

「といっても一体どれくらい師団を増やすつもりですかね？」

ウーヅ財務部長の質問を私は目線でエマリー軍代理に投げかけた。

「理想は五師団なのですが……」

五師団という単語を聞いた途端、ウーヅ財務部長は露骨なしかめっ面をした。

「五師団とは一体何事だ。軍はどれだけ金を食いつぶせば済むんだ」

ウーヅ財務部長の怨念じみた声にエマリー軍代理は安心させるよう微笑んだ。

「二、三師団増やしていただければありがたいです」

エマリー軍代理は私のほうを見ってくる。

「二、三師団か。なら可能だろう。首都付近駐在の師団を転用しよう。ウーヅ財務部長もいいですか？」

「まあ、その規模ならば悪くないですかね」

ウーヅ財務部長は洪々縦に首を振った。

「ありがとうございます」

エマリー軍代理は私に深々と頭を下げてきた。規律や礼儀というものを重んじる、彼女らしい行為だった。

「しかし内地の師団を減らしすぎると暴動や、あるいは戦線を突破された時の戦力の厚みが減るわ」

ハンナ諜報長官の私は指摘にうなづいた。

「ああ、本来好ましくないんだがな」

「だから、軍は師団数増加を提案してきましたんです。現在の三十師団ではこの先足りません。十とまではいかなくとも、五師団くらいは増やしていただかないと」

エマリー軍代理のポジショントークだった。しかし間違っただけでないと私も思う。

「その話は今与党と調整しているのだから」

「保守党ですか？調整って、前もそう言っていますませんでした？」

「いや、党内でも財政規律派が多いみたいで」

「ああ、なるほど。そうなんですな」

エマリー軍代理は当てつけのようにウージ財務部長をにらみつけた。

「何かね？」

ウーヅ財務部長は心底不快そうな声を発した。

「いいえ何も」

エマリー軍代理は平坦な声でそう答えた。

「そういうわけだ。国境付近に……三師団ほど増強する。首都付近の師団を転用。エマリー軍代理は私に事後報告をするように。あと国境付近で軍事的な動きがあればすぐに私にも報告してくれ」

「分かりました」

「フィール外交部長はフェーム帝国とのパイプを維持するように。国境の軍備増強で反発してくるかもしれないが、出来る限り刺激しないでほしい」

「了解です……」

「ハンナ諜報長官は継続してフェーム帝国の諜報活動。あと、ネルシイ商業諸国連合が怖い。彼らは今や大陸一の大国になってしまった。ネルシイで軍拡の機運が高まらないように工作してほしい」

「了解。でも私たちが刺激しなくても、フェーム帝国がネルシイを刺激するのよね。そればかりはどうにもならないから」

「ああ、そうだな。フェーム帝国を意識したものとはいえ、ネルシイが軍拡を始めれば我が国もとぼちちりを食らうのは間違いないからなあ……」

私は憂鬱な気分になった。

「とにかく今回の行政調整会議を終える。お疲れ様です、各人解散」
私の掛け声とともにそれぞれ立ち上がり、会議室を離れていった。

大きな個室にはピアノと机が置かれていた。演奏者によるピアノの演奏は穏やかで気に障らない。皿にポツンと白身魚のフレンチ、横にはフォークとナイフが置かれている。軍の食堂や大衆定食だのを食べてきた庶民の私にとっては、随分と物足りなさを感じる。目の前には白いひげと、針金のように固そうな髪を持つ初老の男。彼こそが、オードリー・クロス ユマイル保守党党首、六十二才のベテラン議員である。彼の後押しが無ければ、このウォール・グリーン議長誕生は決してあり得なかっただろう。

そして行政調整会議を終えた日の夜、私はこうしてクロス党首と会食をしているのである。指導者は夜も昼も仕事だ。まあ、私が議員宿舎に帰ったところで、何もすることがないので仕事があるのはありがたいが。

「政権運営は順調かね？」

クロス党首の質問に私はうなづいた。

「もちろんです。これも与党・保守党の協力の賜物です」

「謙遜するな。一年前の第七次ユマイル・フェーム国境紛争の時、我が保守党も追加の師団派遣に懐疑的だったからな。その時追加の師団派遣案を押し通し、勝利を飾ったのは君の成果だ、誇っていい」

「ありがとうございます」

厳しい逆風とあるいは期待の目の下で、発足した我が政権の下で最初に起きた出来事が、第七次ユマイル・フェーム国境紛争だった。ここでの勝利が脆弱な基盤だった我が政権の支持を強固にし、ナシヨナリズムを一層高揚させ、政権としての地位を確立することに成功した。

「第六次ユマイル・フェーム国境紛争での敗戦を引きずる我々議員の老人たちは事態の加熱を恐れて、軍の追加派遣を渋った。きつとワシらには負け癖がついてしまったのだろう」

クロス党首は寂しそうに呟いた。

「君は第六次ユマイル・フェーム国境紛争の時、軍にいたんだっただな？」

「ええ、当時は二十才……六年前です。ユマイル陸軍高等学校前期課程を卒業して、中尉として第六次ユマイル・フェーム国境紛争の際に従軍しています」

「君がのっている新聞を見たよ。戦死した中隊長に代わって隊を指揮してフェーム帝国軍の侵攻を食い止めた『英雄』だと」

「『英雄』だなんてそんな。……あの時は必死でした、数少ない兵数と劣悪な兵站、反攻など夢のまた夢でした。戦略的に見れば、領土を失った第六次ユマイル・フェーム国境紛争は敗北だと言わざる負えません」

「ああ、だが君たちが抵抗してフェーム帝国軍を食い止めなければ、もっと多くの領土を失っただろう。それにしても君は二度のユマイル・フェーム国境紛争に深く関わっているわけか」

「ええ。第六次ユマイル・フェーム国境紛争の後、有名になり保守党に入党しています。第七次ユマイル・フェーム国境紛争の時はおかげさまで、政権の支持を強固にできました。皮肉にも二回とも助けられています」

私は苦笑いをした。

「それは素晴らしい。だが油断は禁物じゃ」

クロス党首の言葉に私はうなづいた。

「もちろん、国境付近に三師団派遣することをエマリー軍代理に指示しました」

「おお。しかし、内地に駐屯する兵が減れば不安ではないか？」

さすがクロス党首、サクサク話が進む。

「そうですね。だからこそ、我々は師団数の増加をやりたいわけであって」

私はここぞとばかりに営業をかける。

クロス党首は苦い顔をした後、考え込んだ。

「今の軍事力では大陸統一どころかではありません」

私は少し前のめりになって促した。本心だ。衰退しているフェーム帝国でさえ、師団数だけ見ればユマイルのほうが少し上回る程度。人員が足りない。

「まあ我が保守党のほとんどの議員も軍拡にはおおむね賛成だ。今の不安定な安全保障環境を考えれば合理的だからな。日和見主義の労働党は知らんが。問題は増やす師団数の数だ。グリーンくんは何師団増やしたいと思っているんだ？」

グリーンくんと久しぶりに呼ばれた気がする、普段はウォールと呼ばれることが多い

ため意外感がある。ラストネームで呼ぶのはユマイルの年配の人の特徴だ。

覚悟を決めて言った。

「十師団です」

微妙な顔で押しとどまっていたクロス党首の表情が崩れた。

「十師団、そんなにか。それとも、軍は狂っているのか？」

クロス党首は困惑しながら語る。

「軍の要求ではありません、いやエマリー軍代理も師団数増加を言っていますが、彼女の要求は五師団です」

「ならばなぜ？」

「エマリー軍代理は大陸統一を視野に入れていないのでしょう。フェーム帝国を併合するにはあまりに兵力が足りません」

「君はフェーム帝国を併合するつもりなのか？」

クロス党首は恐ろしい顔をして私に尋ねた。低い声と鋭い目つきで私を見つめ……いや睨んでくる。これが長年政界を生き残り与党の党首に居座る“老兵”の本性だと確信した。

「勿論です。併合の仕方、タイミング等は何も決まっていますが、大陸統一はわが政権の"公約"ですから」

「労働党どころか与党・保守党の一部でさえ君の言う"公約"、大陸統一には懐疑的だ。ワシの知り合いの議員が言っていたよ『国民の支持を得たいがためのパフォーマンスだっけな』」

「その方は常識をお持ちだということですよ」

私の言葉は皮肉ではなかった。実際、大陸三国の中で最弱国家のユマイル民族戦線が大陸の統一など"狂っている"としか言いようがないだろう。だけれど、私はその狂った夢を見続けている。その夢を実現するためには犠牲と覚悟と権力が必要だ。

「二十万人規模の増員など民需を圧迫するのではないかね。民需が減り国力が停滞すれば、結果的に軍に割けるリソースも減ってしまうのではないか」

「クロス党首のご指摘はごもっともです。が、大陸を統一しマーケットの統合が行われれば、我が国……いやわが大陸の経済は大幅に向上します」

「軍政による支配で自由な経済発展ができるとは思えんが」

「軍政による支配などしません。大陸統一は急進的なものでなく、ある程度の自治を認

めた"ユマイル主導の連邦制"でおこないます」

「なるほど」

「無論、統一の主導権は争われるでしょうから戦争は起きると思います。ただ、かつての……フェーム帝国のような暴力と差別による圧政は行いません」

「具体的な策は？」

「ユマイル民族戦線、フェーム帝国、ネルシイ商業諸国連合の三国で国際会議が開かれます。その時、わがユマイルは関税同盟、つまり相互の関税の軽減を提案する予定です。それが"フェーニング連邦"の原型になることでしょう」

クロス党首は目を閉じて考え込む。外からの情報は一切遮断され、喋りかけるどころか、小さな物音一本立てるのすら許されない気がした。ピアノの音だけが規則的になり続ける。

「面白い。ワシが見込んだだけのことはある。十師団の増加の件は我が保守党に任せなさい。必ず実現させる。国際会議の良い土産話を期待しているよ」

「で、師団数増加の予算案を保守党が提出してくれることになったわけですか」

後日の朝、エマリー軍代理と二人で会食を行い例の話を報告した。また会食かとつくづく実感する。政治家というものは会食して根回しすることが仕事だ。国民が見る美辞麗句と激しい言葉の熱い演説よりも、緊張で味もわからないのに高級料理なんか用意して、口が裂けても国民に言えないことをこそそそと言ひ合いお互いの"権益"を害さないように調整する。中世の騎士たちを率いる王様など、もう終わった時代の話だ。

「さすがクロス党首だ。ちゃんと話を理解してくださる」

「ちゃんと五師団増やせましたか？また、減らされましたか？」

「ああ、聞いて驚け。五師団どころか、十師団増やせることになった」

エマリー軍代理は驚いた顔をしてこちらを見た。

「十師団？私、そんな話をしていませんけど」

「五師団増やしたところで大陸の統一を考えれば、焼け石に水ですから」

「……ああ、ウォール議長は大陸の統一を掲げていましたね」

エマリー軍代理は無表情で言い放った。

「そういうわけだから、新兵の採用と訓練を頼む」

「採用と訓練は議会で予算案通ってからじゃないと無理です。給料が払えませんか」

エマリー軍代理はピシヤリと否定する。彼女は規律を重んじるが、それゆえ柔軟な発想が苦手な気がする。軍人だからむしろこのくらいがいいのかもしれないが。

「保守党は議会で多数派を占めている。予算案は通る」

「十師団増やす予算案なんて、保守党の造反者がです。通るか不透明です」

「クロス党首は『必ず実現させる』と言っていた」

「そんな口約束なんの効力があるんですか？」

「……ちようどよかった。エマリー軍代理は今日の新聞を読みました？」

「いいえ、全く。職場で読もうかと思ってバックに入れてきました。一面くらい読めばよかったですね」

私は地面にあるバックから新聞を取り出し、朝刊一面を見せる。

「クロス党首「師団増加は党の総意 必ず実現する」 党内引き締めか」

エマリー軍代理が律儀に見せた朝刊一面を読み上げてくれた。全面にクロス党首の発言がのっている。

「国民に対してここまで言うておいて実現しなければ笑い話だ。ウォール・グリーン政権はクロス党首によって作られたも同然、彼が党首から引きずり降ろされて保守党の

バックアップがなければ、わが政權はレームダック^{死に体}になる」

「つまり何が言いたいんですか？」

「法案が通らなかつた場合など考えなくていいということだ」

エマリー軍代理は少し考え込んだ後

「分かりました」

と言つて頷いた。

「ユマイル・フェーム国境はどうなっているんだ？」

「相変わらずきな臭いです。フェーム帝国側も一定数軍を配備していますから」

「そうだろうな」

「ただ、大きな変化は見られないようです」

「それは良かった」

ひとまず安心だ。第八次ユマイル・フェーム国境紛争なんて起きた日には、また私が夜も眠れない生活をしなければならなくなるからな。精神的に良くない。

「むしろ足元に注意したほうがいいかと」

「足元？」

「ユマイル陸軍にはタカ派がたくさんいますからね」

「軍人には政治的中立性が求められと思うが、憲兵は機能していないのか？」

「もちろん機能していますよ。だけれど、彼らも人間です。グレーゾーンじみたことをコソコソやっているのを制御するのは難しいと思います」

思わずため息をつく。

「確か参謀本部にもいたよなあ……。なんか強烈な女の子が」

「参謀本部作戦課長のミュー・フラワー陸軍中将ですね。最近参謀本部付きになりました」

「ああ、童顔なのにビックリするくらい極右思想だった。おいくつでしたっけ？」

「十八才ですよ。陸軍大学を首席で卒業したエリートコースです」

「実戦経験は？」

「ありません。入隊後すぐに受験資格を取れて、ユマイル陸軍高等学校前期課程、ユマイル陸軍高等学校後期課程、ユマイル陸軍大学とエスカレーターで中將になっています。ずっと成績優秀者でして、特に筆記試験はすこぶるよかった、とか」

「実戦経験ない奴が作戦課長なんてやって大丈夫なのか？」

「さあ。兵站課長やられるよりマシですけどね。本当は参謀本部なんていないで、実戦経験を積んでほしいと思ってるんですが、私が強く言える立場じゃないですね」

エマリー軍代理はため息をついた。

「……エマリー軍代理はユマイル陸軍高等学校後期課程止まりか」

「そうなんですよ。陸軍大学を首席で出ている彼女は、陸軍高等学校後期課程から上がってきた私の話なんてまったく聞いてくれないでしょう。私も陸軍大学に入るキャリアを考えていたのに、どっかの誰かさんがいきなり軍代理に指名してきたので、狂いまして」

私は思わずそっぽを向いてしまった。

そらしていてもエマリーの恨めしい視線を感じることができた。

「私からも質問いいですか」

「どうぞ」

「ウォール議長もかつては軍にいらしたとか？」

「ええ、一応」

「どうして軍を辞めて政治家になったんですか？」

エマリーの問いに私は少し考えてから答えた。

「不毛な争いに終止符をうつて、人間が人間らしく生きられるようにするためです」

「『人間が人間らしく生きられる』。左派の労働党みたいなことおっしゃるんですね」

「労働党とは違いますよ。彼らの言う、軍隊をなくそうだの、あるいは工場をなくそうだの、貴族を潰そうだの、そんなことをしたところで生活は悪化するか、それに代わる新しい何かができるだけです。人間社会には結局、軍隊も工場も貴族も必要なんです。だけれど、それがあるから『一般市民が人間らしく生きること』ができないわけではない。国力を増強し資本階級の下経済を発展させ、それを庶民にいきわたる様に政府が調整・規制する」

「それが大陸統一とどう結びつくんですか？」

「経済は需要と供給で成り立ちます。大陸統一による経済統合は需要と供給の両輪を回すでしょう。フェーニング大陸の人々への大幅な豊かさに繋がります」

「結局のところ、金と？」

エマリーの若干嫌味のような意地悪な問い。

「豊かさとは結局、労働者たちの所得です。私は拝金主義者ではないですけど、その問

題から逃げることはできません」

「そうですか。『フェーニング人権論』とだいぶ違いましたね」

『フェーニング人権論』。人が生まれながらにして人間らしく生きることのできる権利を持っていると主張した本だ。労働者階級の人々に愛読され、左派・労働党の支持者たちにとっては「聖書」と言ってもいいかもしれない。

『フェーニング人権論』の著者は思想家ですから。それを現実にとし込むのが、私たち政治家の仕事です」

私がそう言うとエマリー軍代理はうなづいた。

「お話が聞けて良かったです。軍人は政治的中立性が求められるのに、上司に当たる政治家を選ぶことができませんから。仕事とは言え、無能な政治家のために死にたくはないと思うのが人情です」

「ウォール・グリーンは命を捧げるに値する政治家でしたか？」

「軍人は最高指揮官の命令であればいつでも、たとえ時の政権が誰であっても、命を捧げますよ」

エマリー軍代理らしい模範解答が返ってきた。確かにそう答えられたら、それまでだ。

そう思っている

「……個人的にはそうやって現実を受け入れつつ、理想を捨てない考え方は好きです」
エマリー軍代理が珍しく小さい声で言ってくれた。声がこもっていて、まるで照れているようにも聞こえた。

「ああ、なら良かった。ありがとう」

仕事も終わり議員宿舎に帰ってきたときのことだった。私の部屋から灯りがともっているのが分かり、察した。

鍵でドアを開け、中に入ると、彼女が待っていた。

私のベッドに座り、ツンと唇を伸ばして、集中して読書に励む彼女の姿だった。その横顔は力強く、肌は健康的に日焼けしていて、唇は慎ましく薄い。

私はその少し動いた唇から目を離すことができなかった。

だが、そんな時間は永遠に続かない。ドアの音に気付いた彼女は私のほうを見て、首を傾けてほほ笑んだ。

「おかえり、ウォール」

ハンナの声は昔のままだった。声変わりしない女性だからだろうか、それにしても少女時代と声あまり変わっていないということは珍しい気がする。昔から凜とした、透き通った声でかっこいいのにどこか少女らしく可愛げもあり好きだった。

私は変わってしまった。声変わりが起きて、低く野太い声になってしまった。可愛げのある高い声は、私にはもう出せない。

「ハンナ、また私の部屋に入ってきたのか」

私の問いに、ハンナは合鍵を見せてくれた。私の部屋の合鍵を持っているのは幼馴染の彼女だけだ。

「何か用か？」

「用が無いなら、入っては駄目？」

「駄目じゃない」

私はそう答えると、書斎に座った。バックから仕事の資料を取り出した。今日の仕事は終わったが、明日の分まで目を通しておきたかったためだ。

後ろから音がした。人影が私の後ろに近づいてきて、肩を優しくなでてくれる。まるで死んだ母親が病気の看病してくれたあの時のように

「ウォール頑張りすぎじゃない？少しは休んだら？」

「することがないしな。休日をもらっても時間を持て余すだけだ」

「……そっか」

すると彼女の細い手が私の肩を揉んでくれた。

「肩を揉むくらいいいでしょう？」

もまれると痒いような気持ちのいい感覚を得られた。揉まれるたびに、自分の内なるものから疲労が飛び出て排出しているような感覚に襲われる。揉まれても揉まれても、疲労は出てく、むしろ増えているような……。

そこで私は気が付いた、"ああ……私は疲れていたんだな"。

思わずうつむいてうつとりとした目をして、思考が止まった。それから数分……いいや数十分はそのままになってしまった。

疲れがだいぶ楽になったとき、私はもう仕事をする気分ではなくなってしまうていた。

「ハンナ」

「うん？」

「久しぶりどこか食べに行くか？」

振り向いていないため、ハンナの表情はわからない。

「うん！」

彼女の声色は明るくうれしそうで、喜んでいるのが分かった。

いいや……私が彼女が喜んでいてほしいと願っていた。

「どこに行くの？」

「そうだな。大衆食堂がいい。もう高級フレンチはウンザリだ」

ハンナは笑って答えてくれた。

「そうだね。私ももう高いものは食べたくないかなあ」

「……こんなこと国民に聞かれたらスキャンダルだ」

「本当に。庶民のころは高級料理に憧れあったけど、こんな形で食べるとね……そもそも味わからないし」

「ああ。交渉しながら食べるご飯なんて味が分かるわけがない」

「どこか当てはあるの？」

「いい場所がある。安いけど美味しい場所だ」

そういうと私は部屋を出ようとしてふと思った。ハンナが部屋着だったのだ。

「ハンナは着替えるか？」

「え？うん、そうだね」

「分かった。部屋までついていくわ」

「え？どうして？」

「心配だし」

「心配ってよく部屋着で議員宿舎歩いてるよ、私」

「それが心配なんだよ。気をつけろ」

「ふーん」

部屋を出て、ハンナの部屋へ向かった。ハンナの部屋……というか行政機関の部長たちと議長用の部屋は近いため一瞬だったが。

ハンナが部屋に入って私は外で待つことにした。ドアの前で待つとまるで自分が不審者な気がして気が気じゃない。すると足音がして、思わずビクツとしそちらを見た。

歩いてきたのはフィール外交部長兼庶務部長だった。

「あ、ウォール議長……」

フィール外交部長は小さい声で言うと、私に会釈をした。

「フィール外交部長か。ご帰宅ですか？」

「はい……」

「お疲れ様です」

「あの……ここハンナ……諜報長官のお部屋ですよ？」

「ええ」

「どうしてここに？」

「ハンナ……諜報長官と食事に行くことになってまして」

役職をつけるべきか迷ったが、フィール外交部長とプライベートでの接点があるわけではないのだから、ハンナを役職付けで呼んだほうがいいだろう。

なんか誤解ありそうだし。

「ハンナ諜報長官と……」

フィール外交部長は怯えたような不快感の漂う声色で呟いた。

「何か？」

脅かすつもりは無かったが、意味深長だったために思わず聞いてしまった。

「いえ……！！別に深い意味はないんですけど……。あの、お二人はお付き合いですか？」

るわけではないんですよ……？」

「付き合い」という言葉に思わず私は動揺してしまった。付き合うというのは男女交際のことだろうが、私はそんなことをやったことがない。あんな未知数で抽象的な行為は、難しい。法律と慣例に縛られた政治の方が私にはよっぽど簡単なことに見える。

「付き合っているわけじゃない」

「そ……そうですか。良かった」

フィール外交部長は安堵した声を出した。

するとちょうどドアが開いてハンナが出てきた。

「待たせちゃったね、ウォール。行こっか」

ハンナが出てくるなり、フィール外交部長は露骨に動揺した後、何も言わずにそっぽを向いた。元々フィール外交部長はお淑やかというか、内気な人間だが、ここまで動揺しておびえるのは珍しい。

いつも一様におどおどしているから、動揺するときは案外ないんだよな……フィール外交部長。

そのせいか私はフィール外交部長のことを凝視して固まってしまった。ただでさえ動

揺っていたフィール外交部長が、私の視線に気がついてまたそっぽを向いてしまう。

すると、腕に温かい感覚を感じた。振り向くと目の前にハンナの顔があり、私は思わずのけぞった。

「ハ……ハンナ……」

端的に言えば、私はハンナと腕を組んでいる状態になっているのだ。

「ずっと私のこと無視していたから」

「別に無視していたわけじゃない」

随分と拗ねている。声色、態度、言動から良く伝わってくる。ハンナがグイグイと

引っ張ってくる。結構な力で……流石軍上がりだけある、思わずよろけて引っ張られた。

「フィール外交部長、お仕事お疲れ様」

私の声は虚しく響き、私はハンナに連行されて行ってしまった。

私は少し連れていかれてようやく解放され、歩きながらハンナに尋ねた。

「ハンナってフィール外交部長と面識あったっけ？」

「調整会議で毎日顔合わせているじゃん」

ハンナが吐き捨てた。

「いや、それはそうなんだけど。プライベートとかあるいはそれ以前とか」

「さあ？」

ハンナは低いな声で答えた。いつもそうだが真剣な答えをする時、そうやって考えがよくわからない微妙な声を出す。真偽を悟られないためなんだろう。

しかしながら、今の問いで「さあ？」と答えれば答えを言っているも同然だ。

「それが答えか」

「私は『さあ？』としか言っていない」

それは単なる反復で、ハンナの言葉の意味を強調するためのものだろう。

「ああ、分かっている」

政治家や官僚というものは曖昧な表現を好む。言質を取られれば、それは義務となつて帰ってくるためだ。『有言実行』ができればかっこいいかもしれないが、できなければ政治家としての根本的信頼に関わる。『有言実行』のカードはここぞという時にのみ切るべきだ。

だけど

「私達は別に幼馴染で友達だ。ハンナに間違いや誤認があっても、私は議会で追求する

なんて真似はしない」

「友達……ね」

ハンナがつぶやいた。

そして俯いて沈黙が訪れてしまった。

「ごめん。ウォールには話したくない……絶対に」

ハンナはいつもの強く若干低い声で答えた。私はハンナの色々なことを知ってきたが、そうやって明確に拒絶されたのは初めてかもしれない。ちょっと驚いた。

「ハンナがそこまで言うなら分かった。話したくないのなら話さなければいい。私はハンナの意思を尊重したい」

「うん……」

ハンナが頷いてくれた。

「でも、仕事に影響が出るのは困るから、うまくやってくれ」

「今のところ出ていないので大丈夫。害はないのでスキャンダルをでっち上げる必要性を感じない」

「おいおい……」

大丈夫かよ……こいつら……。というかハンナとフィール外交部長が面識あったなんて初めて知った……知っていたら、こんなことしてないんだけど……。

今からでもどっちか罷免にするべきか……。

議員宿舎を出て、官僚・議員・財界人・高級将校しか入れない特別区を出ると、そこはユマイル民族戦線の首都"ユマイザル"の一般街になる。

出ようとした時、警備兵に止められた。

「お待ちください、護衛の者を付けますから」

「ああ、いいかハンナ？」

振り返るとハンナがしぶしぶ頷いた。どうやら二人だけの時間というものはないらしい。私たちが背負っている責任の重さを考えれば致し方無いことだが。

少し待つと警備の兵士がやってきて敬礼をした。彼らが敬語をしてくれるのだろうか。

行政区から歩いてまた十分ほど、陸軍高等学校のすぐ近くにそれはあった。裏路地の食堂だ。

「ああ、ここね」

ハンナは頷く。陸軍高等学校前期課程にいたころ、ハンナと二人で食べに来たところ

だ。

何も変わらない扉、薄汚い壁。あの時と何も変わっていない。

ドアを開けるこの音でさえ……。

「いらっしやい」

店主は私たちの顔すら見ず、言った。彼の癖だ。

「お久しぶりです」

私の声を聞くなり、彼の動作が凍り、固まり、数秒した後ゆっくりとこちらを見た。

「ウォール……ウォールじゃないか……」

店主が厨房からのしと出てきた。

「大きくなったな」

「……ええ。お陰様で」

「ハンナちゃんも別嬪さんになりよったな」

「どうも」

ハンナが恥ずかしそうにあいさつした。まるで子供みたいだ。ハンナはあんまり可愛いだの美人だの言われ慣れていない。

すると後ろから入ってきた警備兵を店長は一瞥した後、私のほうを見た。

「偉くもなかったようじゃ」

「……おかげさまで」

定食屋行くのに警備が付くわけだからなあ……。

「そのおかげでハンナちゃんは新聞には『鉄の女』だの『黒幕』だの『女帝』だの書かれていたけれどな、やりたい放題だ」

店長は「ガハハハッ」と笑った。前議長・労働党政権がスキャンダルで辞任したが、その情報を警察に流したのが当時国内防諜課長だったハンナだと言う話があるからだろう。大抵ゴシップ紙には黒幕として描かれている。

「ハンナは昔も今も根は優しいですよ。立場があるので仕方ないことですけど」

店長は私を見つめてきた。

「な……なんですか？」

「で、おぬしらどこまで進んだんだ？」

「進んだ……？ ええと我が政権発足後、国民総所得は十六パーセント上がり、鉄道普及率は八割近くになり、火砲の数は三倍近くに増えましたよ」

「そういうことじゃないんだよ……」

店長は呆れたようにつぶやいた。

「じゃあどうということなんでしょうか……」

「ほら痴情……」

「地上？ご安心ください、我が陸軍は完璧です」

「はあ……」

店主がため息をついた。

「あの……私たち付き合っていませんから」

ハンナが補足してくれた。

すると店長が目を丸くして

「お前らまだ付き合つたらんのか……」

とため息交じりに呟いた。

「店長。我々は食事に来たんですが」

「そうかい。まあ、立ち話もなんだ。案内しよう」

するとお座敷のある低いテーブルの席に案内された。座敷も汚い、壁も汚い、だが机

にゴミがないのは何とか飲食店として踏みとどまっている証だ。

「兵隊さんはどうするのかい？」

後ろから付いてきた二人の警備兵を見て言った。

「ああ、彼らは隣のテーブルにしていたけるとありがたいんですが」

「分かった」

むろんプライベートの食事なのでできれば二人で食べたいが、警備兵を遠くに置くわけにはいかないからな。彼らにはもしもの時に我々のことを守るのが仕事だし、守れなかったら彼らの立場が危ういだろう。

私とハンナの二人で一つのテーブル、そして警備兵二人が左隣のテーブルにそれぞれ座った。

「君たちも何か頼むといい。夕食まだなんだろう？」

私は警備兵のほうに話しかけた。

「しかし……」

「何も気にするな私のポケットマネーから出す、奢りだ」

二人の警備兵が困ったように顔を見合わせた。

「何も頼まないのに居座られても店は困る。それに仕事とはいえ、私たちの私的な食事に付き合わされるなんてたまったものではないからな」

私が笑いながらそう言うのと、ようやく彼らはうなづいてくれた。

「私たちも頼むか、ハンナ」

「そうね」

メニューを開くと、何も変わっていないくて、心が陸軍高等学校時代に戻ってあの感覚が呼び起された。

それはハンナも同じだったらしく、彼女も珍しく優しく微笑んでいた。

「期間限定ジャンボカレーまだやってるのか……」

詐欺じゃねえか、これ。

「本当にね。いつか終わるのかしら」

「閉店までこの期間限定メニューやり続けるんじゃないの……」

陸軍高等学校時代にはハンナと二人で挑戦したものだ。結局二人とも食べきったが、お腹がパンパンでもう当分カレーは食べたくない二人で誓ったのを覚えている。

何も変わっていないなら、既存の記憶が使えるはずと思いながら、パラパラとみてみ

る。揚げ物が美味しそうだ。

「ハンナは決まったか？」

「うん」

「じゃあ頼むか。すみません」

呼ぶと店主が出てきた。

「はいよ」

「私は揚げ物定食で」

「揚げ物定食ね」

「私は日替わり定食でお願いします」

「日替わりね」

店長が行こうとするとちょうど隣の警備兵も注文が決まったらしく呼び止められていた。

何を頼むのだろうかと思い、メニューを閉じながら聞き耳をたてていると

「高級魚介定食で」

吹き出しそうになった。横を見ようとしたが踏みとどまった。動揺がばれないように

しないと、いくら金持ちになっても、私は"発想が庶民"のままなんだと感じた。

政治家同士の会食で食べている高級料理などと比べれば圧倒的に格安だが、それでも高級魚介定食はこのお店で一番高い品だ。それにたいいてい経費で落ちるし、政治家同士の会食。

この警備兵……度胸があるな。

どうせ仕事で忙しくてお金はたまる一方だし、いいだろう。使う機会が無さすぎる。

「汁物定食で」

もう一方の警備兵は節度をわきまえているのかあるいは怖気づいたのか、汁物定食にしていた。

店内は騒がしかった。うるさくあるいは畳の上で無造作に胡坐をかいて新聞を読む客なんかもいた。ふとそこには四人の家族が私の目に入った。こんな店に来るのだから貴族や財界人ではないだろう、"首都の庶民"というのは、議長として贅沢な人間しかない特別区にいる私にとって新鮮だった。

母親、父親、娘、息子。四人家族だった。暖かく優しく団欒としていて、モデルケースにしたいくらいだ。時より話したり、そそくさと動いたり、笑ったり。

息子は「食べ方がなっていない」らしく、しばし両親に注意されているのがうかがえた。それは貴族階級のような病的なまでの徹底的英才教育でもなく、貧民のネグレクトのような放置でもなかった。娘の話を父親がうんうんとうなづきながら聞いている。この子供たちは親から愛されているのだと感じる。

私の視線が彼らに向いていることはハンナにバレバレだった。

「うらやましいの？」

ハンナは静かに聞いた。

「そりゃあそうだ。私たちの家族に愛なんてなかった。ハンナだって同じだろう」

「……そうだね」

「ウォールはほしくないの……その……家族とか」

ハンナの問いに私は少し黙って

「考えたことがない」

そう答えた。

「そっか。どうして？」

「どうしてって……。私にはやるべき事がある。それにそれが私のやりたいことでもあ

る。なんとしてもそれを成し遂げたい。誰もが本当は豊かに人間らしく生きることができるとはなにもない」

ここは大衆食堂なので「大陸の統一」などと言う言葉は出さないようにした。

「ウォールはすごいね。どうして社会の問題をこんなにも自分事として考えられるの？」

「私たちと同じ思いをする子供たちをこの先出してはいけなからだ。もう二度と……。そのために強い国家と経済を作る。土地と民を増やして。そうすればみんな豊かに暮らせる。きつと……そうなんだ……」

「……自分の幸せがほしいとは思わないの？」国民とか、「国家」とかじゃなくてハナは心配する声を出した。

「思わない。これから国家に生まれてくる何万、何億もの子供の幸せを考えれば、私の幸せなどあまりにちっぽけだ。彼らの幸せを考えたほうがよっぽど有意義だと思う」

ハナは微笑んだ。

「ウォールは……ウォールだね。優しいままだ」

あまりに柔らかな表情で、私は思わず目をそらした。

横から声がしてそちらを向いた。

「はい。揚げ物定食と日替り定食、お待ち」

店長が直々に持ってきてくれたのだ。

私の前に揚げ物定食、ハンナの前に日替り定食を置いてくれた。今日の日替わり定食は焼き魚と漬物だ。

唐揚げ定食、油をたつぷりと使いパリッと揚げ、歯ごたえのあるお肉を使っている。何よりも匂いでわかる。すべてを思い出させてくれる。陸軍高等学校からヘロヘロになって帰ってきたあの日のことも、帰りに雨が降ってずぶ濡れになったあの日のことだ。

私は唐揚げを口に入れた、噛んだ瞬間驚くほどの肉汁が飛び出してきた。慎まやかに囚われている高級貴族には一生分からない旨さだろう。

おいしい。工場労働者の給料三か月分の会食よりも、よっど美味しいし、何より味がわかる。会食相手がいない、相手の話も仕草も意図も背景も利害も求めているものも、何もなんにも考えなくていい。だって、目の前にいるのはハンナなんだから。

私がこの食事でするべきことは食べることだけなのだ。

「おいしいね」

ハンナが言った。

「ああ、おいしい」

私が心の底からおいしいと言えたのは数年ぶりかもしれない。特に議長になってから、よくわからん高級食材を上品に褒める苦痛な会食という作業をやらされてきたからな。

箸が自然に進む。自分の好きな時、好きなものを口に放り込んだ。箸が進めば自然と話も進む。

「覚えている？陸軍高等学校時代の成績」

ハンナが私に問いかけてきた。

「ああ、もちろん。ハンナは成績よかったよな」

「いや、そうかな……？」

「そうだろう？トップテン入りで卒業しているんだから」

「そうかもね。でもウォールだってそうじゃん」

「ああ。私たちは頑張ったからな」

「頑張ったからな」という言葉がどれだけ重いか、私たちにはその価値を共有できて

いた。あの頃はやはり厳しい訓練と教育の下、ピリピリとしていた。馬鹿みたいに走らされた身体訓練も意味不明な数学も、それらを超えられなければ"陸軍高等学校"を卒業できない。超えられなければ……

「あれ？私たちの陸軍高等学校前期課程の退学者っていたっけ？」

「うーん……四十人くらいいたと思うよ」

ハンナが少し食い気味に答えた。

「まあそうだよな……。あれだけ厳しければ。百人強入って四十名だから相当だ」

「そうだね」

そう言っているのはじから食べて飲んでいた。明らかに食べるペースがいつもより早い。出される量は多いのに、いつもより早く食べ終わりそうだった。

「ハンナは陸軍高等学校出た後、諜報部に出向か」

「ええ。ちょうどウォールがユマイル・フェーム国境の師団に送られたのと同じころね。その後、軍を辞め正式に諜報部所属になって、出世して今にいたるわ」

ここでハンナは言葉を止めて

「あの頃はウォールに会えなくて寂しかった」

とつぶやいた。

「ああ、私もだ。文通だけだと気持ちには伝わらない」

ハンナはうなづいてくれた。

他愛のない時間はいつまでも続かない。世の中は社会であり人間はやるべきことが付きまとう。山にこもる仙人でさえ、焚き火をたいたり、山菜をとったりしなければ飢え死にするのだから、結局それからは逃げられない。

ご飯を取り、話し続けた私たちに待っていたのは現実だった。

「そろそろ帰りましょうか。……大分お店に居座ってしまいましたし」

「ああ、そうだな」

横を見ると警備兵も待ちくたびれた感じだった。お仕事お疲れ様です。

店主に声をかけた。

「食べ終わりました。警備兵の分とハンナと私の分をお願いします」

「はいよ」

店主がやってきた。

「唐揚げ定食が600ユマイルカレンシー YC、日替わり定食が480 YC、高級魚介定食が

2100YC、汁物定食が450YC、計3630YCね」

うわ……高級魚介定食、相当な割合占めてるな。ちなみに、ユマイルカレンシYCは我が国の通

貨だ。

「分かりました」

そういつて私が払おうとすると、ハンナに止められた。

「ちょっと、私の分は私が払うよ」

「気にしないでいいぞ」

「そういうんじゃないかな」

「ハンナちゃん、ウォールも男の子なんだよ。ありがたく受け取ってやんな」

「店主は黙っていてください」

ハンナは言い放って、店主を排除していた。店主が一瞬おびえて、「うちの嫁と同じ目をおった……」とぶつぶつとつぶやく。

「ウォール、あなたと私は対等よ」

ハンナはまっすぐと私も見つめていった。

「……分かった。それが君の選択なら自分の分は自分で払うべきだ」

店主はなんかガツカリしていた。気にしないことにしよう、男が女に払い甲斐性を見せるという世間的常識を私もハンナも知っているはずなのだから。でも、それでも私はハンナの選択を尊重したかった。たったそれだけだ。

私が警備兵と私の分を払った。ハンナは自分の分を払った。

……まあ定食屋の食事なんて、ハンナも私も給与を考えれば誤差みたいなものだけど。それでもハンナは自分のことは自分でやることを選んだ。それはとても勇敢で正しい選択だと思う。

「長い間お邪魔しました。ごちそうさまでした」

「はいよ。またおいで」

店長が優しい声で見送ってくれた。

私たちは外へ出る。もう夜で暗くてあるいはちょっと路地裏のここでは居酒屋が稼働しだしていた。

……相当長居してしまったんだな。謝罪して正解だったし、なんなら追加料金の一つでも支払うべきだったかもしれない。

路地を抜けようとするとき、すっと酔っ払いのおっさん……おじいちゃんくらいだろ

うか、作業着を着た人間が私にぶつかりそうになった。慌てて警備兵が私たちの間に入る。

「お！」

すると酔っぱらいは私を指さして叫んだ。

「こいつは……ウォール議長ではございませんか」

こうして馬鹿みたいにでかい声で、指をさされると一般人という感じがして好きだ。

皮肉ではなく。ほとんどの国民は本来こんな感じなんだろう。特別区にいる高級将校だの貴族だの議員だの官僚だの……そいつらなんて本来一握りしかないんだ。

「すみません。先を急いでいるので」

と言い私が行こうとしたとき。

「おいウォール。おめえ、税金減らせや。あと退職手当……もっと出せんと酒が買えねえだろうが」

「十分財源を投下しているつもりです。今までが巨額すぎただけですよ」

「知るかそんなもん。どうせ大陸の統一だのようわからん夢物語に税金と溶かしているんだろう？ 税金泥棒がよ。わしらの働いた金なんだと思っとるんや、酒にや必要な

ぞや」

ところどころ……というか、結構な頻度で呂律が回っていない。相当酔っているな。するとハンナに後ろから肩を叩かれた。

「ウォール、相手は酔っ払いよ」

「……わかってる」

けれど、この酔っ払いこそがこの国の「庶民」の本心なのかもしれない。私たちだって貧困の連鎖から抜け出して、軍に入った時には周りや社会のことなんて全く見えなかった。

自分のことで手一杯で、他人を慮る余裕なんてなかった。

「予算には財源が必要なんです。あなたがお酒を買うための退職手当を支払うためには、経済を伸ばして税収を増やさないといけないんです」

「知るかと言うとるがい。今すぐだきんしゃい」

「それでは駄目です。ただでさえなけなしの予算を有効に使えなければ、ずっとこの予算不足は終わりません。現在の私たちが現在のために使っては未来の子供たちは何も変わらないんですよ」

「んなもの、わしらは"今日の酒"の話をしておる、"百年後の子供"なんか知るかな」

「誰かが"今日のお酒"を我慢して"百年後の子供"を考えなければ、"百年後の子供"もあなたと同じ苦しみを味わって同じことを言うことになります」

私は財布からお金を彼に恵むべきか迷って、止めた。

「私たちは豊かな社会を作り出して見せますから。だから……もう少しだけ我慢してくれると嬉しいです。きっとあなたも高いお酒が飲める日が来ますよ」

酔っぱらいの目を見て行つて、私たちは歩き出した。

「いいの？あんなこと言つて」

「私の公約だぞ。いいも悪いもない」

「ウォールは……大陸の統一が国を豊かになると思う？」

「もちろんだ。だからやっている」

「巨額な軍事費も急進的な工業化も国民への税負担も、戦乱による若者たちの血を天秤にかけても？」

ハンナの問いに私は歩きながら答えた。

「それらを天秤にかけても、プラスのほうが大きい。一時的に損であったとしても、私は大陸統一の先に豊かな社会があると信じている」

「なぜ、我がフェーム帝国がネルシイよりも後ろなのですか?！」

ユマイル民族戦線、フェーム帝国、ネルシイ商業諸国連合、三国の国際会議がネルシイの首都"ネルシイシティ"で開催された。

しかし、土壇場でトラブルが起き会議の開始が延長されている。

会議の席次が上座から順に"ネルシイ商業諸国連合、フェーム帝国、ユマイル民族戦線"と設定されていたためだ。大陸一の大国と自負するフェーム帝国としては許せないことで、フェーム帝国の大使がネルシイ商業諸国連合の大統領にネルシイ商業諸国連合とフェーム帝国の順番を入れ替えて、自分たちを上座にするように言っていた。

「これは元々決まっていたものでして」

フェーム帝国大使の怒号にネルシイの外務大臣、ビュー・オージがなだめていた。

ネルシイ商業諸国連合外務大臣、ビュー・オージ。三十一才、男性。政治家としては珍しい穏やかな顔立ちで親しみやすい顔立ちだ。実際選挙でも人気らしく、特に主婦か

らの人気が絶大らしい。

顔だけかと言われるとそうではなく、ネルシイ経済大臣の頃には交易の盛んな地域で減税を行って経済を活性化させようと試みるなど、優秀なやり手であることがうかがえる。

「決まっていた！！それはまた心外ですな。商人上がりのネルシイ商業諸国連合が伝統ある我が国より上であるなどと。思えば上がりだと理解できないわけですか」

フェーム帝国大使、ドルム・ドクル。五十三才、頭の真ん中あたりが剥けていて、決して品のあるとは言えない垂れた頬をしている。フェーム帝国の有力諸侯の一人で名門貴族である。王族の側近中の側近だ……というよりも、フェーム帝国の場合家柄が無いと"支配者側"にまわれないのだ。

諜報資料を見る限り、特段の功績があるようには見えない。特に諸侯として与えられた領民を自分の宮廷建設に駆り出した上、大規模飢餓を発生させてしまっている。よくクビにならなかったな……というよりも未だに中世の封建制を取るフェーム帝国に"無能だからクビ"というシステムは存在しないのだろう。彼もその家に生まれたから領主となり、彼の領民たちも支配されるのが当たり前だと思っている。

ちなみに、我がユマイル民族戦線は末席。経済規模・人口・領土とすべてのすべてで劣っているため仕方がないが、こうして外交の場に出ると現実を突きつけられる。

何よりも対外的にみるとユマイル民族戦線は"ユマイル民族"で構成された国だ。

フェーム帝国はユマイル民族は"下等民族"としか思っていない。これは外に出てみないと気づけないものだ。

結局フェーム帝国の激しい抗議は収まらず、順番を入れ替えることとなった。

上座から順に"フェーム帝国大使ドルム・ドクルとその書記、次にネルシイ商業諸国連合外務大臣ビュー・オージおよび秘書官、そして我がユマイル民族戦線からはフィール・アンブレラ外交部長と私ウォール・グリーン議長"だ。

「では会議を始めさせていただきます。皆様はるばる遠路お疲れ様でした」

開催国ネルシイのビュー・オージ外務大臣が着席後声をかけた。

「特にユマイル民族戦線からはウォール議長直々に出ていただけたということだ」

ビュー外務大臣の視線がこちらに向いてきたため会釈をした。

「ユマイル民族なんだからそのくらいして当然でしょう」

ドルム・ドクル大使が嫌味に呟いた。ちなみにフェーム帝国の皇帝様は首都に引きこ

もり中だ。"神々しい皇帝陛下がわざわざ外国に出向くのは不敬だ"などと理由付けされているが、実際は皇帝が離れている隙に反乱が起こるのが怖いのだろう。

「ドルム・ドクル大使。ユマイル民族に対する差別発言ですよ……！！明確に抗議します」

フィール外交部長がドルム・ドクル大使に怒鳴りつけた。

ドルム大使はそっぽを向く。

「まあ、話し合いを続けさせてもよろしいですか？」

ビュー外務大臣が困った口調で窘める。

「分かりました」

私がそう答えた。すでに抗議した以上、これ以上やるべきことはない。下手に粘っても、こいつら絶対謝罪しないだろうし。フェーム帝国とはそういう国だ。

「今回の議題はユマイル民族戦線が新たに提唱されている関税同盟の件です」

「ええ」

そう。ついに私の公約"ユマイルによる大陸統一"の第一歩、関税同盟による"大陸の経済統合"である。

この関税同盟によって多くの種類の関税の軽減・撤廃が決まる。政治的・精神的統合には程遠いが、それでも大陸の経済的統合という観点では大幅に前進するだろう。今までは関税のせいで割高な国内品に甘んじていたマーケットは、外国から持ってきた適正な品へと切り替えられる。それぞれの地域は自らの強みへと集中することができ、大陸の経済構造の効率化・生産性の向上へと推し進められるだろう。

専門家の中には、今条約が疑似的な大陸統一ではないかと言う人さえもいる。

「既に事務方で調整をしていますので、今回の話し合いは相いれなかった箇所の調整となります」

ビュー外務大臣が言い、話し合いが始まろうとしたとき、ドルム大使が書記とぼそぼそと話し出したのが見えた。

「どうされました？」

ビュー外務大臣の問いにドルム大使は不快そうな顔をして。

「わしらはそんな話聞いておりませんが」

と言い放った。

フィール外交部長を見ると、私は彼女に耳を貸した。

「既に事務方と話して、八割近くの軽減・関税撤廃措置で大筋合意しているはずですが……」

「誰と話した？」

「ワス・グラサ外交司です。フェーム帝国では外交大臣のポストに当たるはずですが、ちょっと聞いてみるか。」

「フィール外交部長はワス・グラサ外交司と調整していますが、伝わっていませんか？」

ドルム大使は鼻で笑った。

「ワス。なんでわしに話を通さないのか。わしのほうが家柄上だろう」

「ワス・グラサ外交司はフェーム帝国の外交責任者だとお聞きしましたが」

「名目上そうなっているだけだ。なぜわしのほうにも言わないのか」

「フェーム帝国の外交チャンネルは統一されていないということですか？」

「そうだ。皇帝陛下でもあるまい、なぜワスに決められなくてはならないのか」

うーん。フェームの後進性を舐めていた。彼らは外交の意思決定すら統合できていなかったらしい。

「ネルシイの方はお話は通っていますか？」

「ええ、もちろん。ただ鉄道部品の箇所は……」

ビュー外務大臣が頷いた。

「こちらで検討した結果、今回は譲歩しましょう。ユマイル・ネルシイ間の鉄道部品の関税率は撤廃ではなく4・5%に減税するネルシイ案で大丈夫です」

今回大切なのは関税同盟を成立させることだ。下手に関税率を争って成立しないということだけは避けたい。

「了解いたしました。……これで話すことは終わりですか。ほんの数秒で終わってしまいましたね」

ビュー外務大臣が微笑んだ。

「ええ。官僚の皆さんには頭が上がらないですね」

私はそう答えた。横を見るとフィール外交部長が誇らしげにしていた。それもそのはず、水面下での交渉を頑張ってくれたのはユマイル外交部の官僚たちなんだから。

「フェーム帝国は……」

ビュー外務大臣が言うと、ドルム大使は興味なさそうに一瞥した。

……他国を心配している場合ではないが、フェーム帝国は本当にあいつを大使にして大丈夫なのか。国の代表たる"大使"として国運を握っているにもかかわらず、あの悪ガキのような態度。

逆に私たちを油断させているのかとさえ思えてきてしまう。

「とにかく、わしはそんな話聞いていないので帰らせていただきます」

ドルム大使は立ち上がり、会議を出ようとした。

「ちよつと、ドルム大使！！会議は終わっていますよ」

ビュー外務大臣が呼び止める。

「我が国はネルシイ・フェーム国境紛争の捕虜返還を求めています。フェーム帝国側から何も返答をもらっていない！！」

ネルシイ・フェーム国境紛争。フェーム帝国はユマイルどこかネルシイとも国境紛争を抱えている。特にネルシイ・フェーム間の国境紛争に関して、フェーム帝国はとても挑発的に見える。経済力が抜かされたことに関する反発心なんだろう。

……本気でネルシイと戦争したら、国力や硬直した封建的な制度が原因でフェーム帝国が負けるのは目に見えているだろうに。愚かな奴らだ。未だに自分たちが大帝帝国であ

ると盲信している。

ドルム大使と付き添いの書記が去り、ビュー外務大臣と秘書官、フィール外交部長と私の四人が残される。

「どうなさいますか？」

ビュー外務大臣が私たちに爽やかに声をかけた。

大陸三国で関税同盟を構築することが、大陸統一への一歩だった。だが、今からフェーム帝国と一から調整などしていれば、条約発行はいつになるやら。

「分かりました。今回の関税同盟はネルシイ・ユマイルの二か国で発行しましょう」

私はそう提案した、フィール外交部長は驚いた表情でこちらを見る。フェーム帝国が一方的に会議から抜け、関税同盟から排除されれば"フェーム帝国"の後進性が露わになる。ただでさえ近代化・工業化に遅れるフェーム帝国が、関税面でも負ければ国力の差はより広がる。

「我が国も賛成です」

ビュー外務大臣もそう応じた。フィール外交部長は条約の正文を取り出して、フェーム帝国の部分を一重線で消す。

「本当にこれでいいんですかね……」

フィール外交部長はそう呟いた。

「いい。ここでチャンスを逃せば、大陸の経済統合は一生進まない」

正文をビュー外務大臣に手渡すときに私は微笑んで言った。

「我々はいつでもフェーム帝国を歓迎していますが、彼らは自分の意志で抜けた。そうですよね？」

ビュー外務大臣は私の問いに微笑んで返した。その微笑みというものは彼が主婦から支持を受ける"大衆受けする空っぽなもの"ではなく。悪く奥深い濁ったものを感じる、紛れもなく野望と自分の信念を持った"指導者"としてのものだった。

演説の時にこんな顔、彼は絶対にしないのだろう。

「もちろんです。フェーム帝国が関税同盟に加盟しなかったことは非常に残念です」

交渉は成立した。

大陸統一の足掛かりとなる条約は締結され、あとは批准を待つばかりとなる。そして、フェーム帝国は近代的な関税同盟から排除されることとなった。

朝起きると、そこはいつもの議員宿舎の天井と違う景色が広がっていた。ベットの質感も違う。そこで私が在ネルシイ・ユマイル総領事館にいることを理解した。

窓から外を見ると、ネルシイの首都"ネルシイシティ"の雄大な風景が広がっていた。多くの人、建物。それらはフェーム帝国と対等の領土・人口を誇る、ネルシイ商業諸国連合だからこそのできるものだろう。

「フェーム帝国は3億3000万人、ネルシイは2億9000万人だからな……。しかもネルシイは急速な経済発展に伴い、人口も大幅に増えている。相変わらずフェーム帝国は乳児死亡率が高止まりだから、人口が抜かされるのも時間の問題だろう」

ネルシイ商業諸国連合がフェーム帝国を人口で抜かせば、もう領土面積くらいしか勝てるものしかなくなる。

硬直したフェーム帝国はネルシイ商業諸国連合から見れば、資源の塊だろう。人的資源・鉱山資源、上が無能でも価値は変わらない。

そして、フェーム帝国という栄養の詰まった"餌"を食べ巨大化したネルシイ商業諸国連合に、我が国は手も足も出ない。

フェーム帝国は関税同盟から排除され、一層衰退するだろう。それは我が国にとって

いい事ばかりではない。フェーム帝国の權益をネルシイ商業諸国連合だけがもさばり食うことになれば、我がユマイル民族戦線とネルシイ商業諸国連合の格差がより悪化することになる。

……どうネルシイを弱体化するかが我が国にとっての死活問題になる。

コンコン。柔らかいノックがドアに響いた。

「どうぞ」

私が声をかけると、遠慮しがちにゆっくりと開いた。

「ごめんなさい……起こしてしまいましたか……」

現れたのはフィール外交部長だった。

「いいや、今起きたところだ」

私が声をかけると、フィール外交部長は困った顔をした。

「迷惑でしたら……」

「別に迷惑ではないから大丈夫だ」

……迷惑になるか心配ならば、来なければ良いだろうに。

そういえば同じようなことがあったな。

"用が無いなら、入っては駄目?"

かつてのハンナの言葉が私の頭の中を反芻した。そうだ、ハンナだ。ハンナはそういうグイグイ来るタイプだから……。

「何か用か？」

ハンナに投げかけた言葉をそのまま投げてみた。フィール外交部長はおどおどとして「いいや……。特に予定はないんですけど……」

なんとというか仕事中のフィール外交部長と大分印象が違う。それもそうか、ハンナも"ハンナ諜報長官"と"ハンナ"はだいぶ違うからな。

居心地の悪い沈黙が訪れる。

「あ、新聞です……！今日のネルシイの朝刊読みました？！」

「いや、今起きたばかりだから」

「そうですね……」

フィール外交部長は居心地悪そうに黙った後、新聞を渡してくれた。

『ドルム大使失言「国境紛争の捕虜、既に殺した」』

一面には昨日の三国会議でたぐいまれなる無能っぷりを発揮した、フェーム帝国のド

ルム大使の発言が載っていた。

会議から退席した後、ネルシイの記者に囲まれたドルム大使は不快だったのだろうか、"ネルシイ・フェーム国境紛争の捕虜返還問題"について「すでに殺した」などと失言をしてしまったのだ。記事を読む限りその場で書記が発言を撤回しているようだが、ネルシイ商業諸国連合にとってこれは最重要問題。

それを"捕虜を既に殺した"と言えば極めて大きな国際問題になるに決まっている。

「実際、杜撰なフェーム帝国を考えれば本当に捕虜を殺害していても不思議じゃないよな……」

私は頷いて、フィール外交部長に新聞を返した。

「ありがとう。……でも、これホールに来た時に渡してくれれば良かったのでは」

私の問いにフィール外交部長は慌てふためく。

「いや、は、早くお伝えしたほうがいいかなって。べ、別にハンナ諜報長官がどうか……そういうの全く関係ないですよ……!!」

「はあ……」

なぜ、ハンナ諜報長官が出てくるのか。

「ベッドですか……?」

「そうだな、私のベッドだ」

「ここで寝たんですか……?」

「ああ。逆に私はベッド以外でどこに寝ればいいんだ?」

「座っても?」

フィール外交部長は上目遣いに私に問いかけた。

「駄目だ。そういうのは好きな男にやるべきことだ、君は軽はずみにするべきじゃない」

私は思わず叱りつけてしまった。私自身自分のベッドに女性が座るとするのはドキドキしてしまう、精神状態によろしくない。それにフィールがそういうことを軽はずみにやるのが腹立たしかった。

「ですが、ハンナ……さんは座っていたって聞きますよ」

「それはハンナだからだ」

「はあ……」

こんどはフィール外交部長がため息をつく番だった。

「ハンナが幼馴染だからだ」

私が反復して繰り返すと、フィール外交部長は笑った。

「ハンナさんのことお好きなんですね」

「……別に好きじゃない。付き合っているわけではないから。信用しているんだろう」

「……それを好きっていうんですよ」

フィール外交部長はボソツと呟いた。

「ごめんなさい……ちょっと踏み込みすぎました」

フィール外交部長は慌てて取り繕った。

「……いいや、いいんだ。そうなのかもしれない。けれど、そうなるわけにはいかない」

「どうして」

「私は議長で大陸の統一をしなければならぬ……いいや、したい。私はユマイルの指導者として大陸統一を実現したい。これは多くの人から憎まれたり嫌われる職業だ。いつ暗殺されてもおかしくない、ハンナを未亡人に……したくない」

そして居心地の悪い沈黙が訪れて、私は思わず付け加えてしまった。

「ハンナを諜報長官として政治の中枢に置いてしまったことを悔やんでいる。彼女もはや私と近い立場にしまった。実際、ハンナ率いる諜報部がスキャンダルで前政権が倒れなければ、我がオール政権は絶対に誕生しなかった。結局のところ、その後もハンナを諜報長官にせざるを得なかったのは私の未熟さが原因なんだ」

私はつい本音を言ってしまったことを思わず悔やんだ。だが、後の祭りだ。

「ハンナ諜報長官のことですから、オール政権誕生まで視野を入れて警察に情報横流ししたんじゃないですか……？」

「まさか、ハンナもそこまで考えていないだろう」

「ハンナさん、思ったよりもオール議長のこと好きですよ」

「……前から思っていたんだけど、君たち一体何があったんだ」

「……それは内緒です。言いたくないです」

「ハンナからもそう言われた……」

「ハンナさんも反省しているんじゃないですか。……いまだに許してないですけど、私」

「『許す』？」

「え？ああ……！何でもありません！！忘れてください……！！」

謎が深まるばかりだった。これでは全く分からない。

理解もできないプライベートの話をしてもし方がない、別に話題を振るか。

「我々がネルシイ商業諸国連合に來たのは、もう一つ理由があっただろう。今日はそっちをやろう」

「ええ。"ネルシイ万博"ですよね……！！」

"ネルシイ万博"、ネルシイ商業諸国連合が主催している発明品に関する万博だ。年一度開かれ、世界各国から発明品・発明家・資本家などが集まる。

私たちユマイルも同じような"ユマイル発明会議"というイベントがあるが、ネルシイ万博の規模は誠に遺憾ながら我が国のものより一回り大きい。

そういうわけでわが国でも非公式ながら見ておこうというわけになった。

だが……

「ウージ・ボーン財務部長はユマイル経済界の会合。エマリー・ユナイテッド軍代理はフェーム・ユマイル国境間の師団視察。そして、ハンナ諜報長官は外交部の反対か……」

実は外交部には諜報部と似た機関の"外交部調査課"という実働部隊がある。それらは外交上必要な情報収集を担っていて、直接外交部のフィードバックとして活用される。だが、似ているだけあってこの二機関はすこぶる仲が悪い。諜報部は外交部調査課を"似非諜報部"と呼び、外交部調査課は諜報部を"汚犬おけん"と呼ぶ。"汚犬おけん"の別称の由来は、外交部の連中は諜報部が議長の権力の"犬"で、"汚"い非法活動も平気でやることから、その名前が付いたのだろう。

ハンナも同行するかとなった時に、外交部が反対。それを聞きつけた諜報部は逆に、諜報長官を外交部長と同行させるのは恥さらしとばかりに反対した。こうしてハンナは私たちに同行せずに、フィール外交部長とお付き人数人で"ネルシイ万博"を見ることになった。

違う部署同士の官僚が仲が悪いのは良くあることだが、あんまり度を超すようなら我々も干渉しなければならなくなる。現段階では実害はないので、放置しているが、もしかしたら将来考えなければならぬ問題なのかもしれない。

「私たち二人ですか……ちょっと緊張しますね」

「ああ。それは私も同感だ。そして素晴らしい発明品を見れると思うと楽しみでもあ

る」

「行きますか……？」

なぜかフィール外交部長は不満そうに私をせかした。

「準備をするから、ちよつと待ってくれ」

「……はい」

フィール外交部長は頷いた。そして、動かない。

「あのだな。私は着替えたいんだ。出て行ってくれないと困る」

「え……?! あ……はい!! いいえ、そういう意図は全くなくて……」

「分かっているから、早くしてほしい」

「はい!!」

フィール外交部長はまるで新兵のように返事をする、そそくさと部屋から出て行った。

「さすが、ネルシイ万博。活気が違う」

人の数、建物、雰囲気、どれもが巨大でスケールが大きい。人種もフェーニング大陸

の秘境の先住民らしき人や中にはユマイル民族らしい人もいた。

人人、数センチ先に人がいる。腕を伸ばせば人にぶつかるのだ。

そのため、付きそう人たちも私たちから離れぬようぴったりとついてきている。

「そうですね……」

となりのフィール外交部長も思わず感嘆の声を上げざるおえなかった。

「とりあえず見に行ってみるか」

フィール外交部長は頷いた。

最初には華々しい物が置かれている。まず目につくであろうのが大砲。ネルシイ商業諸国連合が誇る軍事企業『ミリタリー・ネルシイ・カンパニー』の展示だった。

商人発祥の国、ネルシイでは国防の要である"軍事産業"でさえ、民間企業が存在するのだ。我がユマイル民族戦線にも軍事企業が存在するが、シェアは三割にしか満たない。ユマイルのほとんどが軍の研究機関が開発・製造した兵器だ。更に言えばネルシイは最新鋭の兵器でさえ民間企業に委託するという話を聞いたのだから、これまた驚きである。

大砲の周りには若い女性が、周りの有力者たちに声をかけている。よく見てみると

『ミリタリー・ネルシイ・カンパニー』の営業だ。若い女性が集客をやると絶大な効果があるというのは私も当然知っているが、まさか兵器を製造する機関がそんなことをやるとは……。居酒屋かよ……。

大砲のスペックは諜報部が抑えてあるので、私たちは把握している。念のため展示物を見るとやはりカタログスペックも諜報部の情報と全く同じだった。……正直、民間企業に委託してくれば防諜が脆弱なので、我がユマイルとしてはありがたい話だ。

その横、少し離れた誰もいない閑散としたところに、ボロボロの木の机にそれは展示されていた。私たちが近づく、臭いがあり、小汚い青年が机に突っ伏して寝ていた。

隣には何かラッパのような物が置かれている。なんだろうか……。見た感じ、個人発明家だろう。

「すまない。展示物が見たいんだが」

私が声をかけると青年は飛び起きた。

「はい、是非見てってください」

飛び起きるが否や、青年は食い気味に声をかける。フィール外交部長が若干驚いて後ろに引いていた。

といっても狭い長机には二つの展示物しかない。ラッパと……金属の触覚らしき触角のようなものがついた、謎の機械だ。

「これは？」

私とその青年に尋ねてみた。

「へい。『電信』です」

「『電信』？」

私の問いに彼はうなづいた。

「遠く離れた人間と会話することができます」

なるほど、なんとなくわかってきたぞ。この二つの『電信』という機械を使えば、遠く離れていてもこれらを通じてコミュニケーションをとれるわけか。

「糸電話のようなものか」

私はかつてガラクタを使って、ハンナと一緒に糸電話を作ったのを思い出した。ちなみにフィール外交部長には通じていないようでポカンとしていた。貴族の娘さんは糸電話なんてやらないのか。

「近いかもしれませんが。でも糸はありません」

「糸がない……？本当だ」

確かに見てみると、『電信』と呼ばれる機械には糸どころか何もつながっていない。完全に独立した二つだ。

「こんな状態でどうやって情報を伝えるんだ」

「『電波』を使うんです」

「『電波』？」

なんだそれは。私は首を傾げた、私は初等学校と軍学校にした行ったことがない。こんなことなら大学にも行っておくべきだった。そこにフィール外交部長が口をはさんできた。

「ああ、知ってます！なんか光の一種だとか」

「知っているのか？フィール外交部長」

「ええ。お父様の知り合いの物理学者さんが昔教えてくれました。といっても教養としてですけど」

「正確には電波が可視光線は電磁波の一つです。……ああ、可視光線というのは青とか……赤とか……緑とか。今現実で見えている光のことです」

その青年は流ちょうに説明してくれた。

「では、可視光線と電波の違いってなんだ？」

「波長が違うんです。そのため可視光線は見るのですが、電波は見る事ができません」

「なるほど」

波長というものが分からないが概ね理解できた。だが、見るこのでできない光か……。もしそんなものが存在するなら、今も知らずにその光を浴びているということだろうか。どうも狐につままれた話だ。お馬鹿な私には、中世の狂信的な宗教家が唱える"悪魔"と大差ないように感じる。

「まあいい。ものは試した。実際に使ってみせてもらえるか」

「へい」

青年は一方の機器ほうへ近づいた。

私とフィール外交部長はもう一方の機器に近づく。私は遠慮して距離を取り耳を澄ます、が、慎みを重んじる貴族の娘だけあってフィール外交部長も遠慮しがちに離れてしまう。結果的に私たちに空間が開いて、一番聞きやすいであろう位置に誰もいないのだ。

青年は表を見ながら機器のでっぱりを規則的に叩く。何かのリズムだろうか、いいや音楽には聞こえないが。するとどうことだろう、彼が叩いたリズムに合わせて機器が

『音を出す』ではないか。思わずフィール外交部長と私は顔を見合わせてしまった。

「なるほど……興味深い。私たちにもやらせてくれないか」

「へい」

青年から同意を得ることができた。

私はフィール外交部長のほうを向いた。

「え？私ですか？」

フィール外交部長は驚いてきょんとする。

「他に誰がいるんだ？」

「確かに」

フィール外交部長がもう一方の機器に耳を貸してくれたので、私が試しに機器のでっぱりをたたいてみる。すると

「聞こえます！聞こえますよ！！ウォール議長」

フィール外交部長が嬉しそうに報告してくれた。

次にフィール外交部長がでっぱりを叩いていた。まるでピアノをたたくようだ。

するとやはりこっちにも聞こえた。

「いかがでしょうか」

青年が恐る恐る我々に近づいてきた。

「素晴らしい発明品だな」

私の言葉に青年は喜んだ。

「しかし、こんな貧相な環境で出展とは」

私はボロボロの長机をなでる。

「個人発明家なので……結構カッコです」

「お名前は？」

「ウッデイ・ライです。フェーム帝国国民です」

「……フェーム帝国か。よく出国許可が下りたな」

保守的なフェーム帝国は外の情報に触れるのを恐れ、一般国民を外に出そうとしない。そして国民も自分たちを"領主の所有物"であることを理解しているため、持ち主からは逃げ出そうともしない。

「いえ……まあ……」

ウツデイ・ライが言い淀んだ。やはり、不法滞在者か。

「そういうのは最後まで頑張るんだぞ」

「へい……」

彼は力なく項垂れる。

「……金に困っていると言ったな。我がユマイルの陸軍中央研究所にポストを用意するから来ないか？」

するとウツデイは驚いてこちらを見た後、周りを見渡した。

「ああ。あなた方、ユマイルのお偉いさんであつたですね」

「そうだ。ある程度給与も出す。悪い条件ではないと思う。それとも、"下等ユマイル民族"の下で働くのは不満か？」

「めっそうもない。明日の生活費が貰えるなら何も不満はないですよ」

「交渉は成立だな。ああ、この二台の機器はユマイルが七十万FCで買い取る。前金の代わりにしてくれ」

私は付き添いの一人に声をかけ耳打ちする。

「彼を総領事館まで。あとスパイの可能性もあるので念のため見張るのも君の仕事だ」
付き添いが頷いた。

「ちょっとよろしいんですか？」

彼を連れて行こうとしたときに首を突っ込んできたのはフィール外交部長だった。

「ああ。有益な研究だと思うが」

「そうですけど……。一応エマリー軍代理にご許可を……」

「大丈夫だ。後で話を通す」

そういうと引き下がってくれた。

彼と付き添いの人を見送ると、またフィール外交部長が言った。

「私たちもほかの展示物を見てみましょうか」

「……ああ、そうだな」

身体がとてもフワフワとしていた。

私がどこにいるか分からなくて、ふと下を見ると、外には私の身体が変哲もなく存在したが、すぐに違和感を感じる。地面のそれも石ころが大きすぎる。すぐに手を見ると、

幼く柔らかくすべすべとしたものであることから私が小さい幼子であることを確認できた。

……これは昔の話だ。だけれど、夢の中ではそんなSFのようなことも現実と区別がつかない。

私の両親は生まれてすぐに死んだ。身寄りもない私は教会を経て、靴屋に引き取られた。けれども、別に子供を引き取るやつが全員まともなやつだとは限らない。私が引いた養親は貧乏くじだった。

他に実子や養子はおらず、三十代くらいの店主の男、その妻、そして四歳になった私だ。彼らは私を殴ったり、あるいは脅迫的に怒鳴りつけたり、放置したりした。男もその妻も私のことを明らかに疎んでいたし、軽蔑をしていた。私の唯一の楽しみといえば、倉庫を掃除するときに十分、二十分サボリ読書を読むことだった。これが最も贅沢なことで私とは考えていた。

私が六歳になったときに、新たにもう一人が引き取られることになった。少女だった。無口で凜としていて、睨みつけるような瞳の持ち主だった。

名前はハンナ・オンバーン。彼女も身寄りがなかった。

今にして思えば一目惚れだったのかもしれない。だけれど、当時の私といえば思春期どころか初等学校にすら入っていない幼児。恋だの男女だの、そういったものを知るのは随分と先の話だ。ムズムズとしたその間は暗黙の違和感として私の中で暴れていたし、それを制御するすべも理由も私は理解できていなかった。

最初は近寄りがたく、話すらできなくて、彼女が私を嫌っていると思うことが多々あった。……というよりも、ほとんどそうだった。初対面の人間とはそういうものだ。相手が分からない状態でのファーストコミュニケーションは警戒心から敵対的に見えることが多々あるのは既知の事実だ。

けれども、私にとって"ハンナ・オンバーン"との接触は初めての同年代との触れ合いだったのだ。今となつては当たり前のことさえ、すべてが新鮮で特別で恐ろしいものに、当時感じていた。

最初は挨拶の会釈。その次は事務連絡。段々と表面的なことを話し出して、相手に関する知識が段々と増えてくる。今日よりも明日のほうが仲良くなっている。無論子供だから喧嘩はしたが、それでも長期的に見れば私たちの絆は右肩上がりだった。

同居して、寝室まで狭く不潔な所に入れられて、身寄りのない孤児で、養親は私たち

を虐待する。そういった環境も私たちの関係を皮肉にもはぐくんだのかもしれない。

何がともあれ、ハンナとの関係は人間関係のプロセスを教えてくれた。社会性を知らなかった私にとって、これらの経験は人生で最も価値があったかもしれない。

時はたち私たちは初等学校に入った。

けれども、それも暖かい場所ではなかった。伝統的なものは社会的信頼である。養子という要素を除けば、私たちを横並びにしたときに違いはない、ただの子供だ。それが表面的なラベルによって全く別の何かになる。同じ人間であろうに、それを理解しようとしてない。

端的に言えば、いじめのターゲットとしてはこの上ない適任者だったわけだ。

私にとっての唯一の友達ハンナで、くだらない馬鹿話から真剣な相談まで、彼女しか信頼することができなかった。そして唯一の趣味は相変わらず倉庫の読書だった。

"フェーニング人権論"。

タイトルに横文字でそう書かれた本を私は"たまたま"広げた。倉庫の高い位置にあって、私はまだこの本を見つけることができていなかったのだろう。身長とそれに伴う新しい本の出会い。少年の私がワクワクするには十分すぎる状況だ。

それがこの本との出会いだった。高鳴る鼓動を抑え本を開き、読み進める。

「人権は人間が人間らしく生きる権利……？」

“人間らしく”とは一体何だろう。本に書かれたその一文は私に違和感を与えた。

読み進めると違和感が加速した。その本は“優しすぎた”。

まず、私たち人間は殴られなくても済むらしい。それがたとえ親権者やあるいは店主であつてもだ。

つまり店主が私たちを殴るのは間違っていたということになる。

それどころか、人間は毎日ご飯を食べたり、あったかいベッドで寝たり、治療を受けることは生まれながらにして皆が持っている普遍的権利らしい。

「……人間らしく」

私は感動した。世の中がこうなればいいなと思った。もう、学校で石を投げられたくないし、そもそも論私たちは毎日教育を受けたい。

対価なき終わりの見えない奴隷生活も、それは本当は間違っていたんだ。

毎日殴られることもなく、ご飯を食べられて、それで愛される。ああ、なんてすばらしいんだろう。

どうして、人類はそんな素晴らしい世の中を築けないのだろうか。

……どうして？ 決まっている。

それは店主とその妻が私たちの親としての義務を果たしていないからだ。だったら排除してしまえばいい、この本が正しいなら、人間らしく生きられる"人権"は何人たりとも……神様でさえ侵害してはならないとされているのだから。

だけれど、それは私とハンナは救われるかもしれないが、数百万という貧困で苦しむ子供たちは何も変わらない。ふと、私たちの殴られたり、ご飯が出てこなかったり、それを別の誰かに当てはめたとき、やるせない怒りが込み上げてきた。何も変わっていない。誰かが私たちと同じ苦しみを抱え続けては、駄目だ。

誰しも……人間らしくあるべきなのだ。

だが、それらの人々を救うには膨大な金がかかることはわかっていた。それらの子供たちを救うためには、それを実現できるだけの豊かな社会が必要だった。

"フェーニング人権論"の最後のページはフェーニング大陸の地図でしめられている。私たちの住む大陸が巨大だった。なんで雄大で強大なんだろう、と私は思った。そして何億もの人々が国境を挟んで住んでいる。

「そうだ、私たちが手を取り合えばもっともっと豊かになれる」

ハンナに私が何度救われ励まされたことか。人間は一人では無力なんだ。人間は社会的な生き物なんだ。

だからこそ、手を取り合って……そうすれば人権という空想的な思想にもいつか手が届くかもしれない。みんなが人間らしく生きられる、そんなユートピアみたいな世界がこの現実に見れるかもしれない。

いつか……私たちが大人になった頃にも同じくらいの歳の子供がこの国にいろだろう。私たちには無理だ、人権なんて言う理想的な権利を手に入れることなど。だが、彼らが……数十年、数百年、あるいは数千年後の未来の子供が“人権”を享受できるように。空想的理想を具現化できるだけの、強力で豊かな社会を作るんだ。

私は読書時間を費やして、ある計画を立てた。この本の言う“人権”を実現するため、私がすべきことはこの地獄から抜け出すことだった。

計画を練った後、私はハンナに打ち明けた。彼女を置いていくなんて考えられなかった。私と唯一の友達で恩人だった。あるいは、私自身もハンナと離れることが耐えられなかったのかもしれない。

ハンナは頷いて賛同してくれた。

「ハンナ、こんなこと間違っている。私たちはもつと人間らしく生きられる」

私の言葉はまるでペテン師のようだったが、それでもハンナは私の伸ばした手を握ってくれた。私もハンナもこの地獄から抜け出したかったのだ。ハンナが私の手を握り返してくれた瞬間、私はどれほどまでにうれしかったか。

初等学校の卒業式の日、私達は軍へと駆け込んだ。外の世界へと出て、逃げ出すために。

かつて出会った頃私はハンナに一目惚れをしていたが、その淡い初恋は叶いそうになかった。私にとってハンナは唯一無二の人間であって、恋をして関係を壊すなど考えられなかったのだ。軍では今まで以上に厳しかった。そんな中でハンナもあるいは私もハイカラな恋など、泥水で濡れた手榴弾とともに散っていく。

軍で私は出世をした。あの日読んだ"フェーニング人権論"とそれを実現するための"豊かな社会"という二つの夢物語が私の第二の初恋だった。

次第に私自身の幸せよりも、みんなが不幸な思いを二度とさせないという思いのほうが強くなって、結局ハンナに想いを伝えることはなかった。

あの時もつと普通にハンナに思いを伝えて、付き合ったり、あるいは失恋していたら。こんなにもハンナへ罪悪感を感じずに済んだのだろうか。ハンナが危険な役職に居続けないで済んだのだろうか。

「ウォール議長……ウォール議長……」

身体がゆすられる。段々と意識が覚醒してきて、夢と現実の区別がつくようになる。

私の今まで見てきたのが、夢で今は現実だ。夢の時は夢が夢だとは気が付かなかったのに、現実に戻ると、どうしてあれは夢だったとすぐに区別がつくようになるのだろうか。

「……もう着きましたよ。随分とお休みになられていたようで」

周りを見渡すと馬車で、もう止まっているようだ。馬車の入口からフィール外交部長が顔を出している。

「……もうユマイルに到着したのか」

「ええ。ネルシイ万博の後すぐに馬車で帰路に入ったので……流石にお疲れだったのではないでしょうか」

「ああ。そうかもしれない」

三国の国際会議・ネルシイ万博視察も終わり、ようやく私たちは祖国ユマイル民族戦

線に帰ってきた。

これでまたいつもの通りの業務が始まる。

先に建物へ行くフィール外交部長を何気なく呼び止めた。

「これからよろしく頼む。フィール外交部長」

フィール外交部長はそういわれると急に戸惑っておどおどした。

「え?! いきなりですか……。ええ……。もちろんです……」

フィール外交部長が予想外のことで混乱するのを見てみると、ふと建物からもう一つの人影がやってくるのが見えた。

誰なのか一発で分かった。

「そういうのは『こちらこそよろしく』って言うのよ。フィール外交部長」

ハンナがフィール外交部長にさういとうと、彼女は嫌な顔をして彼女を見る。

「……ハンナか。留守番はしてもらえたか」

「それはもう。私はウォールを信じているから、焦りは必要ないの」

ハンナがフィール外交部長に当てつけのような視線を送る。

「ウォール議長はお疲れですし。まあ、たまには羽を伸ばすのもよろしいかと」

フィール外交部長はハンナの視線を流して、私を見つめながら言った。

「ああ、いい気分転換になった。せっかく本国に帰ってきたわけだ。早速溜まっていた仕事を消化しよう。関税同盟条約の批准、ネルシイ万博から学んだこと、するべき仕事は沢山ある」

私の言葉に、ハンナはため息をつく。

「……ウォールは変わらないね」

ハンナは寂しそうに遠くを眺めて、呟いた。ハンナの見つめる遠く先、そこには何もなかった。

私が帰国してから数日。事務処理の仕事量だけで数日溶けた。会議、書類、いつもの業務がまた戻ってきたような感じがして、日常生活を感じることができた。

コンコン。議長室にノックが響いた。音で誰かおおよそ予想がつく。
「どうぞ」

私は作業をしたまま答える。

入ってきたのはやはりハンナだった。

「どうした、ハンナ課報長官」

ハンナは私に微笑んだ。

「ネルシイについて、ちょっと話したいことがあつて」

「ネルシイ商業諸国連合……」

ハンナは二三歩私に近づいてきた。

「ネルシイはフェーム帝国と戦争を始める可能性がある」

さらにといわれた言葉、私の頭の中で反響してぐると回ると、その意味を理解できなかった。どれだけ重く、そして第二次フェーニング大陸大戦の引き金としては最適か示された。予想はできていた。捕虜返還問題やフェーム帝国の落日による混乱、政治体制の違い。いつ起きても本当はおかしくなった。

「本当か？それは確かなのか」

「ええ。捕虜返還問題とフェーム帝国の挑発行為でネルシイの不信感が募っているのは既知の事実。フェーム帝国のドルム・ドクル大使の失言によって、ついにネルシイは国境付近に六師団を終結させている」

「……ただのパフォーマンスじゃないのか」

「兵站の物資や弾薬が軍事演習にしては多すぎるの、それに予備役にも招集がかかっている。戦争でもやらない限り、数日の軍事演習のためにそんな量の物資を終結させるとは思えない」

「だが、六師団でフェーム帝国と戦争をするのはいささか無理がある。人員が根本的に足りていない」

「ええ。だからネルシイはフェーム帝国の諸侯・ツード卿の領地を占領するのが目的なんだと思う。ここならば六師団でも占領は十分可能だし、ネルシイとフェーム帝国の国境紛争の舞台になった"因縁の地"でもある」

「確かに。それなら現実的だ」

「状況証拠だけでなく、ネルシイ参謀本部に近い協力者もそういったことがあると、総合的に考えれば十分にあり得るシナリオだと思うわ」

「……分かった。ありがとう」

「これレポートね。後で読んでおいて」

ハンナは私の机に紙を置いた。

「外交部や軍部には伝えないでおいたほうがいいかも。諜報官僚は怒るわよ」

「諜報部は怒りそうだなあ……。だが情報共有できないのは困る」

「仕方ないでしょ。あなたが対立を放置してるんだから」

ハンナの言葉はぐうの音も出ない正論だった。この対立に終止符を打てるとしたら、すべての行政部署を束ねる私くらいだろう。

「人間は命令されたから、はいそうですかとなる生き物じゃない。嫉妬や偏見による不寛容はもちろん、なんとなく嫌だという嫌悪感さえ存在する。それは文書による通達では押さえつけられない」

「無理して何か言わなくていい。要は余計な改革をして政権の体力を使いたくないわけね」

「ああ、そうだ。実際に行政の現場を担うのは官僚だ。彼らが機能不全の陥れば、我々は死に体になる」

「そう……。まあ任せるね、ウォール議長。言うべきだと思ったら言えばいいし、言う必要がないなら言わなくていい。ウォールのためになるならそれでいい」

「ありがとう」

ハンナはどういたしましてと言わんばかりに微笑みを向けて、くるりと反転して、部

屋を出る。ふわりと浮いた髪はさらさらでさっぱりとしていた。

「あとそろそろ会議よ」

「……覚えているから安心しろ。ハンナは私の秘書じゃない」

「ならいいんだけど」

ハンナはすこし不機嫌そうに音を立てて部屋を出ていく。残された私は例のレポートに目を通した。

概要はやはりネルシイ・フェーム戦争の開戦について。協力者からの情報、兵站や兵士の動員率、挙句の果てにネルシイ商業諸国連合の野党からの情報流出。それによって、狙いがフェーム帝国の諸侯・ツード卿の領地の占領であり、完全制圧までの時間をネルシイ側が二週間と踏んでいること。そしてフェーム帝国側はそれを全く感知しておらず、のほほんとしているということ。最後にもし戦争が始まれば、ネルシイの思惑通りに進むのではないかという予想を立てて、しめられている。

このような深い諜報活動を一組織で完結できるのは驚異的なことだ。外交部調査課や参謀本部の調査局ではここまで外国の、しかも戦略級の意思決定をあらわにできないだろう。ハンナの率いる諜報部は恐ろしい能力を持っている。

私は頭を抱えながらレポートを閉じ、静かに溜息を吐いた。

「会議行くか」

立ち上がり、静かに会議室へ向かう。

会議室ではすでに私以外の全員が席についていた。

「私が一番遅かったな。待たせてすまない」

「いいえ。私たちが早く着きすぎてしまっていたんです」

エマリー軍代理が補足してくれた。

エマリー・ユナイテッド軍最高指揮官代理、ウージ・ボーン財務部長、フィール・ア
ンブレラ外交部長兼庶務部長、そしてハンナ・オンバーン諜報長官。

行政調整会議のメンバーはそろった。

「会議を始めさせてもらいます。まず私から事後報告として、フェーニング大陸の三国
関税同盟はフェーム帝国抜きのか国で条約が締結されることになり、今回フィール外
交部長とともにネルシイ商業諸国連合と締結をした条約の批准を行うべく、与党・保守
党ともしっかりと連携していきます」

「あの、フェーム帝国がドタキャンしたということですか？ワス・グラサ外交司と大筋

合意したはずですよ？」

私の言葉にエマリー軍代理が混乱気味に聞いてきた。それもそうだろう、我々も会議の時大筋合意できていると思っていたのだから。まさかあんな形でちゃぶ台返しをされるとは思ってもいなかった。

「会議の場でドルム・ドクル大使が『聞いてない』だとさ。皇帝陛下でもあるまい外交権があってもそんなもの決められない、と言いたいのだろう」

「ええ……」

エマリー軍代理が困惑していた。自国の首都に引きこもって面会謝絶している皇帝陛下とやらとどうやって交渉すればいいのか。それにほとんどの事務的な手続きは官僚によって行われる、外交権をどこかに委任しないと外交なんてできは�がない、皇帝陛下はなんでも仕事をこなせる神様ではないのだ。所詮は人間だろうに。

「ですが、これはまあ攻めた内容ですな。野党が騒ぎ立てますぞ」

「今回の関税同盟は発行を迅速に実現したかったし、大分急いでしたからな。政治はスピード勝負だ」

「まあ……せいぜい議会の連中に頑張ってもらいましょう」

ウーヅ財務部長がいつもらしく興味なさげに呟いた。

自分が嫌な思いをしていないからいいという考えなのかもしれないが……正直言って、気持ちには理解できる。いいことではないがな。

エマリー軍代理は手を挙げる。

「私からも。今回のユマイル軍視察は有意義な時間でした」

「くだらない枕詞はいい」

ウーヅ財務部長が野次を飛ばした。みんな彼のほうを見て、エマリー軍代理は彼を一瞬睨みつけたが、すぐに笑顔に戻って

「今回のユマイル軍視察は有意義な時間でした。前回の師団増加案で増設された十師団に当たる彼らは、教育師団の下訓練にあたっています。と言いましても、一度に数十万規模ですからこの軍研修機関もカツカツの稼働率ですけど。一、二か月もすれば最低限師団として使えるでしょう。陸軍高等学校や陸軍大学もちゃんと機能しています、特に今期の卒業生は優秀だということで期待ができます。」

ただ弾薬の貯蓄率はいくつかの師団から不安の声が上がっていました。実際、近年では急速に火砲の数が増えていて、歴代のユマイル・フェーム国境紛争を見ても一日当た

りの平均弾薬使用数は指数関数的に増加していることがわかります。仮に全面戦争をして全師団を稼働することになれば、火砲の貯蓄は二週間で使い切ります。銃の弾薬も三、四週間で限界です」

こいつ……枕詞をわざわざ二回も言いやがったな。ウージ財務部長への当てつけだろう……。

にしても、エマリー軍代理の説明は正論だ。今までは数師団が稼働する小規模な紛争を経験をしたことがあっても、総動員をかけたことは第一次フェーニング大陸大戦以来一度もない。弾薬を供給し続けることができれば、火砲は単なる鉄くずになり、俺たちは弓だの剣だのを使って中世の騎士ごっこを始めなければならない。

「弾薬の備蓄量を増やそう。参謀本部のルム兵站課長の下で行うように、……予算はまあ……予備費からでいいだろう。来年度から備蓄用の継続的な予算をつける」

「なぜ、わたしに話を通さないんだ。わたしは財務部長だぞ」

ウージ財務部長が抗議した。珍しく真つ当な抗議である。確かにあなたが財政の責任者だったな。

「申し訳ない、ウージ財務部長。予備費を使ってもいいでしょうか」

私が問いかける。

「この前も師団数増やしたばかりだろう、軍は。一体予算をいつまで増やすつもりなのだね」

「相手の脅威がなくなるまでですよ」

横から答えるエマリー軍代理の言葉にウージ財務部長はムツとしたようで

「それでは際限がないではないか。気でも狂っている」

「気が狂っていると言われるのは心外です。予算を減らしてもいいですが戦争に負けて、真っ先にギロチンにかけられるのは私たちですよ」

ウージ財務部長は「ギロチン」という言葉にゾツとして、それ以上何も言わなくなつてしまった。

「……けれども、やはり無秩序な軍拡競争は危険です。諫めるのが政治の役目でしょう」

フィール外交部長が恐る恐る口を出した。

「ああ、その通りだ。何でもかんでも軍事力で解決できるわけじゃない。手段の一つなだけで、銀の弾丸だと思うのは大間違いだ」

「ええ、ですから相手と話し合うのも大切……」

「ポジショントークね」

フィール外交部長の言葉はさえぎられる。誰かとみてみればハンナだった。

「わ……私は確かに外交部長のトップですが、良心に従って主張しているだけです」

「みんなそう言うわ」

「ハンナ諜報長官こそ、誰であつても制御して管理できると思っているのですたら、大間違いですからね」

ハンナ諜報長官は一瞬驚いたような顔をして、フィール外交部長を見たが、やがてフツとため息をついた。

「そんなこと思っていない」

ハンナ諜報長官は珍しく柔らかい口調で言った。

ここで口論させていてはまずい、間を割り込むように私は声をかけた。

「フィール外交部長の懸念は理解できるが、弾薬を増やして継戦能力を高めるのは予算の有意義な使い方だ」

「……ウォール議長なら狂った軍拡なんてそんな馬鹿げたことしなないと思ってました

よ」

フィール外交部長の言葉に違和感を感じた。

「いいや、私は『大陸の統一』を公約に掲げている。狂っているかどうかは別として軍拡をやるのは私の政権運営の基本方針だ」

「え？」

フィール外交部長が目丸くしてこちらを見た。

「まさか本当にやるおつもりなんですか。大衆向けパフォーマンスだと思っていました」

フィール外交部長はきょとんとしている。

エマリー軍代理は居心地悪そうにため息をつき、ハンナ諜報長官はフィール外交部長をにらみつけ、ウージ財務部長は興味なさげだ。

「時々とんでもないことを言いだしそうだなって思っていましたけど。ウォール議長は……とても怖いことを考えていらっしゃるんですね」

「辞表を書くなら今のうちだぞ。フィール外交部長は私の奴隷じゃない。働きたくない上司の下で働くのを拒否することができる」

私は私なりのやさしさのつもりだったのだが、言った後の今にしてみれば脅迫まがいな言葉にも捉えられる気がしてきた。

フィール外交部長は一瞬目をそらし、俯き、結構な時間を消費して考えた。多分数十秒程度だったと思うが、みんな集まった会議の、この居心地の悪い空気間では、とても長時間に感じられる。

「……考えておきます」

フィール外交部長はいつも自信無さげではあるが、今回は後悔や悩みがあると感じられた。

そしてまた長い沈黙が訪れると思われた直後に

「私もやめたいんだけど」

ハンナがそうつぶやいた。

「お前は駄目だ。お前がいけないと困る、ずっと私と働くんだ」

" 友達がいなくなるから "、という情けない一言を付け加えることは自重した。そんなこと言えるわけがない。実際ハンナ以外にプライベートで信用できる気心知れた奴がいないんだ。

が、ハンナには別の意図があったらしくフィール外交部長に視線を向けていた。私もハンナにつられてフィール外交部長に視線を送ると、彼女は驚愕したような顔をしてこちらを見つめていた。少し考えた後、彼女の気持ちが推測できて、申し訳ない気持ちになった。

「フィール外交部長が無能だとそういうことが言いたいんじゃないんだ。実際フィール外交部長は極めて優秀でそれは紛らわしく真実だ。そうじゃなかったら解任している。だけれど、ハンナはプライベートの付き合いがあつてそれで思わずそういうことを言ってしまった。人は勤め先の組織を選ぶことができる、友達でも何でもないフィール外交部長を嫌々組織に居座らせるのは迷惑なことだと思つてだな……」

「ウォール議長、とどめさしましたね」

エマリー軍代理がぼそりと呟いた。

「いや、フィール外交部長が優秀なのは誰が見ても明らかだろう。それは事実だ。俺も認めている。だけれど組織のトップに賛同できないなら、その組織にいるべきじゃないという一般論の話を、私はして……」

「そうじゃありません。……分からないならいいです。これ以上傷口を広げないほうが

よろしいと思います」

エマリー軍代理が私の話を打ち切って、私はなんか間違えたのだなと感じ取り、憂鬱な気分になって頭を抱えてしまった。

「痴話げんかなんかやる時間があるならさっさと会議を終わらせてくれんか。時間の無駄だ」

「痴話げんかではありません!!」

フィール外交部長が怒りウージ財務部長をにらみつけたものだから、ウージ財務部長はすっかり怖気づいてまた黙った。

フィール外交部長は息を整えて

「もういいです。会議終わりにしましょう」

とつぶやいた。まあ……話したいことは話し合ったな。酷い終わり方だが、よしとしよう。

「よし。今日の行政調整会議はここまで各人解散」

私の掛け声とともに、それぞれどこかへ散っていく。まず出たのはウージ財務部長。

その次に、会釈をしてエマリー軍代理。最後は……なんというかタコみたいに怒った顔

をしているフィール外交部長が早足で出て行った。

「ハンナ、ちょっといいか」

私は会議室から遅れて出ていくハンナを呼び止める。

「うん？」

会議室には誰もいない。私はひよいとドアのほうから廊下を見て誰もいないことを確認した。

私は静かにドアを閉める。

「なにになに……？」

ハンナが珍しく動揺したように一歩引いた。

「いや、話したいことがあって」

「……話したいこと？」

「ああ。仕事の話で」

「なんだ……仕事の話か」

「そうだ。というよりも、今業務時間だろ。他に何も考えるな、仕事をしろ」

私の言葉にハンナはため息をついた。

「で、どういった御用？」

「ここでは話しづらい。議長室に移動してもいいか」

「分かったわ」

ハンナの同意を得られたので議長室に向かう。

しかし、廊下では離すことが特にならない。本題を切り出すわけにもいかないし。そこでプライベートのどうでもいい話を切り出すことにした。

「なあ私、フィール外交部長と面識ってあったっけ？ウォール政権が発足してからじゃなくて、私たちの幼少期とか軍に居た時代とか……あるいは軍学校時代とか」

「どうしてそんなことを聞くの……？」

ハンナは私のほうを見すらせず、言う。

「いや……」

先ほどのフィール外交部長の行動について、一つの馬鹿馬鹿しい仮説が浮かんだからだ。だが、あまりに酷くて自意識過剰なので口が裂けても言えない。それにその仮説は私自身が覚えていないとおかしいのだから、ハンナに面識があるかどうか聞いている時点で信憑性が疑わしいが。

「知らない。そのくらい自分で思い出したら」

「……思い当たるところがないからハンナに聞いているんじゃないか」

「思い出せないんだったらその程度なんじゃないの、仮にどこかで会っていたとしても」

ハンナは私の考えを見透かしたようにそう答えた。

「うーん……」

実際ハンナの言う通りなのかもしれない。ここでそんなことを考えている時間はないか。

私は議長室に入ると、ハンナを入れて戸を閉めた。

「で話っているのは？」

窓に寄りかかり、後ろに手を組んで、ハンナが私に問いかけける。

「ユマイル・フェーム国境のことなんだけど。第八次ユマイル・フェーム国境紛争を人為的に起こせないか？」

ハンナは予想していなかったのか目を丸くして、手を頬につけて、目を閉じる。

「どういうこと？」

「諜報部で偽旗作戦をやってほしいということだ。軍に任せては機密保持に疑問がある。この作戦を遂行できる能力があるのはユマイルの中で諜報部だけだ」

ハンナが天井を見上げた後、寄りかかっている窓から外を見下げた。窓からは中庭が見えていることだろう。

「あなたが何をしようか分かってる？」

ハンナが低い声で問いかけた。

「分かっている。発覚すれば議会で弾劾決議が出る。与党・保守党もウォール政権に見切りをつけるだろう」

「それでもやるつもりなの？」

「ああ。やる気がないならこんな話をしない」

ハンナが目をつぶって何も言わない。

「通常のやり方では大陸の統一なんてできない。ネルシイ商業諸国連合とフェーム帝国の戦争がはじまり、長期化すればフェーム帝国の利権がネルシイに独占される恐れがある。ハンナもそれはわかっているはずだ」

「今フェーム帝国として戦争をして勝てるの？」

「……ああ、勝てるさ。フェーム帝国は皇帝による専制政治。一方的に税をむしり取る中央に不満を持っている諸侯は山ほどいる。諜報部のハンナがそれを一番わかっているはずだ」

「勝つだけじゃない。占領や戦争の終わらせ方は、極めて難しい。考えているの？」

「占領はしない。最短で首都の皇帝の首をはねるのが目的だ。そのあとフェーム帝国を解体して、その代わりに諸侯による連合国家を作る。端的に言えば傀儡政権になるがな。フェーム帝国の首都はユマイルから見て近い。占領・統治を放棄した場合、進軍は現実的だ」

「あなたはそのまま何もしなければユマイル民族戦線の最高指導者であり続けるのよ。第七次ユマイル・フェーム国境紛争でフェーム帝国に圧勝した時点で、あなたは十分すぎるほどの功績を残している。だから……ゆっくりしても……」

「駄目だ」

私の声にハンナが息をのんでこちらを見てきた。

「私の公約は最初から大陸の統一だ。私はそのために指導者になり今まで頑張ってきた。豊かな社会を作り、誰もが人間らしく生きられるようにしたいからだ。もう誰も私

たちのような惨めな思いはなくて済むようにする」

「そのために必要なことだと」

「ああ、これは私の夢だ」

ハンナは静かに頷いてくれた。

「分かった、ウォールのためだもの。私はあなたと共にいるわ。例えばどうなっても」

「……ありがとう」

「これであなたと共犯ね？」

ハンナが微笑んでそういうものだから、思わず私の心が揺らいだ。彼女の今の瞳は頼もしく力強く、そして様々な地獄を見てきたものだろう。

もし、もし私の選択違っていれば、ハンナはそれこそ嫁入りする箱入り娘のような、柔らかくもろく純粋な乙女の瞳のままでいられた未来もあったのだろうか。

いいや、無理だろう。赤子の私たちに養親を選ぶことはできなかった。無力な子供が狂った家庭から出るには、せいぜい軍に入るくらいしか、食い扶持はなかった。きっとやり直したところで、大差はないだろう。

私にどのような罰がとハンナには平和的で穏やかな環境にいさせてあげられれば良

かったと本当に思う。だからこの先私の無謀な夢のため、私にどのような罰が下ろうとも、ハンナだけはせめて私のことを忘れて幸せて穏やかな生活ができる未来が待っていると信じたい。

「ああ。共犯だ」

私も思わず笑った。笑わずにはいらなかったためだ。

「レポート通り、ネルシイ・フェーム戦争の予想開戦日は今から二週間ごろ。それまでに工作の準備はしておく」

「助かる」

「だから、その間は余計な仕事を振らないようよろしくね」

ハンナの軽口は心地良い。

「ああ、そうするよ」

「関税同盟の批准は順調だよ。労働党は自分たちの権益を守るのに必死だな」

当然だ。関税が下がったり撤廃されれば自国の産業に悪影響がでるのは避けられない。

特に労働党は労働組合が主要な支持層であるのだから、真っ当な行動だろう。

夜に組まれた与党保守党・クロス党首との会食。話題は私とフィール外交部長が署名した関税同盟の批准だった。

「労働党はいいんですよ。どちらにしろ反対でしょうから。問題は与党の造反者です」
クロス党首はため息をついて

「一部よく思わない人があるのは事実だ。特に地元の財界から支持を得ている議員はな。この前の師団数増加案といい、『ウォール議長は議会を軽視しているのではないか』と指摘が上がっている」

「野党の常套句ですね」

「与党議員からも出ている。あんまりそういう声が増えるとまずいのは君もわかっていることだろう」

「分かっています」

議会からの支持を失えば、政権などないに等しいからな。

「私も各議員のところを回って説得しに行ったほうがいいでしょうか」

「……そのほうがいいんじゃないかね。無理な法案をお願いしているのに、顔一つ出さないようでは筋が通っていない」

「それもそうですな」

クロス党首は焼かれたステーキにナイフを入れた。肉汁とピンクの肉の断面、あまりにも柔らかく最初豆腐でも切ったのかと思った。頑張って噛み切った定食屋の安肉が嘘のようだ。

「君は議会があんまり好きではないのかい」

「……議会で話し合っても国民所得は増えませんし、勝利も得られませんし、未来がよくなるわけではありません。大体様々な考え方があるのに、仲良く話し合いなんてしていたら何も決められなくなりますよ」

「それもそうなんだろうが。どうじゃ、君のやっていることを議会で演説するというのは？」

「議員からウォールを出せて言われたんですな」

クロス党首がまたため息をついて

「そういうことじゃ。わしとしては演説することを勧めておく。議員の面目も保たれるだろうし」

確かにクロス党首の言う通りかもしれない。演説だけで議会の面目が保たれるなら安

いコストだ。

「分かりました。演説いたしましょう」

「うむ。これで議員の愚痴を聞かずに済む」

……クロス党首に与党のかじ取りを任せきりだ。きっと自由にやっている私の愚痴だの不平不満などをたくさん聞いていたのだろう。

「すみません。いつも大変お世話になります」

クロス党首に言う

「うん？いいって、それが仕事だ」

とやる気のない声で返ってくる。

仕事。そう言ってしまうばそうまでだ。けれども私たちは人間だ、機械じゃない。結局仕事といっても中立的なことなどでできず、自分の信念や感情が入り込む。

みんなそれを仕事だと言っているだけだろう。

「陳情リストってありますか？与党議員の皆様は条例批准の"ご挨拶"にいかなくてはなりませんから」

「そんなもの持っているわけがないだろう。……なに、わしに作らせようというのか

ね」

「しかしこちらは与党議員のことをろくに知らないんです。目星を付けるだけでもありがたいので」

「……与党議員の名前くらい覚えておくんだな。わしが失脚したら一体君はどうするつもりなんだ」

「すみません……ぐうの音も出ません」

「君は少数で迅速に決定して実行したがる、今まではそれでうまくいっていたかもしれないが、それを続けるといずれ何かに足をすくわれるぞ」

「分かっています。国家は一人ではなく、一億以上いるユマイル国民によって形成されています」

「分かっているならいいんだ。農業の族議員を訪ねるといい。正確には『ユマイル保守党農政勉強会』のメンバーだ。彼らは一番強硬に反対している。十人ほどだから、一日で終わるだろう。くれぐれも脅すようなことはしないようにな」

「はい」

クロス党首は水を口に含む。

「それに、そろそろ議会の総選挙じゃ。また、胃の痛くなる選挙戦をしなければならなくなる」

「選挙は国民の声を聞く大事なイベントじゃなかったんですか？」

「……同時に国民が政治家を"リストラ"できるイベントでもある。選挙なんかやりたくないと考えている政治家は果たして何人いるか」

「それもそうでしょうね」

「君も若いんだから自分の地盤を気にしたほうがいいんじゃないかね。議長が落選なんて笑えないぞ」

「……ごもっともです」

選挙という地盤とは地元の支持組織の規模のことだ。若く非世襲議員の私は当然支持基盤も脆弱である。私のような若造が議長にいられるのは、保守党・クロス党首が私を担当上げたからであって、実際政権発足当初は新聞から"保守党の傀儡政権"となじられたものだ。

「選挙とは政治家のもっとも重要な仕事だ。君は若くして議長になってしまっただけで想像ができないかもしれないが、政界には一生行政機関に食い込めず議場で演説をするしかな

い人間が山のようにいる。君がそれらの経験を飛び越えて、行政機関には入れてしまったのは、私もいいことかどうか分らない。だが、君も"豊かな社会を作って、人間が人間らしく生きられる"ようにしたいんだろう？ だったら選挙で貧困層の話を聞くのは大切ではないか」

「選挙も大切ですし、貧困層からの話を聞くのも大切だと思います。私も元々貧しくて軍から上がってきた人間ですし、そもそも彼らのために政治をやっているのですから。だからこそ、ああやって選挙の時だけいい顔をして、できもしない夢物語を語って、在職中はのうと美味しい料亭に通う彼らが嫌いなのです。貧しい人々の話を"聞くだけ"では何も社会は変わらないし、意味のないことですよ」

「やはり、君は若いな……」

クロス党首はため息交じりにつぶやいた。私は聞かないふりをする。

クロス党首の言い分は間違っていないと思う。こんな形で進めれば不満が出るのは分かっているし、あるいは私の独りよがりなことで、さらに言えば"国家を私物化"をしているのかもしれない。

今は上手くいっている。だが、それはたまたまだ。私は神様でも何でもないし、いず

れ上手くいかない時が来る。そうすれば私の抑え込んできた鬱憤は数倍になって返ってくるだろう。

だからこそ時間がないんだ。早く大陸の統一を実現して、豊かな社会の下準備をして、新しい世代にバトンを渡さなければならぬ。今私の政権が減んで、選挙屋の老人どもに支配が戻れば、結局またずるずるとした停滞は終わらない。

「とにかく君のやるべきことは造反しそうな与党議員のところへ行って陳情するのと、議会で関税同盟の批准の演説を行うことだ」

「ええ」

「……政治には残念ながら無駄なことが付きまとう。私たちは王様ではないからな、政治家である以上根回しは避けられない」

「わかっています」

「で、保守党の議員方に陳情をしてきたと……」

私の議員宿舎の部屋に当たり前のように居座る、ハンナが呟いた。私もハンナも仕事を終え一日の余韻に浸っている。

昨日の会食でクロス党首から陳情したほうがいいというご助言をいただけたので、今日はまるまる一日保守党の先生方を訪ねては説得に回った。議長が来たと怖気づく議員もいれば、若いからとばかりに無下に扱ってくる重鎮もいて、あるいは紳士的な態度をとる良い議員もいた。

彼らに共通しているのは、最低でも建前では党やあるいは議長を敬い忠誠を誓っている点だ。クロス党首や議長である私の決定に表立って反対を口にする議員は一人もいなかった。無礼な態度をとっても、決して賛成というていは崩さない。

「そうだ。まあ皆様そろって"賛成"だとさ。"党の躍進のため団結が必要"だと」それを聞くとハンナは笑う。

「みんなそう言うわよ。政権末期でもあるまい、表立ってトップに異を唱える議員がいるとは思えない」

「……まあ陳情した甲斐があることを祈ろう。造反者がでないことのお祈りタイムだ」
「そういえばウォール議長も演説なさるんですって？ 関税同盟の条約の時」

ハンナはわざとらしく微笑んで聞いてきた。私は彼女にその話をしていないはずだが。
「どうしてそれを？」

「野党……は毎度のことだけど、今回与党議員からも"ウォールを出せ"って言われていたみたいじゃない。この前の党の会合でクロス党首が"ウォール議長を議会で演説させるから造反するな"って釘さしていたそうよ」

「……駄々洩れじゃないか」

「漏らす輩は必ずいるもの。そうじゃなかったらマスコミは成り立たないわよ。持ちつ持たれつつってわけね」

ハンナが嬉しそうにつぶやく。

「俺はちゃんとハンナと持ちつ持たれつできているだろうか」

「……幼馴染特権よ」

ハンナが他意のない笑みをするものだから、私の胸はきゅっと締め付けられて、複雑なあるいはどうにもならない感情が湧き上がってくる。

「ハンナは……ハンナも……私についてきたくないのならいつでもやめていい。……すべてを投げ捨てても構わない」

「……え？」

ハンナから笑顔が消えて、驚いてあるいは不安そうな顔をしてこちらを見てきて、そ

れがハンナらしくない年相応の不安な乙女のような顔をしていて、そんな顔をさせてしまった罪悪感から私はそっぽを向く。

「ハンナはもう"自由"を手に入れている。君には社会的地位も富もあって、もう大人になった。諜報長官をやめたって人間らしく生きられる。……だから、私の大陸の統一という狂った夢に付き合わされたくないのなら……君は今すぐやめるべきだ。私は君の幸せを阻害したくない」

私がぼそぼそというと、ふと手に何か暖かく柔らかい感覚が当たって驚いてハンナのほうを見た。ハンナが私の手を握っていた。真つすぐな瞳をぶつけて。

「私は……ウォールと一緒にいたいこれからも、これまでも」

静かに動く唇から私は目を離せなかった。二十六にもなったのに、思春期を迎えたばかりの少年のようにバクバクと心臓が鳴りやまなくて、大人が何をやっているんだと情けない気持ちになる。

黙る私を尻目にハンナが言葉を紡いだ。

「私……ウォールといられるのが幸せなの」

理性が吹っ飛びそうになる。愛しくいじらしくて、まさしく今のハンナは女性でいて、

私の心を揺さぶられるには十分だった。今までのハンナとの思い出が呼び覚まされる。男としては何もかも壊してしまって、なんのしがらみからも解放されて、ただただハンナをそこにあるベッドへ押し倒してしまいたかった。

だが、私が思わず伸ばした手は決してハンナの身体へと触れずにそこにあった。今ここでハンナを"抱いて"しまつたら、きつと二度と大陸の統一なんてできなくなる。すべてを放棄してハンナとともに二人でひっそりと生活したい、愛し合いたい、そういった欲求が出てきてしまうだろう。

もう大陸の統一なんて言い出せなくなる。

私は崇高な理想と尤もらしい人権思想とそして自分が夢描く国家像のため、議長になるのだから。ここで"一人の男"になってしまえば、汚れなきユマイルの指導者にも、あるいは自己の野望のために国家を私物化したペテン師にもなれる自信がなくなってしまう。

けれども、それでは駄目なんだ。私たちは幸せになれるかもしれないが、豊かな社会を作らなければ、きつと私たちの貧困や悲しみの連鎖は決して終わらない。私たち

は"生存者"なんだ。たまたま上手くいっただけ。きつと上手くいかなかった人も沢山

いる。これからの未来でも沢山、貧しい人々の屍が積みあがるだろうに、それらを見殺しにして私たちが幸せになっただけではない。

私は伸ばした手を下した。

「ありがとう。これからは諜報長官として大陸の統一のために働いてくれると……うれしい。ハンナだけが頼りだ」

私の言葉にハンナは寂しそうに笑って答えてくれた。

私は選択肢を間違えたのだろうか、ただ寂しい後悔と冷たい風が心の中で吹いて、私は一抹の徒労感に襲われた。

議場は騒がしい。うるさい。私はこういうのは苦手だ。静かなところで一人考え事をするほうが私は好きなのだ。だが、仕事なのだから仕方ない。

何人かの与党議員の申し分ない程度の私への賛辞と条約の優位性を説明した後、次は野党・労働党の番になる。なんとなく何か来るだろうか予想はしていたが、案の定予想通りだった。労働党がありつたけの批判と感情論へと訴え、最後には私への人格攻撃で占められる。

「この条約は労働者の雇用を脅かします！！ウォール議長の大陸の統一などという帝国主義のせいで、迷惑を被るのは我々庶民なのです！！政府のやるべきことは社会保障を充実させ、子育て支援と退職年金の拡充であり、人への投資です。だが、今の政治は自分たちの既得権益を守ることばかりを考えていて、何も！！なんにも！！政府は庶民のことを考えていません！

政府の腐敗はトップダウンで行われています。言うまでもなく組織の腐敗の諸悪の根源はウォール・グリーン議長なのです。彼の教養のなく利己的で他人を切り捨てるその思想がこの国家を破壊し国民生活が無茶苦茶にしています。我々は近代になってもいまだに"人権"を理解できていない、愚かな保守党の連中に"啓蒙"しなければならぬのです！！彼は狂ったナショナリズムを煽る、戦争屋の独裁者です！！」

議会は激しいヤジとあるいは野党議員たちの演説への賛辞で騒然としていた。肝心の演説の声が聞こえないほどである。音声と音声が反響するものだから結局誰が何を言っているのかよく分からなくて、彼らの声が報われることはなかった。

反論したいことは山ほどあった。だけれど、私は議長だし、何よりもここで野次を飛ばしたところで野党の思うつぼで、私は野次を飛ばしている連中と"同レベル"になり

たいくない。だからグツと気持ちをこらえて、私は目をつむった。

だが、冷静に彼らの言葉に耳を傾けると、理解はできる。現に労働党へ票を入れた国民はたくさんいる。だからこうして彼らは議場にいるのだ。彼らの言うことはある種庶民……特に明日が分らない彼らの本音なのかもしれない。保守党の主な支持層は貴族や資本家や軍やあるいは豊かな労働者なのだから、私は貧しい人々のために働いているつもりでも、支持層は真逆でとても複雑な気持ちになる。私は豊かな社会を作ることこそが分配の原資を作って、貧しい人々が報われると信じて今までやってきたつもりだが、それを貧しい人々に分かってくれる日が来るのだろうか。私なりに説明をしてきたつもりだが、左派の彼らからすれば戦争屋の私が戦争の口実を捻りだしているようにしか見えないのだろう。

野党の演説……私への批判と中傷を終えると、次は私の番が回ってきた。演説の内容は考えてきたつもりだ。私の思っていることをそのまま言おう。どうせ今までだってそうやってきたじゃないか、自分のやり方が正しいって、いつも悩んでも最終的にそれを私は信じてきた。

どうであれ、次は私が演説しなければならぬので、ゆっくり議長席から立ち上がり

演壇へと向かう。野党議員の演説を終えてからうるさかった雑音は指数関数的に低下して、私が演壇に立つ頃には静まり返っていた。皆何も言わず無表情にこちらを見ていた。私がこれから何を言いどうするのかこの場にいる誰もがそれを気にしていた。

私は深呼吸をつくと関税同盟の演説を始めた。

「私の公約の一つである大陸の統一……その第一歩として経済の統合たる今回の"関税同盟"はユマイルに強力な経済的恩恵と豊かさをもたらすでしょう。特に我がユマイルが強い国際競争力を持つ大型機械部品では多くが関税を撤廃・大幅な減税が行われ、ネルシイという巨大マーケットへの輸出増加で、GDPを押し上げることが期待されています。逆に農業は政府による一時的な買い取りと補助金の交付により、軟着陸を促し、我が国の農業の生産性を高めるべく様々な努力を行う予定です。

先ほどの労働党の方々の演説でありましたが、経済の成長がなければ再分配などありえません、原資がないのですから。我がユマイル民族戦線は国債を発行できるので、だからそれをやってしまうことはできるかもしれません。結局国民が望んでいるのは、偉大な勝利でも持続可能な成長でもなく、モルヒネ的な快樂なのではないかとも思っています。

しかしながら、別に国債だから返済しないでいいわけではない、利子があり、数年後には元本を返す義務が政府に発生します。例えば今一億YC借りたとして、十年後に一億YCを返せるとは思えない。もし返せるとしたならば、それは一億YC分経済が伸び、税収が伸びていることが必須なのです。結局豊かな社会や経済の成長からは逃れられません。ユマイル単体でそれを実現できるとは思えない。大陸統一という巨大マーケットの誕生こそが経済を伸ばし国民所得を増やし、税収増による社会保障を充実させる唯一の解法なのです！！」

私は野次に負けないよう精一杯の声と必死さをもって言葉に出した。思わず汗をかくほどであって、まるで初等学校にいたころにしたかけっこの後のように思えた。保守党の人たちは大きな拍手を送ってくれて、野党議員は野次の音量を強めた。渦巻のように反響して議場には上昇気流が起こっているかのようなだった。

私は余韻のようにその場に立ち尽くす。これだけの雑音と熱気を含んでいるのに、どこか現実離れしているような感じがして、私は夢の原風景にいる気分になる。私は議長になってから何度かこの場に立ち、演説しているがやはりまだ慣れていないのかもしれない。

私が議長席に戻ると、次に待っているのが質問タイムだ。……質問というよりも学級の吊し上げを想像したほうが分かりやすいかもしれない。野党はあらを探し、激しく指摘し議長から失言を誘い出す。失言が出れば、その傍聴席で神妙な顔をする記者たちが嬉々として報道するわけだ。与党議員の場合、自分の支持層の権益を害するような部分を指摘する場合が多い。

まず初めは保守党からだ。ザーミツシュ・レイル議員、男で三十六歳。農業の盛んな地域からの選出で、『ユマイル保守党農政勉強会』のメンバーだ。私がわざわざ陳情しに行った一人でもある。が、私が若いからだろうか、随分と私の話を興味なさげに聞いていた。最も造反しそうな与党議員の一人である。

「今回の関税同盟によってユマイルの農業が脅かされ、ネルシイの安く粗悪な農作物が入ってくるのは自明である。議長は補助金や買い取りを行うといっていたが、そもそも論我が国の農業を脅かす関税同盟に参加するべきではなかったのではないか。農業は国の基本であり、ユマイルの農業は神に与えたもう聖なるものである。それを工業品の目先の利益のために関税同盟を作るとは何事か。」

議長は農業を守ると言っていたのであるなら、補助金をどのような規模で想定してい

るのか。また、生産性の向上というのが農家の雇用が破壊されるような心配はないのか」
随分と徹底的に言われた、彼は本当に与党議員なのだろうか。おそらく彼自身も地元
の支持者の顔が浮かんで怖くてたまらないのだろう。

感情を表に出さぬよう、また演壇に向かう。

「先ほど言ったように政府は我がユマイル民族戦線の農作物が過剰に被害を受けぬよう
に、最大限防衛策を取っていく。それは決して政府が農業を見捨てたわけではないとい
う証拠だ。具体的には関税発行直後に三十六億YC規模の補助金を投下します。これは
ユマイル民族戦線の農作物市場規模の三割に匹敵するものであり、対症療法としては十
分であると確信しています。

また、生産性の向上に関しても"ユマイル未来農業基金"の設立などによる補助金を
別途行います。農地拡大や肥料・品種改良などの研究開発により、労働時間を削減させ
時間当たりの農家の収入は改善するでしょう。さらに関税が下がるのはネルシイ側も同
じ、ネルシイにユマイルの農作物を輸出できるチャンスでもあります。

この関税同盟がユマイルの農業に悪影響を与えるというのは偏った論調です」

半分嘘で半分本当だ。誰も未来のことはわからない。私は大陸の統一という夢のため

に進んでいるから、関税同盟の発行へと進んでいるが、農家の人々からすれば変化を強いるものであり害悪ととらえる人たちも多いだろう。だが、私の今言ったことが農業の権益者たちを丸め込むための嘘であるかと言われるとそうでもない。実際、この関税同盟をチャンスに改革や輸出へと挑戦したり、あるいは個人農家から資本主義の力を借りて農業の企業化・集団化を推し進め生産性を向上させる農家がいなかったと言われればそれはいるかもしれない、だ。そうなれば一部人たちにとっては悪影響かもしれないが、ユマイル社会全体で見ればいい影響もあるのかもしれない。

議長席に戻ったのも束の間また次の質問が来る。当然だろう、この議場において私に関税同盟の質問をぶつけない議員なんて存在しないだろうに。だって、ここにいる人間はみんな自分がこの国で一番だと思っているのだから。

また保守党の議員だ。

「今回の関税同盟で我がユマイル民族戦線の大手三社がほぼ独占している鉄道部品ของユマイル・ネルシイ間での関税の軽減が決まります。

しかしながらネルシイ商業諸国連合は産学官連携のもと、国策民間企業「ネルシイ・モビリティ・カンパニー」を作り鉄道部品の国産化を推し進めています。今後ネルシイ

商業諸国連合でも鉄道の普及率が向上すると思われ、その需要を背景として大幅に競争力を拡大する恐れがあります。議長は現在の我がユマールの優位性をどう守り、またどのようにネルシイ商業諸国連合へと輸出を拡大していくつもりなのか、お聞かせ願いたい」

「関税同盟によつて鉄道部品的大幅な関税緩和が出来たことはユマール民族戦線にとつて大きな功績であり、経済的恩恵をもたらすことでしよう。現在ユマール民族戦線が鉄道部品で大きなシェアを獲得しているのはユマールが早い段階で鉄道の普及に力を入れたからであり、ユマールの鉄道需要の頭打ちが懸念されていることは事実です。そんな中で我がユマールよりも人口が多く領土も大きいネルシイが鉄道の普及に乗り出せば、鉄道部品の逆転が懸念されます。

しかしながら、我がユマールの大手三社の技術的優位性が存在し、安全性・品質・コスト面からも凌駕しています。鉄道部品各社は今回の関税同盟を好機と捉え、ネルシイ側に商談を持ち掛けるでしょう。ネルシイ側が急速に膨張する自国の鉄道部品需要を、すべて国産で賄えるとは思えません。

また、関税同盟には相互国の特許権の尊重も定められているため、今後とも我が国の

収益の根源たる重要な技術を官民挙げて保護してまいります」

一つ一つの質問を官僚が考えた答弁文を元に答えていく。傍聴席の記者たちと書記による議事録によって、私の国家指導者としての私の答弁は後世に残されるだろう。

様々な立場から聞かれる質問はこの国に一億近い人口のいる何よりの証拠であり、私だけでは国家が成り立たないことを示している。

私は正しいことをやっているつもりだ。だが、この国の誰かから見れば私のやり方は間違っている国益を害しているのだろうか。

関税同盟は初日の議長演説・答弁。そして三日間にも及ぶ与野党討論を経て、与党・保守党の賛成多数で関税同盟の条約批准案は可決。幸いにも保守党からの造反者は一人もおらず、クロス党首は「やはり、四の五の言わずに君に演説させてしまったのが良かったか」などと満足げだった。

私自身も農業関係者から支持をている『ユマール保守党農政勉強会』のあたりの造反者発生が怖くて、夜も眠れないストレスフルな日々を過ごしていたので、これでようや

く枕を高くして眠ることができたというわけだ。

関税同盟可決の翌日。廊下を歩いていると見慣れない人物を見つけた。と言っても友達でも何でもない。むしろ、ただの一方的な知人というべきかもしれないが。

ミュー・フラワー陸軍中将。参謀本部作戦課長、ユマイル一有名な軍人と言ってもいいかもしれない。極右的な思想と圧倒的な成績での陸軍大学卒業と出世、そしてただでさえ十八の"少女"とも言える年齢なのに実年齢よりも幼く見える童顔風貌。将校用の軍服よりも学生服の方が似合っているかもしれない。

だが、"劣っている人間"の執念の狂気に満ち溢れた努力は何よりも恐ろしい。優れている人間……とくにそれを自覚してしまっている人間には慢心が生まれるからだ。失うプライドのない人間は時に規格外のことを成し遂げる。目の前に彼女こそがその典型例だろう。

だけでも、ミュー中将がここにいるのは珍しい。半政半軍のエマリー軍代理ならともかく、軍人がこの区間に入るのはあまりない。一応将校クラスなら入ることは許されてはいるが、そもそも用事がないから来ないといった感じだろうか。

「お困りですか。ミュー中将」

私が声をかけると、素早い動きで一步引くと何事かと私をにらみつける。いいや違う、私がミュー中将に気が付いて止まった時点で警戒されていたし、今彼女が動いたのは私が話しかけたからというよりも近づいて来るといふ情報を基にしたのだろう。敏感で、俊敏だ。ミュー中将は筆記試験が得意だと聞いていたが、これなら護身術も相当な成績を叩き出したんじゃないか。小さいから猫に見えるが、可愛げがあるというよりも優秀で感心というか、あるいは脅威だな。

「どちら様ですか」

無作法、不機嫌で暗い声が返ってきた。上官だったらどうするつもりだったのだろうか。いいや違う、彼女は敬語を使っている。最低限の礼儀は使っているし軍人たるもののくらいでいい。官僚や政治家みたいに上へ媚びていたらそれはそれで不気味だ。

「ウォール・グリーン議長です。名前を覚えてもらえるよう、頑張ります」

「ああ。あなたが」

最高司令官の顔を覚ええないなんて、若いな…。万能感だろうか。

「ウォール議長？」

ここで、エマリー軍代理が現れた。ちょうどいいところだ。

「うちの部下が申し訳ないです」

「エマリー軍代理が謝ってくる。」

「そういえばミュー中将はどうしてこの行政区に」

沈黙を嫌がるように私は尋ねた。

「自分は自分エマリー軍代理への御用があり伺いました」

ミュー中将は気分を振り払うように答える。

「なるほど」

私は頷いて、エマリー軍代理のほうを見る。エマリー軍代理は目を合わせてもらえず、そっぽを向いたままだ。

「参謀本部のこと？」

エマリー軍代理不機嫌そうにつぶやいた。

「はい。この度進んでいる弾薬の貯蓄量の改善についてです」

この前の行政調整会議で決定されたことか。

「それでどうして私のところに？」

「ええ。どこの備蓄を増やすかですが、兵站課と作戦課の配置案で折り合いがつかない

ところがあった」

「折り合いがつかないなら、兵站課の意見を優先してください。参謀本部のルム兵站課長が備蓄の責任者です」

「ですが、私たち作戦課の案のほうが優れていると確信しています。兵站課の配置案は防衛戦ばかりに偏っています」

「その様子を見る限り、兵站課に詰め寄って揉めたのでしょうか」

凶星だったらしくミュー中將は視線を逸らした。

「はい」

エマリー軍代理がため息をついた。

「ですが、最高指揮官のウォール議長の公約は"大陸統一"ですよね。防衛戦ばかりでは大陸の統一はできません。私の案を聞いてくださいませんか」

ミュー中將は私に視線を送ってきた。あれだけ揉めたのに、使えるものはなんでも使おうとする意地は嫌いじゃない。エマリー軍代理も私のほうを見てくる。

これ、私の返答次第のこと……。

「まあ、聞いただけ聞いたらどうだ。エマリー軍代理が多忙でなければだけでも」

「……分かりました」

「私の軍代理室が空いているのでそちらで聞きます。資料は持っていますね？」

「持っています」

エマリー軍代理領くと歩き出した、私もエマリー軍代理に並んでついていく。少し遅れてミュー中将が後ろから歩いてきた。

「で、ウォール議長は何をしに来られんですか？」

「ミュー中将をディナーにお誘いをしようかなと」

「今夜は参謀本部の会議がありますから難しいと思いますよ」

「……それは残念だ」

また、静かになった。沈黙に支配されるのは嫌だな。

「単に議長室もこっちなだけです」

「そうでしたね」

私は後ろにいるミュー中将に声をかけた。

「君は貴族の娘だったね。フラワー家の。どうしてわざわざ軍隊に？」

軍とは厳しくそして絶対的な階級制があり、泥臭く汚い仕事だ。貴族と真反対の存在

で多くの場合やりたがらない。子供を養えぬような相当な没落貴族の家の出か、あるいは信念をもって自ら入隊するかのどちらかだ。

「自分は軍……とくに国民軍に未来を感じたからです。もはや貴族の時代は終わりました。今の貴族はなんとか権益を守って細々と暮らすかあるいは没落していくかの二択です」

私は思わず頷かずにはいられなかった。

「そうやって行動できるのは素晴らしいことだ。フラワー家は確か……綿花の栽培で栄えた貴族だったか」

「ええ、領民たちを働かせて。特に中世ではフェーム帝国の皇帝陛下に献上するほどだったんですよ。ただ、産業革命と工業化で綿花の需要が急拡大して資本家たちが大規模な綿花の栽培に乗り出し、結局、価格競争に敗北して淘汰されてしまいました。今は過去の資産で食いつぶしている感じです」

中世のフェーム帝国はそれはそれは大帝國だった。中世ではネルシイ商業諸国連合もユマイル民族戦線も存在せず、フェーニング大陸はフェーム帝国によって統一・統治されていたのだから。フェーム帝国の「フェーム」はフェーニングに由来してつけられた

もので、まさしくフェーム帝国＝フェーニング大陸と言っても過言ではなかった。

近世のネルシイ商業諸国連合とユマイル民族戦線の独立、第一次フェーニング大陸大戦を経て、現代にいたる。

当時と比べて見るに堪えない現在のフェーム帝国とユマイル、ネルシイの貴族の没落は、まさしく権力や支配構造が絶対的ではないことを示している。

「それは大変だろうに。だが、地元の名声を利用して議員を目指す方法もあったんじゃないか？」

衰退する貴族がいるように、中世・近世でばったしなかった下流貴族が再び浮上してくる場合がみられる。それは名声を利用して議員に当選し、資本家と手を組む場合だ。

地元の名家だが斜陽の貴族と成金だが急成長し国家の利権に食い込みたい資本家。利害は一致している。

「議員になる道も考えました。しかし、自分は祖国の国防に直接貢献したいと考えていたのです。資本家も貴族も、彼らの安泰は国防という安全によって成り立っています。だから自ら志願し兵士となる道を選びました」

自ら志願したわけか。軍人になるには資格も学歴も富もいらない。健康な身体と強靱

な根性があれば誰でもなれる。……無論そこから出世しなければ一生一兵卒だが。

そのため、軍はある意味食い扶持のない貧者のセーフティネットになってしまっている側面がある。実際私もハンナも軍がなければ一生虐待されていて、地獄の家庭から脱出できていなかっただろう。外に出ても働き口なんてなくて飢え死にするだけだから。

しかし、軍はとても厳しい場所であったし、結局ずっと居たいとは思えなかった。絶対服従の上下関係やシビリアンコントロールという名の政治的中立性の強要、さらには閉鎖的な環境がどうにも受け入れがたかった。そのため、ハンナも諜報部に出向したのち移籍して、私も名声を経た後は政治家への道を志した。

「そうか。国防に貢献できるのは軍人だけでなく、政治家や資本家もそうだ。外交力や何よりも国力がなければ非生産的な強力な軍隊を支えることはできない。……と言って、こんな話をミュー中将はずっと聞かされてきたんだろうな」

「そうですね」

ミュー中将がフラワー家のご令嬢なのだから、親族は嫁がせるなりあるいは議員になっただけではないはずだ。そのために「国防に貢献できるのは軍人だけではない」は説得の常套句となっていたことだろう。

それを跳ね除けて軍人を志したのだから、今更私が言っても仕方がない。

「若いうち……いや年を取ってもそうだが、正解なんて誰も分らない。自分がそれを正しいと思うなら、それを選ぶしかない。ただ、いつか休みたい時がきつとやってくる。その時に周りを見渡せばいい。だから、今は好きなようにやるといい」

「でも、軍の指揮系統は必ず守りなさい」

私の言葉を言い終わった直後に、エマリー軍代理からくぎを刺された。……甘やかすなどばかりに。

……また沈黙に襲われる。何か話すかあ……。

「今が近代って不思議ですよ。本来、今は現代というべきでしょうに」

私があればこれ思考しているとエマリー軍代理が話題を出してくれた。

「歴史学者曰く栄光ある古代にはたどり着いていないんだと、だから今は近代になるそう。うだ。私から見ると彼らは古代を過大評価しているように見えるけど。人類はもう古代と比べ物にならないほど進歩している」

「でも、今より明日のほうが豊かになるって希望にあふれているではありませんか。いい言葉ですよ」

なるほど。そういうとらえ方もできるか。

「私も同意だ。今がいくらでも貧しくても希望を持って頑張れる人がいる。それは今日より明日がもっといい日になると信じているからだ」

「ミュー中将はどう思う？」

私が彼女に問いかけると、彼女は真つすぐと答える。

「そのためには偉大な勝利を勝ち取り続けなければなりませんね」

目が生き生きとしている。……若いな、これが十代か。

人間一敗もしないことなどありえない、偉大な英雄たちもどこかで負けることが必ずあった。だけれども、それは自分で経験しない限り理解できないだろう。

老人面して"人生"について語るのは止めよう。意識しておかないと、やってしまいそうで怖い。

「では、議長室はこっちなので」

私が二人に声をかける。

「お疲れ様です。ウォール議長」

「ありがとうございました」

ミュー中將は深々と敬礼してくれた。

「……いや、こちらこそありがとう。話せて嬉しかったよ、ミュー中將。また機会があれば是非」

その日、現場は大混乱していた。と言っても、ハンナと私は大筋予想ができていたことだが。

緊急で集められた行政調整会議では各幹部たちを支える官僚たちが慌ただしく出入りしたり入ったりしてくる。会議室に来るまでの廊下で、何人の走る官僚を見たことか。初等学校の生徒もびっくりだ。

「そろそろ会議を始めます。……イライラさせるだけなので枕詞は省略。今回の議題はネルシイ商業諸国連合はフェーム帝国への侵攻を開始したことについてです。ハンナ諜報長官お願いします」

「はい」

ハンナ諜報長官が説明を始める。

「ネルシイ商業諸国連合は捕虜返還問題を受けて開催していた軍事演習の終了直前、

フェーム帝国への宣戦布告し侵攻を開始しました。動員した師団数を見る限り全土への侵攻というのは考えにくいので、懲罰的攻撃やあるいは一部地域の併合が目的かと」

「ネルシイの堪忍袋の緒が切れたというわけか。でも……どうして今なんだあ……。単なる軍事演習じゃなかったのかよ……」

ウージ財務部長が情けない独り言をつぶやいていた。

「諜報部からの侵攻開始の通達を受け、ネルシイ・ユマイル、フェーム・ユマイル国境間のユマイル陸軍各師団は警戒態勢に移行しています。後方の予備の師団にも動員をかけました」

エマリー軍代理が報告を上げてくれた。

「分かった」

「フィール外交部長。外交部はネルシイとフェーム帝国にコンタクトは取れたか？」

「ネルシイとは大使館を通じて接触することができました。『フェーム帝国の横暴な態度への報復措置』だと」

「何か我々に求めてきたことはあったか」

「はい。『フェーム帝国への支援を行わないこと』を求めています」

「『ネルシイ・フェーム帝国戦争において中立を維持するように』とは言われなかったか？」

「え？いえ、ネルシイ側が求めてきたのはあくまで『フェーム帝国への支援を行わないこと』でした」

「分かった。フェーム帝国側はなんて？」

「大使館経由だと『皇帝陛下の返答を待つ』と……」

「おいおいおい。これは……思ったよりもやばいなフェーム帝国。自国にもう軍が入ってきているんだぞ……危機感ないのか……」。

「実際、皇帝を中心とする王政がろくに動かないことに焦ったフェーム帝国の諸侯たちは、独自にネルシイと和平しようとしているようね。あくまでまだ水面下なので実現するかは不透明ですけれども」

ハンナ諜報長官が発言する。

「フェーム帝国は皇帝の権威によって成り立っている国家だ。諸侯が抜け駆けで和平なんてやったら、制御できなくなり、文字通りフェーム帝国が崩壊する」

和平は独立国と独立国が行うものだ。和平の成立は諸侯が外交権を持っていることを

示してしまう。そうなればもうフェーム帝国は国家ではいられなくなり、諸侯ごとに独立国が誕生することになるだろう。

そして、皇帝に押さえつけられてきた諸侯たちが自由にできるようになるものなら、きつと始まるのは内戦になる……。

「あともう一つありまして、庶務部広報課に一般発表を行わせますか？」

フィール外交部長は庶務部長を兼任していたな。

「ネルシイ・フェーム帝国間で戦争が始まった事実だけ公表してほしい、政府見解については全部ノーコメントだ。現場は大混乱だし、政府としての統一見解も出せていない以上、誤ったメッセージを送ることになるのはまずい。もう少しまとめてからにしよう」

「分かりました」

フィール外交部長は頷く。

「あと、エマリー軍代理。国境付近に参謀本部のルム兵站課長を派遣するように」

「と、いいますと？」

「なんかの拍子にやられたら、すぐに反撃できないなどあつてはならない。もし大規模

な反攻作戦を仕掛けるとすれば、複数師団をまたいで統括する人間が必要だ」

「現地司令官を立てるおつもりですか？」

現地司令官制度。複数の師団を使った大規模な作戦を行うときに、伝令使で参謀本部との連絡を取っては時間がかかるので、現地司令官を立てて大きな権限を与える。そうすることで迅速な意思決定を実現しようとする考え方だ。

「現地司令官を立てるにしても、現場がどうなっているか分からなければそこからやらないといけない。今までは国境紛争の小競り合いで領土に侵入したフェーム帝国を押し返すことがメインだったはずだ。越境してこちらから反攻作戦をやることもしつかりと考慮する必要がある」

「現地司令官に任命する可能性があるということを伝えたくて、ルム兵站課長を派遣させますね」

「話が早くて助かる。頼んだ」

と、会議室に激しいノックが鳴り響いた。焦っているのが手に取れる。

「どうぞ」

私が言うと一人の男が入ってきた。

「会議中に失礼します。諜報部対外課課長、リユーです」

私がハンナ諜報長官のほうを見ると、皆一斉に彼女のほうを見た。

ハンナ諜報長官が「失礼」とジェスチャーすると、彼のほうへ近づいた。彼がハンナ諜報長官を案内するように二人で外へ出ると、静かにドアを閉めた。

「我らはこの国の最高幹部だぞ。情報共有せずにひそひそ話とは何事だ。これだから諜報部は……不気味な連中め」

ウージ財務部長が悪態をつく。

それを無視してフィール外交部長が話し出す。

「私は引き続きネルシイ、フェーム双方に対話を試みてみます」

「ああ、頼む」

「私はルム兵站課長に話をつけるとともに、引き続き軍の警戒態勢を続けますね」

「了解だ」

すると、エマリー軍代理は少し言いづらそうにして何かを言おうとした。エマリー軍代理にしては珍しい。

「どうした？」

「クビにはしないでくださいね」

エマリー軍代理は冗談めかしてそう言う。

「私は相当なことでもない限りクビにしない。エマリー軍代理は優秀な人間だからな」

「……諜報部は業務上秘密主義になるのは仕方ないですが、暴走しないように気にかけてください」

なるほど。だから言いづらそうにしていたのか。

「……ああ。分かっている、忠告ありがとう」

「ええ。ウォール議長は好かれていらっしゃるので。好きな人へのジャッジは自然と甘くなってしまうものです」

エマリー軍代理は意味深長にフィール外交部長を見た。

フィール外交部長が顔を真っ赤に染めて、視線をそらした。フィール外交部長が少し音を立てて立ち上がり

「……私、もう行きますね。お先に業務に戻ります」

「お疲れ様」

私の声はむなしく無視され、スタスタと行ってしまった。フィール外交部長がドアを

出ようとした直後、ドアが開いた。何かとみてみると、ハンナ諜報長官が会議室に戻ってきたのだった。

二人は会話もせずすれ違い……なんか今フィール外交部長がハンナのこと睨んでいなかったか……気のせいだろうか。

「何かあったの？」

戻ってくるハンナ諜報長官が聞いてきた。

「また、痴話げんかだ」

ウーヅ財務部長がいやそうに呟いた。いや……正直今回は同情する。変なものを見させられたわけだし。

「すみません。変なものを見せてしまって」

「ウォール議長に痴話げんかできる相手がいるなんて驚きね。是非伺いたいわ」

ハンナが食い気味に言ってくるものだから、スルーしようと私の脳内が決断を下した。

「まあ、いつか私も痴話げんかができるといいですね。で、そろそろ会議をしめようかなと……」

「お相手がそれまで待ってくれるといいですが」

エマリー軍代理、私のスルーに水を差しやがって……。君ら業務時間中だぞ。

「そういうわけだから、他になければ会議をしめさせて……」

「ちょっと待て、仕事を聞いていなんだが？」

ウーヅ財務部長が私をにらみつけていた。ウーヅ財務部長に仕事を指示してないじゃん。

「……すみませんでした。ウーヅ財務部長は国防予備費の執行手続きをしてください。予備役を動員するでしょうし、必要になります」

「……また出費か」

ウーヅ財務部長がうんざりとした声を出したので、無視する。

「これにて行政調整会議は終了です。各自業務に戻ってください」

「お疲れ様でした」

三人からの返事が返ってきた。

私も業務をするか。三人の後に続いて、出ようとしたとき最後尾のハンナ課報長官が振り向いて、私を会議室へ押し戻した。政治家は冷静でいるべきだと、クロス党首に教えられていたので動揺がでないように頑張ったが、ハンナが押し戻すときに身体が接触

するので刺激としては十分すぎるものだった。

「なんだ？」

ハンナが肩を叩いて背伸びをする。耳を貸せということらしい。かがむとハンナが私の耳へ顔を近づてきた。ふんわりとして気持ちがいい。

「今夜ディナーでもどう？興味あるなら私の部屋に来て」

甘い香り……あの日あの時出会った時から変わらないこの匂い。理性が吹き飛びそうになる、ハンナはついにハニートラップでウォール政権を潰そうとしているのか。

だが、少し考えればすぐに意図が理解した。おそらく、ユマイル・ネルシイにおける諜報部の偽旗作戦についてだろう。誰にも聞かれてはいけなからな。

「ああ、分かった」

私が頷くとハンナが笑う。距離が近くふんわりとされていて笑顔がいつもより幼く感じられる。そういう顔をされると辛かった幼少期とハンナとの絆を思い出すから精神的にグツとくる。

「ドキッとした？」

それはまるでいたずら子供みたいだった。

「え……?」

私は思わず少し腑抜けた声を出してしまった。

「いや、前呼び止められたとき。……少し……怖かったというか……ドキッとしたから」

おそらく、最初にこの話をした時のことだろう。たしか会議室を出るハンナを呼び止めて、会議室から廊下を覗いて誰もいないことを確認して、私がドアのほうへ立っていたな。

女性にやるべきやり方ではない。

「すまない、配慮が足りていなかった。もう少しスマートに呼び止めればよかったな」
「多分ウォールが思っているのとは違うと思うんだけどね……。ともかく、よろしく」

ハンナが微笑み会議室を出たので、私は思わず少しうれしくなって幼稚にも手を振ってしまった。

「私も仕事に戻るかあ」

余韻に浸っていたところだが、このひどい混乱だ。おそらく業務は山のようにある。ここで呑気に休憩しているわけにはいかない。

会議室を出ると、早速官僚らしき人間が私の前を走って通り過ぎた。まず何をするべきか、廊下に出て考える。すぐに答えは出た、私は官僚ではなく政治家だ。トップとして政治家の仕事をするべきなのだ。

与党・クロス党首と調整をしよう。おそらくそっちも大混乱だろうが。

私はクロス党首に会うため歩き出すと、行政区を移動するあたりで、全力で走るおじさん……おじいさんを見かける。最初あまりに似つかわしい姿だったから誰かと思えばクロス党首ではないか。……ご健康で何よりだ。

「クロス党首！ウォール・グリーンです！！」

「おお！！」

クロス党首は野太い声を出して、私に駆け寄ってきた。

息を切らしている。相当急いでいたんだろう。肩で息をしているが、間髪入れずに話しかける。

「君に話があった」

「……おそらくそうだろうと思って来ました。議会はどうなっていますか？」

「大混乱。むろん行政機関のほうが対応で地獄だろうじゃな……」

「万が一、ユマイルにフェーム帝国が侵攻してきても躊躇なく宣戦布告できるよう与党議員に釘を刺しておいてください」

クロス党首が目を丸くする。

「そんなことが起きるのか……？」

「万が一です。ただ、今の戦争で分かったでしょう。もう戦争は始まってしまったんです、百年ぶりに。何が起るか私たちには検討もつきません」

……嘘だ。いいや、半分本当だ。一瞬ハンナの顔が浮かんでしまった。

「分かった。あと、議会がまた騒いでいるウォールを出せと」

「……そうだろうと思っていました。初期対応を収束させ、明日の議会に日程調整しますので、議員たちを安心させてください」

「今出せとのことじゃ……」

「今?!」

私は思わず叫ぶ。

「答弁の調整が間に合いませんよ。与党からも出てるんですか？」

「与党議員からも出ている。このままだとウォール議長召還の議案が可決されるぞ」

「ええ……」

すごい困るんだが。何してんの我が党。

「事態が事態だけに議會は半ばパニック状態だ。なんせ、百年ぶり、あの第一次フェーニング大陸大戦以来の戦争なのだからな。行政機関の対応を聞きたがっている」

「行政機関の対応が聞きたいなら、質問を送ってください」

「議員から庶務部議対課に送った質問文が返ってこないと苦情がきている」

議対課とは議會ぎたいか対策課の略で、議員からの行政機関に対する問い合わせやヒアリング等に対応する部署だ。

「送れるわけではないでしょう、この大混乱で。議対課は他の応援に行って出払ってますよ」

「そうじゃろうなあ……」

クロス党首がうなっていた。

「分かった。答弁はなくていいから、とりあえず演説だけでもしてくれんか。これでは議員たちが鎮まるとは思えない」

「……」

確かにクロス党首の言うべきこともまっとうだ。立法機関であり意味私の肩書でもあるユマイル議會を軽視するわけにはいかない。

「分かりました」

私の言葉にクロス党首が安心して頷いた。

「ありがたい。今すぐ議場に来てくれ」

ちようど走ってきた官僚を呼び止める。

「ウォール・グリーン議長だ。君、所属は？」

「諜報部所属です」

「ハンナ・オンバーン諜報長官に『ウォール議長は議會で演説中』だと伝えてくれ」

「了解しました」

走り去る官僚の背中を見て、クロス党首に対して頷いた。

「行きましょうか」

議場につき、身だしなみを整え議場に入ると、そこは異様な雰囲気だった。明らかにおかしい。今まで野次だの怒鳴り声だのに溢れてきたこの議場だが、ここにあるのはひそひそ声だ。怯え恐れ不安感、まるで初等学校で殺人事件が起きた生徒たちのような雰

困気だ。いい大人……しかも議場にいるのは国の代表たる議員たちのものとは思えない。普段の堂々とした傲慢な態度はどこへ行ったのか。

私が足を踏み入れると、数百人の全議員が一斉にこちらを見た。恐怖と好奇の視線に晒される。

「ウォール議長を連れてきた！！行政機関が大混乱なため質問には受け付けられない！！演説だけだ！！」

クロス党首が議員たちに向かって叫ぶ。

シーンと静まり返って、少したってフェードインしてきたのは不満らしいひそひそ声だ。耳障りな雑音としてこの議員を覆う。

「俺たちの質問に答えろ！！ふざけんな！！」

労働党らしき議員の一人が私にそう野次を飛ばした。不安が怒りに変換したようで、凄まじい怒鳴り声だった。一人が炎に飛び込めば、後ろから続く人のハードルは大幅に下がる。堰を切ったように野党・労働党から罵声が浴びせられた。

私は黙って演壇に立つとその場で沈黙をする。段々と野次は大きくなり、反発する保守党の声に刺激を受け指数関数的にうるさくなった。やがて頭打ちになると急速にしば

んで静かになる。

静かになったあたりで私が話し始める。「皆さんが静かになるまで三分かかりました」などと煽ろうか考えたが、そんなことをすればまた罵倒大会が開催されるだろうし、今はそんな暇はない。

「皆さん、落ち着いて聞いてください。今日、ネルシイ商業諸国連合がフェーム帝国に宣戦布告・越境侵攻を行いました。正式な戦争はあの第一次フェーニング大陸大戦は以来の出来事です。

議員……そして国民の皆様は不安と恐怖を抱えていることでしょう。しかしながら、どうか落ち着いて行動してほしいのです。パニックにならず今まで通りの生活を送っていただくよう国民に願います。そして、ここにいる記者の皆様、我が国は国防に巨額の投資を行ってきました。我々は力強い祖国を持っています。ですから、社会の不安を煽るような報道は控えていただくことをウォール政権は希望します。

この度の戦争を受けエマリー軍代理を中心とする我がユマイル陸軍は、ユマイル・フェーム、そしてユマイル・ネルシイ間の部隊を動員し、厳戒態勢を取っています。例え今、どちらかの国が我が国へ戦争を仕掛けたとしても万全であり、さらには押し返す

ことでしよう。

恐れるに足りません！！我々は準備をしてまいりました。我々が最後に必要なのは毅然とした態度です。さらにはフィール外交部長による対話の窓口、ハンナ諜報長官を中心とした防諜。我が国は偉大なユマイル陸軍を外交・諜報両方の立場からささえています。

平和と大陸の発展を願う誇り高きわがユマイル民族戦線にスキはなし！！ユマイル民族戦線万歳！！」

こういうのは勢いだ。何も決まっていな。実際国民がパニック状態になるのが一番困る。

「万歳！！万歳！！万歳！！」

保守党の議員らが私の万歳三唱に付き合ってくれた。労働党からはブーイングのプレゼントだ。

拍手と罵声の中、私は演壇を降り議場から去っていく。代わりにクロス党首が演壇に立ち演説を始める、普段の議会進行を務める議長代理が私の議長席に座った。

夜、初期対応も随分と落ち着いてきた。廊下を走る……"悪ガキ官僚"も減ってきて、いつもの上品に歩く"優等生官僚"ばかりに戻ってきた。これならば、明日の行政調整会議では落ち着いて話し合いができる。

ハンナの諜報長官室に人目をはばかりる様に足を運ぶ。ノックをすると、ハンナの声が聞こえた。

「どうぞ」

少し薄暗く、落ち着いた部屋。俗に言うムーディーか。……しかし、今から話すであろう話は、全くロマンティックではなくむしろ多くの人が死ぬ、利己的で血生臭い汚れたものになる。

私の顔を見ると、いつものようにハンナは微笑んだ。思い返せば、私とハンナは良く目が合う気がする。それはハンナが私のことを心配してくれているのか、あるいは私の中でバイアスがかかってそう錯覚しているのかは分からない。

「ようこそ、ウォール」

「ああ、ハンナ。夜まで仕事だとは……申し訳ないな」

「誰かさんのせいで仕事は急増中よ」

私のほうを見てハンナはウインクを飛ばしてきた。

「……すまないな」

本当に申し訳ない。……本当はハンナを諜報長官という危険な立場においておくのは、幼馴染失格なのだろう。……好きな女の子を危険な場所にいさせ続けるのは男として恥を知るべき行為なはずだ。

だけでも、ハンナは優秀だ。諜報部というベールに包まれた気難しい組織を統括できるのは、もはやハンナくらいしかない。フィール・アンブレラ、エマリー・ユナイテッド、ハンナ・オンバーン。彼女らはユマイル民族戦線最高の人材と言っても過言じゃない。

大体、クロス党首も言っていたが大抵の議員は一生行政機関入りを果たせず、一議員として任期を満了していく。さえないウージ・ボーン財務部長でさえ、財務部の官僚を管理し適切に業務を進められている。凡人の議員と比べて、優秀なのは間違いない。土壇場で怖気づく情けなさ他人に対して敬意を払わない態度さえ何とかすれば、ポストウォール・グリーンも狙えるだろうになあ……。

「来てくれて、うれしいわ。……ディナーは一緒にできなさそうだけどね」

ハンナは寂しそうに笑う。

「……いいよ。平和になったら行こう。大陸の統一を果たせば、もう私が政治家を続ける必要はなくなる。そうしたらきつと時間ができる」

「それまで待つてほしい」と付け加えることはできなかった。エマリー軍代理の「お相手がそれまで待つてくれるといいですが」という言葉が頭の中でただただ反芻した。

「今日は特に慌ただしく日が過ぎたね」

「ああ。なんせネルシイ・フェーム帝国が戦争を始めたんだから」

「……私たちはそれを知っていた」

「ああ」

「私の言いつけを守って、参謀本部や外交部には伝えなくてくれたの？」

「褒められることじゃない。官僚機構にメスを入れられなかった私の責任だ」

ハンナがうつむき気味になるものだから、不用意に私は言葉を繋いでしまう。

「だからハンナの責任ではない。君は何も悪くない」

私は諭すように言う。ハンナは視線をそらしたまま

「単刀直入に言うね。諜報部は偽旗作戦の準備を完了させた。いつでもフェーム帝国の

蛮行に見せかけて、戦争を始めることができる」

私は思わず表情がゆがんだ。いや、これはハンナに私が命令したことだ。だから私が驚くのはおかしい。だけれども、望んでいたことが、あるいは恐れていた事態がこうして現実存在している。今、ハンナに命令すれば大陸の情勢を大幅に変えることができる。……戦争を始めることができる。

ハンナがこれほどまでの短期間でできると確信していた。なぜならハンナは……ハンナ・オンバーン諜報長官は優秀な人間だからだ。だからこそ、彼女が幼馴染でかわいく人間らしい側面があることを知っている俺は、耐えられない。ハンナは新聞が報じるような"女帝"でも"ミステリアスな美女"でもなく、優しい普通の人間なんだ。

私は自分の無力感にさいなまれた。

「私は……ウォールの大陸統一という夢を追いかけてきた。これはウォール自身が始めたことだから、あなたが決めるべきだと思う。私はあなたの命令なら戦争を始めることだってできるの。これは随分と過激なことで盤石なやり方じゃない。時間がないことを忘れないで。時間がたてばうまくいかなくなる可能性が出てくる」

「あ、ああ。ありがとう。わかつてる」

そう答えるのが手一杯だった。

「時間が欲しい？」

「いや……」

私は曖昧な返事を返した。時間なんていらぬ。だって私は最初からこの時この瞬間を迎えるために頑張ってきたわけだ。今更考えることなんてない。

私は大きく息を吸った。

「やる。今から五日後にルム兵站課長が視察を終え帰ってくる。その日の夕方に偽旗作戦を決行する。そうすれば六日後の朝には伝令使がつくはずだ。いいか、ハンナ？」

私の問いにハンナはまっすぐ視線を合わせる。

「……本当にいいのね？ウォール」

「ああ。やれ」

私は感情を出さぬよう低い声で無機質に答えた。

「わかった。必ず実現するわ」

ハンナは珍しく、少し泣きそうな声で答えた。初等学校の時のいじめられた時のハンナにそっくりだ。私は……彼女になんて仕打ちをしているんだろう。

私も泣きそうになってくるが、それを防ぐため考えることをやめた。今はただ大陸の統一に集中しよう。

「用件がないなら私は行く」

ハンナがどんな顔をしているか気になって、あるいは知るのが怖くて後ろを気にしないように頑張る。すると、後ろから静かな物音がしたような気がして私は思わず立ち止まった。怖い……振り向けば感情が爆発してしまうそう。

すると背中に違和感を感じた。暖かく優しい何か、背中から手が延ばされた。状況が読めず固まったが、段々事態を理解できた。

ハンナが私の背中に抱きついたんだ。女性特有の胸のあるいは曲線を描いた体も、昔から変わらない匂いも、静かに優しく抱きしめる腕もただただそこにあって、それはまるで鎮魂歌のようだった。

「ねえ、ウォール！！これで良かったの？！本当にいいの？！この先に私たちやみんなが豊かに暮らせる社会は本当に待っているの！！」

ハンナは子供のように泣きじゃくるように言う。ああ、何も変わっていない。彼女は軍に入り諜報部の出世競争に勝ち続けてきた。養子として入ってきたときも目が死んで

いて、養親の虐待のこともいじめのこともそういうことがあったから、辛そうなだけだ。
ハンナは……初等学校の時によく見せた弱気で辛そうで泣きじゃくる幼い少女の側面は、死んでいない。……頻度が少なくなったのは、環境が苛酷になっていっただけなんだ……ハンナ自身は何も……。

「ハンナ……」

私は振り向けなかった。私に振り向く資格なんてなかった。もし私が彼女を本当に大切にできているなら、こんな危険でストレスフルな仕事を今すぐ放棄して、どこか静かで安らかな場所に行くべきなんだ。幼少期にハンナが本来得られるべきだ時間だった、牧歌的で穏やかな時間を今こそ手に入れるべきなんだ。

だけれども、私はそれが受け入れられなくて、何よりも私たち幼き子供たちをこんな酷い目に合わせた社会そのものを許せなくて放置することができなかった。社会そのものに大きな変革をもたらして、私たちだけが幸せになるんじゃない……同じような境遇を持つ人すべてが幸せになれる。そんな権利があつていいはずなんだ、誰にでも。

時間とハンナのすすり泣きはすぎる。

そんなこと分らないと言ってしまったかった。大陸の統一が経済を活性化して無駄

なく社会が回るようになって、余剰リソースで社会保障を充実させられると。だが、それは結局私の"夢"や"理想"やさらに言えば"妄想"でしかなく、神様でも何でもない私に未来のことなんか分からない。それにかつて会った労働党に入れた酔っ払いのように、私のやりたいことは社会の総意でなく、きつと個人的な願望に過ぎない。

だけれども、ハンナは……ハンナだけは……私を百パーセント信じて背中を押し支え、ついてきてくれた。彼女だけは悲しませたくない。こんなにも献身的で優しい女性に「今までやってきたことは無駄になる」なんて言えるわけがない。大体、始めたのは私だ。ハンナは報われるべきなんだ、彼女は幸せになってほしい。

「ああ。必ず実現する。豊かで人間が人間らしく生きられる社会を私が必ず実現する」
私は覚悟を決め、そう呟いた。

ハンナは安心したようにふつと息を吐いた。すすり泣きは静かにフェードアウトしていった。

「ねえ、ウォール……。もう少しだけこうしていてもいい……？」

「ああ。いつまでもそうしていい」

部屋の明かりは少し弱まっている、私はそう感じた。

国民の中には存在する事実さえも知らない人間がいるだろう。行政区の慌ただしい対応は天井を打ち、段々と減りつつある。庶務部広報課からも国民に向け、パニック状態にならないよう呼びかけが行われた。幸い大きな混乱等がなく、今に至る。

私は夕食をとっている。そうまた高い料亭でディナーだ。行政区の高級料亭は我々によって支えられているといっても過言ではない。……というか行政区の中なので一般人はこれないし。

だが、結局おなか痛くなるような相手と話をするので高級料理の味がわからない……と言いたいところだが、今回の会食はむしろ私のほうが望んでセッティングしたものだ。デート相手を待つチェリーボーイがごとくそわそわと席で待つ私だが、やって来るのを確認した。というか、目立ちすぎだ。

ウッデイ・ライ技術少尉。陸軍中央研究所の伝令研究室に属している。フィール外交部長と一緒にいったネルシイ万博の時にスカウトしたあの青年である。

なんせ煌びやかなこの場所に不釣り合いな、小汚い作業着を来ているからだ。ちょっといい服着ている工場労働者だと思われるも驚かない。貴族たちは露骨に避け軽蔑の視

線をおくる。まったく、こういう基礎研究に没頭するやつがいるから国力が向上し、社会が豊かになるという事実を彼らは理解できていないのだらう。

私が位置を教えるべく手を振ると、彼はのしのしと近づいてきた。

「お久しぶりです！！」

その青年はまるで少年のごとく大きな声で言った。……貴婦人がぎょっとして見ていた気がする。

「お久しぶり。職場は慣れたかい？」

「へい。素晴らしいっすね。設備も予算も今まで見たことがない」

「……詳しい話が聞きたい。仕事も疲れただらうし、座って何か食べるといい、私の奢りだ。食事はまだなんだろう？」

私が座るよう促すと、彼は座った。彼は貪るようにメニューを見る。

「本当はそうやって食いつくように見ては駄目だ。上流階級の人間はマナーにうるさい」

「そうなんですか。でも、技術者ですよ自分は」

ウッディ技術少尉はアピールするように自分の作業服を引っ張った。

「確かに技術者は研究したり何かものを作ったり実験するのが仕事だ。だが研究には金がかかる、資本家だの貴族だの……あるいは国だの。そういった出資者が必要になる。君はせっかく才能があるんだ、こういうくだらない礼儀で減点されるのはもったいない」

「そういうもんすかね……」

「ああ。現に君が個人発明家として活動していた時に出資を受けられたか？得体の知れない小汚い青年はネルシイでも門前払いだったはずだ」

「そうっすね……」

ウッデイ技術少尉は思い当たる節があるのか、俯いていた。

「まあ気が向いた時に少しずつ気を付けていってくれ。私も上流階級の言う礼儀とやらが未だによく分からない。さっき言った通り君の本業は研究なわけで、頭の片隅に入れてくれればそれでいい」

ウッデイ技術少尉は頷いた。

「注文は決まったかい？」

「この魚料理にしようかと」

白身魚のものを指していた。当然ゼロの数がおかしいことになっている。まあウツ

ディ技術少尉は一応軍属だし、経費で落ちる。よしとしよう。

「悪くない。早速頼むといい」

「すみませ〜ん!!」

ああああああああああああああああああああああああああああああ。忠告し忘れたああああああああああああああああああああああ。

だが、完全に後の祭り。時が止まったように空気が凍り付く。そして地球は再び回りだした。

ソムリエは顔色一つ変えずに近づいてきた。……さすが熟練者だ。行政区で働いているだけある。

「これください!!」

「かしこまりました」

ソムリエは頷き去って言った。私は行くのを見送ってから

「……ここは大衆食堂じゃない。注文の時に大声で店員を呼んでは駄目だ」

「え? あ、ああ……へい」

……当分は研究所の上層部になれなさそうだな。

「ならどうすれば……」

「店員に目配せするだけで大丈夫だ。そうすれば勝手にあっちからやってくる」

「そうだったんすね……。すみません……」

「初回だし仕方がない。後、行政区でディナーに誘われたら大抵高級料亭になるから、作業着できてはだめだ」

「自分、これしか持っていないっす」

「……だろうと思った。今度時間ができたら洋服屋に行って仕立ててもらおう。こういう時のために一着くらい必要だし、買ってやる」

「へい……」

正直、こうやっておっさん面して説教するのもよくないだろう。気分も悪いだろうし。そこで私は話題を変えることにした。

「研究のほうは順調かい？その……電信だったかな？」

「それはもう。研究設備が違いますからほとんどん試作品を作れていいですよ。特に物理学研究室のレーイム室長には大変お世話になっています」

「物理学研究室？君は伝令研究室だったよな？それまたどうして」

「電信は電磁気学を基にしていますから、最先端の学問なんですよ。まだまだ分からないことが多いんですよ」

「電磁気……？」

「へい。物理学の一分野で、前説明した電波の話です」

確かネルシイ万博の時に彼が電信の説明をしていたなあ。こんなことになるなら軍学校以外の高等学校に行くておくべきだった。

「もしそちらがいいなら物理学研究室に移籍してもらっても構わないぞ。ぶっちゃけ軍は研究分野のことなんか分からないし、電信が軍事利用できればそれでよしとされると思う」

「いえ。既存の伝令使や軍の意思疎通手段は応用できますし、室長も幸い電信に理解のある方でしたから。それに物理学研究室は理論や数式を考える場所で、実際に電信を作ったりする場所ではないようです」

「なるほど……」

どうやら研究にも複数の種類があるようだ。まあ諜報部だの参謀本部調査局だの外交

部調査課だの、研究以上に似たり寄ったりな政治がとやかく言えることじゃないだろうな。

「実用段階にはどのくらいかかりそうだ？」

「実用……実戦での軍事利用を考えているならそうとうかかると思うっす。ただ人員のいる安全な場所からの通信ならば今年中にはプロトタイプ版を作れるかもしれません」

「安全で人員のいる場所……？」

「そうっす。電信は会話をそのまま流すわけじゃなくて、オンオフでコミュニケーションを取りますので」

「……かつて見せてもらった時もそうだったな。確か音が鳴るときとならないときがあった」

「へい。それで一文字一文字をオンオフと対応させる必要があるっす。例えば、三だとオンオフオフオフみたいな。さらに離れるとノイズが乗るので、適切に受信できたか確認するために符号訂正記号も付与されます。それも読み取る必要がありますね」

「ひえ……。なるほど、これは知識がないとそもそも論読み取れないわけか」

「そうなんすよね……。だから電信を扱える兵隊さんが必要になりますし。しかも、電

信は電波で情報を送ります。だからこの機器さえゲットできてしまえば誰でも通信を傍受できますので、暗号化を考えなければなりません」

「それは致命的だな」

実際に戦地での活用は当分になりそうだ。

「けれども、悪いことばかりではないっす。戦場で使える実用的なものが難しいというだけで、プロトタイプ版ができれば、例えば行政区と参謀本部を電信で繋げられるようになれるかもです。電信室を作り、金庫に暗号表を保管して、専門知識のある人間が与えられたオンオフで文字列を送信するんです」

「うむ。興味深い。楽しみだ」

私が相槌を打った。

ソムリエが料理を持ってくる。

「音を立てずに食べるんだ。決して食器とぶつけてはいけないよ。あと汁物はすすってはだめだ。咀嚼音も気をつけろ」

私は先ほどのトラウマを生かして、ウツディ技術少尉に事前警告をする。

彼は緊張した面持ちで食べ始める。うむ、言えるべきみたいだな。本質的には優秀

な人間なのだろう。

「そういえばフェーム帝国の移民なんだろう？ご家族とかは大丈夫なのか？」

するとウッディ技術少尉は手を止めた。

「ああ……。言いづらいことがあるのならいい」

「へい……。元々家族が嫌いで出て行っただけです」

「嫌い？」

「両親はフェーム帝国の領民で典型的な被支配者階級。つまり奴隷でした。それに対して嫌悪感しか感じません。世界には広大な陸地とそれよりも大きい海が広がり、目に見えない電磁波や小さい粒子。それらを見ずに死ぬなど私には耐えられません。私は自由を手に入れて、科学を学んでその先を見たかったです」

「フェーム帝国は厳しい規制をかけているんだろう？よく外を知れて興味を持てたな」

「領主は我々領民を個性のないものだと思っていますが、実際は違います。悪い人良い人、頭のいい人悪い人、好みも何もかも違う。抑圧されているから、違いがないように見えるだけです。もう中世ではないんです、今は情報伝達能力が桁違いなんです。衰退したフェーム帝国はもう昔のように領民を完全にものとして扱い、外部の情報から遮

断することは失敗しています。教会や皇帝を何の疑いなく信じている領民は相当減ってきているんじゃないですかね」

「なるほど……」

「だけど、脱出しようとする試みは大抵失敗します。……ネルシイの奴隷商に騙されそうになったことか」

「ネルシイの奴隷商？」

「ああ、フェーム帝国脱出者の隠語です。ネルシイの奴隷商はフェーム帝国の脱出者を工場労働者として資本家に売りつける、ブローカーのことです」

「まあ、どこでにでも悪い奴はいるだろうな」

「人権なんか役に立っていないですよ。むしろ自由意志で工場労働者になっている体をとるからどうにもならなくなるっす」

「……」

私は何も言えなかった。国家はすべてを管理できていない。そして工業化には労働力が必要で、需要があれば報酬が発生し、そしてそれに群がる悪質な人々が登場する。

「今の資本主義は過渡期なんだ。きっと社会が豊かになって安定すれば、いずれそうい

うことも減る」

「そうすかねえ……。ただ今奴隷のよう使われる工場労働者達には関係のないことでしょうけど」

私は何も言わなかった。その通りだ。私の言ってきた未来をよりよくするは、裏を返せば現在がすぐに良くならないということだ。そして今の人間の寿命なんて五十年。今も生命の危機にさらされている人にとって見れば明日が死期かもしれない。より良い未来を見れないだろう。

未来の子供たちへなんて、今生きる人たちから見れば迷惑極まりないのかもしれない。
「現代の人たちから恨まれて当然だろうなあ……」

私は情けなく小さい声でつぶやいた。

「す、すみません……。空気を重くしちゃって」

「いや、気にするな。政治家はこういう疑問に真っ向から向き合う仕事だ。むしろこうやって言い淀んでしまった時点で、私は政治家として未熟者なんだろう」

それでもなお、暗い顔をするウッディ技術少尉に私自身が申し訳ない気持ちになってくる。

「そうやって世の中に疑問を持つことは素晴らしいことだ。政治も科学もその点では似ているのかもしれない」

正面から問いに答えられなかった私の言葉は慰めとして役に立つだろうか。

その日は大雨だった。覚悟はできていたはずだ。六日もの時間を与えられたのだから。だが、実際に起きることが分かっているにもかかわらず起きた時の衝撃は知らぬ人と並ぶほどだった。いいや、種類が違うのかもしれない。

ネルシイ商業諸国連合のフェーム帝国侵攻を受け、生まれた混乱はいったん落ち着きつつあったが、それを凌駕する出来事が今この瞬間に起きているのだ。

昨日の夕方、国境付近のフェーム帝国の部隊が発砲。我がユマイルの部隊も応戦したところ事態はエスカレートした。現地部隊はフェーム帝国との対話を試みたが叶わず、フェーム帝国は貧弱な火砲の射程距離を補うため越境攻撃に踏み切った。

直ちにユマイルの伝令使は参謀本部へと鉄道で急行し、その事実今日の朝伝わり、首都ユマイザルを大混乱に陥れた。

重々しい空気の中、再び行政調整会議は再び開かれる。

「今回の議題はフェーム帝国の我がユマイル民族戦線への攻撃だ。エマリー軍代理、概要の説明を」

「はい。ユマイル・フェーム間の国境を警備していた第二十四師団は夕方、フェーム帝国らしき部隊の発砲を受けました。ユマイル・フェーム連絡協定に基づき対話を試みましたが、発砲は止まず八名の死者を出します。やむを得ず応射したため事態は悪化しました。ユマイル側による火砲支援が行われたあたりで、フェーム帝国は三師団に動員をかけ越境攻撃を開始し、ユマイル側は自国領土で迎撃するため五師団に動員がかかりました」

エマリー軍代理が説明を終えた。

「ありがとうございます、エマリー軍代理。フィール外交部長はフェーム帝国側の意思確認はできたか？」

「フェーム帝国側は『今回の発砲はユマイル民族戦線側から行われたものであり、謝罪と賠償』を求めています」

「エマリー軍代理、フェーム帝国側からの発砲で間違いないんだよね？」

「ええ、伝令使の話を聞く限りはですが。ただ、おそらく現場は混乱していたでしょう

し、双方が上層部に敵国からの発砲だと報告するのは珍しくないと思います」

……これでは水掛け論だ。そしてこうなればもう引き下がれない。フェーム帝国側もユマイル民族戦線側もここで謝罪なんてすれば民は許さないだろう。あるのは武力の行使によって、勝者が歴史を作るプロセスのみだ。

「フィール外交部長、フェーム帝国へ『責任はフェーム帝国側にあり謝罪と賠償を要求する』と伝えてください」

フィール外交部長は少し口角を挙げて

「……そんなことをすればもうお互い後に引けなくなりますよ。彼らはもっと強硬になります」

「じゃあ、フィール外交部長はフェーム帝国側の要求を飲んで謝罪と賠償をするべきだとか。そんなことをすればウォール政権は潰れるぞ。保守党も次の選挙で惨敗だろうな」

「そうではありません……！！ですけれども、平和は尊いものです。これ以上国境紛争が悪化しないよう対話が続けることが大事だと思います」

「戦いに勝利しなければ、まともな話し合いはできない。外交部長として働いてきたあ

なたならそれを一番知っているはずだ、フェーム帝国によるユマイル民族へのヘイトを」

フィール外交部長は悔しそうな顔をしてうつむいた。それが答えだった。彼らは中世の栄光を勘違いし、自国の衰退から目をそらし、周辺諸国を見下してきた。第七次国境紛争で妥協されたのは、フェーム帝国が惨敗したからだ。そしてそれさえも、フェーム帝国は受け入れられず変われず、醜いコンプレックスとして残り続けてきた。彼らとまともな話し合いはできない。これは偏見ではなく、フェーム帝国と交渉したことのある外交官ならば誰もが知っている事実だった。

「エマリー軍代理。国境付近の五師団に、越境攻撃の許可を出してください。"フェーム帝国は火砲を持っており、蛮行を続ける彼らを静止するためにやむなし"と」

「はい。……伝令使がつくのは十二時間ほどかかるので、実際に反攻するのは今日の夜になるでしょうけど」

エマリー軍代理は静かにうなづく。フィール外交部長は不安そうな顔をして、ハンナ諜報長官は笑いもせず真顔だった。

無論、これは口実に過ぎない。そもそも論、フェーム帝国が越境攻撃を仕掛けてきた

のは彼らの火炮の射程距離が短いからであって本末転倒なのだ。

「参謀本部には作戦を立案してもらう。フェーム帝国の息の根を止め、フェーニング大陸の統一を主導するのは我がユマイル民族戦線であると国内外に示す必要がある。おそらくユマイル陸軍、第一次フェーニング大陸大戦以来の大動員になるだろう。そのためにも前座になる、今回の第八次ユマイル・フェーム国境紛争でフェーム帝国を完膚なきまで叩き潰す必要がある。ユマイル陸軍の威信にかけて行うように。相手がフェーム帝国だからと言って絶対に油断するな。油断こそが人類最大の敗因だ」

「はい！！」

エマリー軍代理はいつもとは違う軍人らしい返事をする。心なしか目が輝いているように見える。ああ、そうか彼女は根っこからの軍人なんだな。左派から戦争屋だの国家殺人鬼集団だの言われているが、結局戦ってそして偉大な勝利を勝ち取りたがる。彼女は軍代理にふさわしい人間だろう。

大陸の大変革をもたらす名誉ある戦争、あるいは大陸の惨劇となる狂った戦争か。どちらにしろ軍人としては興奮せずにはいられない。

「……フェーム帝国と戦争といっても具体的にどのような戦うおつもりですか？このま

まだと単なる八回目の国境紛争になりますよ」

フィール外交部長は心配そうな顔をそのままに聞いてくる。

「いいや、叩き潰せば必然的に戦争は始まる」

「そうでしょうか……」

「ああ。プライドの高い貧弱は戦争を止めることはできない。ネルシイにもユマイルにも負けたという事実を皇帝は受け入れられないだろう」

「……」

フィール外交部長は何も言わなかった。

「フィール外交部長は優しい方だ。きっと平和になった時にその才能を開花させるだろう。だが、今は戦争の時だ。国家の存亡だけを考えろ、いいな？ 情けは君を処刑台へと送ることになるぞ」

フィール外交部長は不器用な笑いを私へと向けて

「わかりました」

と静かにつぶやく。

静かな沈黙が覆った後、エマリー軍代理が口を開いた。

「それにしても、今回は早い段階で諜報部が情報を明け渡してくれて助かりました。参謀本部調査局では限界がありましたから」

ハンナ諜報長官のほうを見ると、彼女は微笑んだ。

「ええ。事態が事態ですから。参謀本部と諜報部がいがみ合っている場合ではないでしょう」

「それにしても諜報部は侵攻を仕掛ける師団数どころか、支援火砲の詳細、さらには時刻レベルでの予期まで言い当てるのですから大したものです。是非うちの調査局にもそのノウハウ、ご教授いただきたいですね」

エマリー軍代理がハンナ諜報長官のほうを見る

「それとこれとは別ですよ」

と答えていた。

で、ウージ財務部長か。

「ウージ財務部長」

「はい？」

不機嫌そうに彼は答えた。

「これからは国庫が火を噴きます。保守党の重鎮やユマイルの財界に働きかけて、戦時国債をバンバン発行できるようにしてください。二週間後までに臨時予算案を作成して、自由な裁量の軍事予備費を七十億YCほど調達します」

「……財政規律は？」

「総力戦体制にそんなものはありません。賠償金で回収しましょう」

ウージ財務部長はため息をつく。

「だろうと思っていたわい。そんなことしたくないんだが」

私はウージ財務部長に顔を近づける。

「気持ちわかりますが、これは仕事です。フェーム帝国に負ければウォール政権は崩壊で、あなたは一生表舞台に立てなくなりますよ。あなたが一番得をするのはここで戦時国債発行を実現し、戦勝国の財政を支えた"ユマイルの英雄たち"になることです。」

ここまで政界を生き抜いてきたあなたなら分かることでしょう」

ウージ財務部長は一生表舞台に立てなくなるという言葉を聞いた途端私を見た。……

随分と利己的な人だな。だが政治家のあるべき姿だし、分かりやすい上にある意味合理的。私たちのような自分の理想のために戦っている政治家が本来おかしいんだ。大半の

政治家は国民のためと謳ったそれらしいマニフェストを作り、当選後は自分の権力と給料と支持者たちの利権を守り抜く、それが仕事だ。

ウージ財務部長はそっぽを向いて黙る。私も緊張してきた。答え次第では彼をクビにしなければならぬ。……だが、今危機的状况で財務部長を任せられるような人材がぱっと思いつかない。

「か、勘違いするなよ!! 戦争に負けて国土が荒れてしまつては税収が減つてしまうからな!! それに表舞台に立てなくなるのは困る」

「ウージ財務部長……」

思わず言いそうになつた「成長したな」を胸の奥に押し込んだ。よく考えたらこの人、私より年上だったわ。

「成長しましたね」

ハンナが言いやがった、しかも凜とした声で。なんてことをしてくれたんだ。エマリー軍代理でさえ言うの我慢していたというのに。

当のエマリー軍代理は笑い声を堪えるのに必死なご様子だ。

ウージ財務部長は「なんだとう……」と小さい声で答えるだけで助かった。私はそつ

と胸をなでおろす。

「とにかくありがとうございます、ウージ財務部長」

私が頭を下げると、ウージ財務部長はふんと鼻を鳴らした。どうやらやっていただけるらしい。

「そして、ハンナ諜報長官は諜報活動が続けることが仕事だ。フェーム帝国を重点においてくれ。何かあればすぐに報告するように」

「分かったわ」

ハンナ諜報長官は頷いた。

「フィール外交部長は待機だ。外交は勝利の後に必要となる。むしろ庶務部長としての仕事が多くなると思う、広報課をフル活用して戦意を高めてくれ」

「分かりました」

フィール外交部長は不満そうに言った。貴族の娘で平和を憂いる理想主義者などところがあるフィール外交部長には少し酷な話なのかもしれない。どうか腐らず耐えてほしい。

「エマリー軍代理はフェーム帝国侵攻について作戦を立案するため考えておくこと。正式な指令として出すのは、午後の……六時ほどにもう一度会議をやる。その時に参謀本

部のルム兵站課長を連れてきてほしい。時間は大丈夫か？」

「はい。大丈夫です」

今、朝の九時だから九時間後か。

「了解だ。後は我がユマイル民族戦線の軍事力を信じて、第八次ユマイル・フェーム国境紛争の行く末を祈るしかないか。どうしても五師団では足りないのならば、追加師団を送ることは参謀本部の独断で許可する。軍事のことは軍人に任せる」

「はい！！」

「よし、各人業務に……フィール外交部長、私の演説書と答弁書ってできている？」

「できてます。すでに議会に渡したので、議会事務局の方に聞いてください」

「助かるよ、ありがとう」

前回のネルシイ商業諸国連合のフェーム帝国への信仰の時は大混乱だったので、今回も議会に出ると言われそうで怖くてフィール庶務部長に作ってもらったわけだ。事実、第八次ユマイル・フェーム国境紛争の報を受けた直後にクロス党首がお願いにやってきた。

これで即興で演説するなどというところ狂ったことをせずに済み、答弁もこなせるだろ

う。

「行政調整会議はこれで終了です。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

声が響くと、四人ともぞろぞろと部屋を出て行った。ハンナが私を一瞬見て寂しそうな顔をした。通り過ぎるときに何か声をかけようか迷ったが、結局私は声をかけられなかった。

ぼうっとしていたが、そんなことをしている場合ではない。

私は部屋を出ると議会へと向かう。歩いて十分ほど、また慌ただしくなった廊下を通り議場へとたどり着く。事務局へ行って庶務部議対課から預かっていた答弁書と演説文を受け取る。

議場の入り口にはクロス党首が待っていた。

「忙しいところ申し訳ない」

「いえ。それに私自身も今回は国民や議会に直接呼びかけておこうかと思って」

「我が国に直接関係することじゃな」

「ええ」

クロス党首が先に議場へ入っていく。

「ご武運を祈るよ、ウォール議長」

そろそろ六時になる、私は早く会議室についてこうして一人座っていた。

ノックが響く。

「どうぞ」

私が声をかけると、聞きなれた声でした。

「失礼します」

ドアを開け、エマリー軍代理と参謀本部のルム兵站課長が入ってくる。ルム兵站課長はどちらかというと冷淡な人間という印象を受ける。笑わず論理的に物事をつめる。極右的な思想を持ち良くも悪くも我が強いミュー・フラワー作戦課長とは正反対だ。

ルム兵站課長はドアの入り口付近で私に敬礼をしてきた。私は答礼をした。

こういう時とつさに敬礼できるのは、やはり私が軍にいた経験のおかげだ。当時叩き込まれたわけだし、今になってその経験が役に立っている。

「お待たせして申し訳ありません。ウォール議長」

「いいや。私が十分ほど早く来たただけだ。むしろ指令をきっちり守った君たちは立派だ。約束の時間を守るなんて、まるで初等学校の生徒に言い聞かせているように聞こえるだろう？ 違う。大人……それどころか議員でも守れないやつが多い。いい大人が何をしているのか」

私の愚痴にエマリー軍代理は笑ったが、ルム兵站課長はまっすぐ真顔で前を向いたまままだ。うむ……ルム兵站課長と私は面識もない上に、コテコテの軍人ならば上下関係を重視するだろう。こんな軽口を叩かれてもルム兵站課長は迷惑だろうし、さっさと本題に入ってしまったおう。

「第八次ユマイル・フェーム国境紛争の経過報告を聞きたいが、伝令使はこなさそうか」

「午後四時ほどに伝令使が到着しました。今日の早朝にはフェーム帝国の攻撃から態勢を立て直すことに成功し、反攻に転じ始めた」と

私たちが夕方から出発し、伝令使から第八次ユマイル・フェーム国境紛争が昨日の夕方始まった事実を聞かされたのは今日の早朝。だから私たちが第八次ユマイル・フェーム国境紛争について混乱していた時には、すでに態勢を立て直し反攻へと転じていたわ

けか。

「やけに早いな。大丈夫なのか」

先の第七次ユマイル・フェーム国境紛争の時は戦闘状態が二週間続いた。このペースだとフェーム帝国をユマイル領から追い出すのに一週間で切ることになるぞ。

「ユマイル・フェーム国境の指揮官は優秀な人間ですので、参謀本部としては彼の判断を信用しています。私たちは国防に力を入れてきましたから、素直にその成果だと考えます」

「エマリー軍代理がそう考えるならそれでいい。問題はその後だ。単刀直入に言うと、私はフェーム帝国を解体させたい」

エマリー軍代理が緊張した面持ちをする。

「第八次ユマイル・フェーム国境紛争が起きた以上、議長は祖国を守るため軍事権を行使することができる。これほどの大きなチャンスはないだろう」

「私は軍人です。ウォール議長の決定に従い、それらの要件を満たすため作戦を立案し実行するまでです」

「ああ」

「大まかな方針はあるんですか？フェーム帝国の崩壊を誘発させるといっても色々なすべがあるでしょう」

「時間がない。分かっているとは思いますがフェーム帝国はネルシイ商業諸国連合とも戦争中だ。フェーム帝国が弱い状態でちんたらしていると、ネルシイに利権を奪われてしまう。直接的な軍事アプローチになる。具体的には皇帝をフェーム帝国の首都から排除し、占領することだ」

そう。このフェーム帝国の解体における最大の敵はフェーム帝国ではなくネルシイ商業諸国連合なのだ。ネルシイ商業諸国連合よりも早くフェーム帝国を解体させ傀儡国家を作らなければならない。

「皇帝は我さきへと逃げるでしょう。担ぎ出され抵抗されれば結局全土を占領する必要が出てくるのでは？」

「ユマイル軍が首都に入った時点でフェーム帝国に代わる新国家を樹立する。フェーム帝国は皇帝との封建主義国家であって、結局のところ各地の施政権を握っているのは領主たちにすぎない。彼らを集めて新政府を作る」

エマリー軍代理が心配そうに黙る。正直不安が多いプランであるのは認める。エマ

リー軍代理も軍人であるから、政治的判断にあまり口を出したくないのだろう。

「リスクの多いプランなのは認めるが、これが大陸の統一を実現する上で最善手だと自負している」

エマリー軍代理は息を吐いた。

「分かりました。フェーム帝国の首都を陥落させて見ればよいのですね？」

エマリー軍代理は先ほどと打って変わって自身に満ち溢れた顔をして、微笑んだ。おそらく開き直ったのだろう。

" 軍人は最高指揮官の命令であればいつでも、たとえ時の政権が誰であっても、命を捧げますよ "。

かつてのエマリー軍代理の言葉を私は思い出す。軍人は軍人の枠組みに囚われている、シビリアンコントロールが存在している。ならば軍人という枠組みの中で最大限暴れまわるのが彼らにとっての最適解だろう。

そしてこんな狂った方針を提示されたのならばなおさらだ。

「ああ。いくら動員しても構わない。金は戦時国債でたんまりだ。どんな手段を使ってでもフェーム帝国の首都を潰し、偉そうに宮廷で胡坐を組む皇帝を引きずりおろせ」

「はい!!」

エマリー軍代理から力強い返事をいただけた。

「ルム兵站課長」

「はい」

「おそらく君が現地司令官になるだろう。第七次ユマイル・フェーム国境紛争の死線を乗り越えたのは君だ。エマリー軍代理としつかりと意思疎通を図り、職務を全うするよ
うに」

「お任せください」

「他になれば解散だ。参謀本部はフェーム帝国の首都攻略作戦を立案し、第八次ユマイル・フェーム国境紛争終了直後に決行を行う」

「はい」

エマリー軍代理に私が相槌を打つと、二人は一礼して会議室から出ていく。

私も帰ったほうがいいな。後ろからついて行って会議室を出る。

廊下でエマリー軍代理に呼び止められた。

「どうしました……?」

「いえ……。まさかとは思いますが……」

沈黙が襲う。エマリー軍代理も私も居心地が悪い。何を言おうとしているのだろうか。

「自分は先に参謀本部へ戻ります」

見かねたルム兵站課長は私たちに敬礼をすると、駆け足に去っていった。残されたのは私とエマリー軍代理だけだ。

「私は何を言われても怒らない」

私がそう言うとエマリー軍代理は口を開く。

「実は……」

「エマリー軍代理。現地司令官を立てるといのは本当ですか？」

大きな声がしてエマリー軍代理の言葉はかき消されてしまった。振り返ると私の後ろにミュー・フラワー陸軍中将が立っていた。走ってきたようで、見るからに怒っている。

「本当です。まさか盗み聞きをしていたの？」

エマリー軍代理もキツイ言い方をしている。話を邪魔されたせいだろうか。

「いえ。ウォール議長が議会の演説でフェーム帝国に対する懲罰的攻撃を示唆していましたので、参謀本部はその話題で持ち切りです」

「軍人が噂話に現を抜かすな！情けない！」

「申し訳ありません。ですがもし懲罰的な攻撃を行うならば、フェーム帝国侵攻は国運をかけた重大任務です。参謀本部直轄で師団を動かすべきです。現地司令官を立てるな
どと」

「まだ私は何も言っていない！！正式な命令が出るまで余計なことを考えなくていい。
今の軍務を全うしなさい」

「……！！」

ミュー中将は随分と食いつく。エマリー軍代理は私の顔を見た後、ため息をついて、
自分をクールダウンさせた。

「あのねミュー中将、今回は先行する師団がフェーム帝国の首都まで進軍する。参謀本部から指揮するのであれば、一体どうやって部隊に命令を伝達するつもり？」

「そのために伝令使がいるのではないですか」

「伝令使が命令を伝えるまでどれだけの時間を要すると思う？今回の作戦の目的はネルシイ商業諸国連合より早くフェーム帝国の首都に入り、出端をくじくこと。速度が命なのだから、意思決定は迅速に行われるべき」

「ならば現地司令官を私にやらせてください。私は真の愛国者であり、誇り高きユマイル軍人です。なぜルム兵站課長なのですか」

「誰もルム兵站課長とは言っていないでしょう。現地司令官が」

「現地司令官にならないのであれば、わざわざ最高指揮官直々にお声がかかるなんてあり得ません」

最高指揮官とは議長のことだから、私のことだろう。

「彼は第七次ユマイル・フェーム国境紛争で師団長を務めている。実戦経験が豊富だからよ」

「私は"実戦経験が無い素人"だとも言うんですか？」

「あなたが素人だとは言わないけれど、実戦経験の無いものに"国運をかけた重大任務"は任せられないということ。そのくらい分かるでしょう？」

「では、我々参謀本部は一体何をすればいいのでしょうか？」

「正式な命令は追って出すけど、おそらく現地部隊から伝令使によって報告される戦況の解析ね」

「我々は庶務課か……」

ミュー中將は小声で吐き捨てた。

「まあ、首都陥落後の占領地の軍政は参謀本部直轄になると思うから。いじけていないで肅々と職務を務めなさい」

ミュー中將は無言で敬礼をし、去っていった。このような時でも美しい敬礼をしていて、やはりコテコテのエリートなのだと思った。

「全く……」

エマリー軍代理が離れていくミュー中將の背中を見ながら、小さなため息をついた。

「相変わらずミュー中將は元気だな。お若い」

「そうですね。十八で参謀本部に入ってしまったんです、ああなるのも無理はありません」

「私はああいった若者は好きだ、まだ理想を諦めていない」

「直属の上官としてはこの上なく迷惑ですけどね」

「……まあ、心中お察しする」

血気盛んな若者を制御するのは極めて難しく疲れるだろう。

「そういうえば、エマリー軍代理は先ほど何か言おうとしていなかったか？」

ミュー中将に横やりを入れられて結局何の話か聞けていなかった。エマリー軍代理は少し考えた後に

「いいえ、大丈夫です。多分疲れた自分の妄想だと思います」

とだけ返してきた。

「各幹部の連携は行政運営において極めて重要だ。躊躇せず、これからも何かあれば報告してほしい」

「……はい」

エマリー軍代理は頷き、私に敬礼をした。

第八次ユマイル・フェーム国境紛争は五日ほど終了した。これは衝撃的なもので、うその報告をされているのではないかとこの国の上層部が疑うレベルだ。実際、参謀本部調査局の職員が視察に行く羽目になった。

かつての第七次ユマイル・フェーム国境紛争では序盤苦戦を強いられ、辛勝といえるものだった。だが今回の勝利はユマイル軍の近代化は成功であり、差が開いていると自信を深めるであろうものだった。私は今まで自分の選んできた選択・政策が間違っていない

るのかと不安であった。こうして目に見える形で出てくるのはありがたい。

最初のうちは戦々恐々としていた参謀本部の職員たちも、報告の回数が増えてくるとともに安堵へと変化していった。そのため、エマリー軍代理とルム兵站課長ら参謀本部は私の命令通り、フェーム帝国侵攻に向け作戦を立案した。

ハンナ諜報長官もエマリー軍代理と差しで話すことも多くなったと思う。諜報部が参謀本部に情報を流してくれるようになったのはありがたい。いいや……そうじゃない。きつとハンナも責任を感じてしまっているのだろう。偽旗作戦をしていたと知られれば悪者は私たちになる。ハンナは……私の大陸統一という夢のために共犯者になってしまった。本来、私の責任だ。

会議室にはフィール外交部長と私の二人。そろそろ紛争後を考えなければならぬ。フェーニング大陸はユマイルだけではない、外交を意識し続ける必要がある。例えばフェーム帝国が頭を下げているのに無理に信仰をしても士気は上がらないし、最悪の場合ネルシイ商業諸国連合と戦う羽目になるかもしれない。

「フェーム帝国からは何か打診はあったか？」

フィール外交部長に聞くと、彼女は首を振った。

「相変わらず賠償と謝罪を要求して来るばかりです。変化はありません」

「そうか……」

それは良かった。ここで謝罪されては困る。これならば安心して自衛権の行使として、フェーム帝国に攻められる。彼らが負けたと認めていないなら、国境紛争は続いていていつまた攻め込まれてもおかしくない。安全保障の脅威であり、議会が不当自衛権として差止請求をすることもないだろう。

とても順調に進んでいる。だが、それはとても不安を誘うものでもある。

「もうフェーム帝国の負けは明らかです。攻め込んだのにまた同じ国境まで押し返されたのですし、軍の報告を信じるなら損害比も深刻なはず。もう……白旗上げればいいのに」

フィール外交部長は悔しそうに呟く。

「仕方ない。彼らが負けを認められないのはフィール外交部長も分かるだろう」

「……そうですね。ユマイルがこれを口実に攻めてくると彼らは分かっているんですよか」

「何とも言えない。私はフェーム帝国の皇帝や中央に会ったことはないから。知ってい

て見て見ぬふりをしているか、本当に彼らは何も知らないのか。どちらでもありえそうなのが、フェーム帝国の恐ろしいところだ」

「戦争は起きないほうがいい……沢山の人が死にますし、敗戦国になればあなたはギロチンです。ウォール議長はそれでもやるおつもりなんですか？」

フィール外交部長の問いに、私は静かに息を吐いた。

「やる。大陸統一のために必須事項だ」

「沢山の人が死んで悲しむ人がいます。そんなものを生み出してまで……人の尊い命よりも大切なものなんてあるんですか……？」

「豊かな社会を子供たちに繋ぐためだ。今犠牲があっても、きっと未来の子供たちはより死亡率が下がって貧困率も減って……悲しむ人は減る。今日よりも明日のほうがよくなる。そのために今の世代の私たちが頑張らなければならない」

沈黙が覆った後

「それは……ハンナ課報長官に誇れるものですか……？」

とボソッとフィール外交部長はつぶやいた。予想外の人物が出てきたので私は思わず驚いて、フィール外交部長の方を見つめてしまった。

「どういう意味だ？」

「そのままの意味です」

「どうしてハンナが出てくる。彼女は……彼女であっても所詮は一国民だ」

「でも大切な人なんですよね」

「大切……。ああ、それは間違っていない」

私は嘔み締めるようにつぶやいた。

「ハンナに誇れる……？」

私の無意味な繋ぎ言葉だ。

「ハンナに誇れるものだと思う。貧しい人々が豊かな社会によって救われる。それが私のやりたいことできつとハンナに対してもやりたいことだと思う。私たちは元々弱く貧しい人間だったから。大陸統一の経済的恩恵でエリートたちが先に裕福になり、それが労働者へと移っていく。豊かさとは結局、労働者たちの所得だ。その段階までたどり着く必要がある」

「ハンナ諜報長官と一緒に暮らしたいと思わないんですか。私が男なら、大切な女性を危険な諜報長官に任命できませんけど」

「あ……ああ」

私は唸るような声を出した。そんなことわかっている。ずっと悩んできたことだから。だが、私は甘え続けた。

「そんな怖い顔をなさらないでください。すみません、私が軽率でした」

「できない」

「え？」

フィール外交部長は私のタイムラグに驚いてこちらを見た。

「ハンナと逃亡するなんてできない。大陸の統一を実現し、豊かな社会を実現する。そしてその潤沢なリソースによって初めて、人間が人間らしく生きられる。私はユマイルの未来だけではなく人類の未来に貢献したい。私もハンナもつらい思いをしてきた。そんな社会間違っているし、ここで何も変えられず情けなくハンナに縋りつくなんて、それこそハンナに誇れない。大陸を統一する上で諜報長官に相応しい人間がハンナしかないのであれば、例えハンナが危険にさらされたとしても、私は彼女を任命する」

「女性は本当に苦勞しそうですね」

「え？」

「いいえ。何でもありません、ウォール議長ならこうおっしゃられるんじゃないかと予想してましたので」

また、沈黙になりそうだったがすぐにフィール外交部長は間を持たせた。

「そういえば国民から手紙が届いていますよ」

フィール外交部長は地面に置いていた木の箱を取り出した。中を見ると郵送物がバケツの水のように入っている。

「これは？」

「庶務部に届く、国民からの"ご意見"です」

「ああ。なるほど……」

どれだけの罵声が書かれているか楽しみだ。きっと税金が高いだの、補助金増やせだの、大陸統一に現を抜かすなとか書かれているのだろう。

私は目を細めて手紙の山を見ていると

「ウォール議長……。批判ばかりじゃなかったですよ。ほらこんなお声もありました」

フィール外交部長は開けた封筒を手渡す。それを無言で受け取り開いた。

中を見ると随分と汚い字だった。いいや、私よりはきれいか。

言葉遣いからもおそらく差出人は子供だろう。

「汚い字でしょう。きつとウォール議長のために頑張って書いたのだと思いますよ」

「庶民の中ではきれいなほうだ」

「そうですか？」

「ああ。君のような貴族の娘からは信じられないかもしれないが」

「私は自分の字を一度もきれいだと思ったことはないです」

「それは環境だ。仕方ない」

むっとするフィール外交部長をよそに私は手紙を読みだす。

差出人は初等学校の生徒らしい。家も貧しく、学校ではいじめにあっているようだ。

いい気分はしない。だが、現実問題として悪い奴らは存在する。大人でさえ悪いことばかりしているのだ。子供にそれを求めるのは酷だろう。減らしていくべきは当然だが、そもそも論、私たち大人は偉そうに子供たちを指導できる立場なのだろうか。自分の今までの人生を正直に晒しだして、それでもなお子供たちを堂々と叱れる大人は果たしてこの世に何人いるか。

国家の指導者たちですら足の引っ張り合いは日常茶飯事だ。

彼曰く、私の力強い言葉と、大陸統一の熱い夢に感激してくれたらしい。彼も私のように偉大で強い指導者・軍人になるのが夢だと。

「私の行動がこの子の勇気になっているなら、喜ばしいことだな……」

「確かにそうなんですけど、ちょっと複雑です。弱い子供たちに強くなるように強いるのは酷だと思いませんか。弱い人が弱いままで安心して暮らせる社会が理想じゃないかと……」

私は目を伏せた

「それは理想論だ。私に今こうして多くの人が頭を下げるのは、権力のおかげだと分かっている。……フィール外交部長も、若くしてこのような名譽ある仕事をやれているのは貴族・アンブレラ家の令嬢だからだ。家柄もない私が弱いままなら、誰も相手にはしてくれなかったはず」

「そうなのかもしれませんが、あんまりじゃないですか」

フィール外交部長の悲しそうに切羽詰まった声に私は頷いた。

「私も……本当はそう思う。だけれども、今は無理だ。いつか……いつか必ず実現しよう。そういう社会を」

フィール外交部長は頷く。

「それにしても手紙沢山あるな。国民が政治に関心を持ってきている何よりの証拠だ。我が国のナシヨナリズムも随分と発展した。後継者に困らなそうで私は嬉しい」

「本当ですね」

私は何気なく一番上の手紙を開き読んだ。庶務部の監査のため封筒からはすでに開封されていた。

「全部の手紙の中身を監査してくれたのか」

「ええ。念のためです」

「庶務部も大変だな。ありがたい」

「是非お時間のある時に、庶務部にも顔を出してあげてください。彼らは普段日の目を見ない縁の下の力持ちですから、ウォール議長が来ると喜びますよ」

「ああ」

私は手紙を開く。打って変わっておそらく大人の字だろう。女性か。筆跡というのは十人十色で興味深い。

読んでみると四十くらいの母親で息子が軍人として第八次ユマイル・フェーム国境紛

争に従事しているようだ。母親として祖国に貢献する息子の勇気を評価するとともに、やはり心配さを隠しきれていない。きっと愛されているのだろう。

「子供を憂える気持ちか」

「兵士の母親からでしたか」

「ああ。軍人の手紙も庶務部に渡されるのか？」

「いいえ。軍には軍専用の窓口があるはずですが」

「そうなのか。ならなぜわざわざ……」

「ウォール議長に知っていただきたかったのではないですか」

「私に……」

「やはり母親としては子供が心配でしょう。自分の子供を危険にさらす戦争が起きてほしくないはずです」

私は視線を落として手紙を箱に戻した。

「ウォール議長……？」

「ああ。あまりいい気分がしないな」

「そういうものです。親というのは」

「母親がいたことがないので私はよく分らない」

私を虐待していた養母は今どこにいるのだろうか。そもそも生きているのだろうか。まあ、どうでもいい話だ。

「諸君。よくぞ集まってくれた」

私は力いっぱい声を出す。かつて私が新兵だった時の上官にしたあいさつのようだ。

いいや、今回ばかりは適切だろう。なにせ、目の前にいる全員軍人なのだから。元軍人、そして最高指揮官としてこのくらいはしなければならぬ。

彼ら兵士は不動で立ち、ぶれない。高い台の上にいる私が俯瞰しても、動いている兵を一人も確認できない。これはまさしく日頃の厳しい訓練の成果といえよう。

「フェーム帝国は傍若無人にも我が国に侵略を開始した。彼らは私たちの国土を踏みこじり火砲を飛ばし攻撃している。フェーム帝国は大昔の中世の栄光に縋り付き、未だに敵国を侵略し王族たちを諸侯として送り込み、植民地支配することを夢見ている。

フェーム帝国は狂信的イデオロギーに支配されており、近代国家としての尊厳は一ミリもない。

狂った隣国に私たちは幾度もなく苦しめられてきた。我がユマイル民族戦線はフェーム帝国から独立を勝ち取った時も、そしてそのあとの八度の及ぶ国境紛争も。だが、我々が何もしいないと思っているならばそれは大間違いだ。我々独立と尊厳を断固として守り、それを邪魔するものを排除する力を持っている。

フェーム帝国はいまだに私たちユマイル民族を下等民族だと信じ、皇帝はフェーニング大陸で一番偉いと勘違いしている。

もう限界だ！！我々は傲慢な皇帝を玉座から引きずりおろし、フェーム帝国を解体する！！領民として所有させられている"フェーム国民"を狂気の支配から解放するのだ！！

ユマイル民族万歳！！われらの母フェーニング大陸に栄光あれ！！

君たちにもパートナーや家族、友達がいる。君たちは名誉ある職であるとともに危険と隣り合わせである。この作戦を最終的に承認し指示したのは最高指揮官たる私、ウォール・グリーンだ。この意思決定の全責任は私にある。

私はこの優秀なユマイル軍兵士を一人も死んでほしくない。戦後、愛する人のところへ戻り、噴水広場を何気なく散歩し、職に就き祖国に貢献してほしい。

だが、だからと言って犠牲の無い戦争など存在しない！！今から始まるこれらの戦いは我がユマイル民族、そしてフェーニング大陸、人類の未来をより良いものにするためのものである！！これから産まれてくるであろう、可愛く未来があり血気あふれた子供たちのものであるのだ！！

私はこれから数百年、生まれるであろうたくさんの子供たちの笑顔を考えれば、どのような犠牲を素晴らしい未来を渡さなければならないと感じる。これは危険であり私は君たちに生きて帰ってほしい、だがフェーニング大陸・人類のより良い未来のためならば君たちを危険にさらすことも厭わない。

どうか誇りを忘れず、幸運と偉大な勝利を楽しみに待っている。今日この時まで……そしてこれからも国防へ多大な貢献をし続けた、我がユマイル軍に心より感謝を申し上げたい」

私の演説を終えると、拍手も動揺もブーイングも怒らない。彼らは私の演説を動かないで聞き続けた。ユマイル軍人としての誇りだ。

私の演説が心に響いていることを願わずにはいられない。

かつて私もあちら側の人間で、軍服に身をまとい高台にいる最高指揮官を見上げる立

場だった。だが、もはや私は上のほうにいる人間になってしまった。軍人の頃そこに立っている人間はいったいどんな気持ちだと疑問だったが、その立場になると、どれほどの重圧かがよくわかる。彼らの生死は私たちの意思によって決められると言っても過言ではない。だけれども、慣れたのかあるいはもはや麻痺してしまったのか、現実離れしたようなふわふわとした感覚でもある。

正しいとは思わない。しかし、大陸統一と人類の未来のためならば私はこれを選んだ。

それは狂気だった。地震や大火事にも匹敵する、狂った空気感。だがそれらとの決定的な違いは、これが「喜ばしいこと」である点だ。

フェーム帝国は滅んだ。中世から四百年ほど続いた由緒正しい大帝国は、彼らが見下してきたユマイル民族によって崩壊した。フェーニング大陸を武力で制圧し、馬で雄大な草原を掛け、反逆者どもの首を次々と剣ではねてきた、偉大な歴代皇帝はこれを予想できなかっただろう。二週間程の短い期間でだ。

ユマイル国境に近いフェーム帝国の諸侯たちは、百年もの間国境紛争という小競り合

いに付き合い続けてきた。無論一方的に搾取するだけの皇帝はそんなもの見て見ぬふりだから、援軍は送らない。八度にも及ぶ国境紛争はたった三諸侯の私兵によって行われてきた。

第八次ユマイル・フェーム国境紛争ののち三諸侯たちを「食い破り」、フェーム帝国の内部に進軍したユマイル軍は彼らの弱さに驚いた。第六次ユマイル・フェーム国境紛争からのベテラン兵は、「ユマイル・フェーム国境の三諸侯は勇敢で劣った武装でありながらしぶとく戦った。内側の諸侯たちは武器どころか戦う意志さえなかった」と報告を出した。かつて勇敢であればあるほど皇帝の近くに領地を持てたが、数百年の世襲を経た腐敗した結果、真逆になったしまった。

皇帝の動きはあまりにも鈍かった。越境攻撃を開始した時点で皇帝は諸侯に大号令をかけず、皇帝直轄のフェーム騎士団は動きもしない。首都から数百キロのあたりでようやく動員の準備が整ったのか、八万人規模のフェーム騎士団が攻撃を開始した。貴族のお遊戯衣装と見間違える重い鎧をかぶり、馬に乗り雄叫びを上げて、団子のように固まって突っ込んできた。彼らは銃や大砲を見たことがないのだろうか、エマリー軍代理は嘆いていた。彼らは名誉ある死など得られず、得られたのは砲弾による肉片だ。新

兵の訓練にはちょうどよかったかもしれない。

補給へ居合わせ十八師団、四十五万人のうち、戦死者はたった千人弱。しかもそのほとんどが、国境付近の領主との戦闘なのだから驚きだ。

第十九代フェーム帝国皇帝は首都を追われ、逃げ込んだ先の領主で農民の暴動によって殺された。私は首都に居座る「偉大な皇帝陛下」と話がしたかったが、それは叶わなかった。フェーム帝国の象徴である皇帝、フェーム騎士団、首都、すべてでなくなった。フェーム帝国の崩壊がユマイル軍によって発表され、新政府樹立のためユマイル民族戦線の幹部と旧フェーム帝国の諸侯たちが首都に終結しつつあった。

私の馬車が向かっている場所でも当然フェーム帝国の首都だ。仰々しい警備に囲まれた私たちの馬車はフェーム帝国の領民から見ると、フェーム教会が言う「異邦者」に見えるかもしれない。祖国が崩壊しつつあるのに、フェーム帝国の庶民は無関心で、まるで機械のごとく自分の仕事を続けていた。彼らは今日の寝床と食事さえあれば、社会のことなどどうでもいいと言わんばかりに。

場所から見えるものは、骨董品ばかりだった。一つかあるいは二世代も前、我がユマイルの山奥で見かけるようなものばかりだ。フェーム帝国の領土は中世から時が止まっ

ていた。見渡す限り農地農地農地……そして風車と領主のための贅沢な城だ。工場が一つもない。鉄道もない。変化を拒み、ここには悠久の時間が流れていた。

長い道のりだった。鉄道のありがたみが良く分かった。ネルシイからユマイルに帰るときには鉄道があつたが、今はすべて馬車だ。速度が全く違う。

民族大移動がごとく私たちユマイル幹部の馬車に並走し、軍人たちが馬に乗っていた。参謀本部は首都陥落を最優先の作戦を決定したため、途中で我々が襲われるのではないかと非常に危惧していたのである。

三日間の長旅を経て、ついに私たちはフェーム帝国の首都・「帝都フェーム」に到着した。そこは街全体を包む巨大なレンガの壁が覆っていて、城壁として機能していた。まさしく城壁都市であり、汚れ崩れている茶色のレンガは芸術的で圧巻であつた。かつて中世の者たちはみな、きつとこのフェーム帝国の皇帝が住む首都・「帝都フェーム」に憧れていたのだろう。技術は時代遅れになるが、芸術は時代遅れにならない。

小さく今にも壊れそうな跳ね橋を通ると、町も城壁に見るに劣らない素晴らしい出来だった。茶色いレンガと赤い屋根、ところどころに雑草が生えていて歴史を感じる。坂になつていようで、段差のように家々が連なっている。自然と視線を上げると、最後

に視線が行き着いたのは巨大な城だった。

ここがフェーム帝国の皇帝の住処。もはや建物というより敷地だな。そのくらい大きい。

我がユマイル軍の管理下に置かれ、城はユマイル軍の兵士が警備をしていた。街の中には人っ子一人いなかったが、きつと戒厳令が敷かれているのだろう。

馬車は城の中には止まると、ドアが開けられた。

「ウォール議長！お疲れ様でした！！」

兵士二人に敬礼をされたため、私は馬車を降りたのち返礼を行った。後続の馬車から、フィール外交部長、エマリー軍代理が降りてくる。

「長旅ご苦労様です」

私が二人に声をかける。彼女らは頷いてくれた。

「さすが、フェーム帝国だけありますね……美しい城……」

フィール外交部長はうっとりとした顔をして呟いた。貴族の娘だからだろうか。

「もはや都市の城壁は防衛設備として機能していませんけどね。現在の大砲から見れば紙同然ですし、城壁の外から放物線を描いて内部の都市を砲撃することもできます。」

フェーム騎士団は帝都フェームの外に出てきて迎え撃ったそうですが、確かに立てこもれば悲惨なことになっていたでしょう」

エマリー軍代理は軍人だった。……人によって評価が分れる都市なのだろう。

ユマイル兵が近づいてくる。

「失礼します！！すでに旧フェーム帝国の諸侯たちは会議室に集められています。どうなさいますか？」

「分かった。すぐに行く。フィール外交部長、例のものは持ってきましたか？」

「ええ、大丈夫です。外交部職員が持っています」

「よし、なら行こう」

石造りの古風の廊下を通る。美術の教科書に載っているであろう美術品たちが廊下に置かれていて、床も石でできている。

入ると、そこはあまりに巨大な会議室だった。天井は異常なほど高く、上には壁画が描かれている。部屋には三十人にも及ぶ諸侯たちが座っていて、私が入ってくると緊張した面持ちで立ち上がった。……そうか、彼らにとって私たちユマイル軍は皇帝に代わる新たな権威になってしまったわけか。

ユマイル兵の案内に従い、私たちは一番奥の指定席まで移動させられた。

外交部職員が二人、フィール外交部長、そして軍からはルム兵站課長と左官クラスが二人、エマリー軍代理、そして私ウォール・グリーンである。

諸侯と見渡すと驚くほど、おじいさんばかりだ。中世の神父が好む白く遅しいひげであるが、近代化が進現代ではもはや旧世代の産物ともとらえられる。

「皇帝の首都からの敗走をもって、フェーム帝国は崩壊しました。その後「帝都フェーム」はユマイル軍、各領地は各領主が統治を行っていました。フェーム帝国崩壊後の後継政府として、「フェーム諸侯連合」の樹立を宣言します。また建国後、「ユマイル・フェーム安全保障条約」、「帝都フェームの文化的保護に関する条約」を締結します」

私はフィール外交部長に目配せをすると、外交部職員たちは分厚い書類を取り出した。「これがユマイルが策定した憲法草案と二つの条約です。これらはフェーニング公用語と……フェーム帝国古語の二つのバージョンを用意したのでご安心を。憲法発行後速やかに建国宣言を行い、憲法に基づき第一回諸侯会議を開催し、諸侯長を選出します。条約二つはその時に諸侯長と締結を行います」

フェーム帝国古語は中世に使われた古語で、もはや誰も使っていないのだが、フェー

ム帝国はいまだにそちらの文書を作ることにこだわっている。そのため、わざわざ外交部には二つのバージョンを作成してもらった。

「わしらは領主のままなんじゃろうな？」

突然一人の領主が発言した。

「ええ。皇帝がいなくなるだけで今までの領主が領地を支配するシステムはなんら変わりません。むしろ、皇帝が諸侯に対して決めていた税制は諸侯会議によって決定されるようになります。諸侯は自分たちで中央政府の税率と使い道を決められるようになります。詳しくはこの憲法草案をご覧ください。あと、国防安定化や帝都フエームの文化的保護のためユマイルから軍事顧問を……」

「もういいです。いやあ、これはありがたいお話ですな。別にこちらは領主であり続けられれば、ほかはどうでもいいので」

その諸侯が吐き捨てるように言った。諸侯たちはがやがやと話し出して、騒がしくなる。

彼らから見ると、もはや皇帝は自分たちに税をかけ贅沢をする害悪でしかなかったのだらう。そんな皇帝がいなくなり、自分たちで税率を決められるとなれば万々歳。自分

たちの領地が維持できれば何も興味ない。

当然ユマイル民族戦線としてもありがたい話で、諸侯がバラバラになってくれれば国家としての脅威はなくなるだろう。今まで曲がりなりにもフェーム帝国が脅威であったのは、皇帝という君臨する権力者がいたからだ。もし皇帝が有能であり信頼されていれば、真っ先に諸侯たちに動員をかけユマイル民族戦線とフェーム帝国の戦争は泥沼化していたかもしれない。だがネルシイ商業諸国連合に侵攻されても皇帝はオロオロするだけで、焦った諸侯たちが抜け駆け和平交渉を始めたあたりから、もはや皇帝に権威などなくなってしまうていた。

これで新たに誕生する"フェーム諸侯連合"は国家というよりも、諸侯たちの緩やかな同盟に近いかもしれない。フェーム諸侯連合のトップである諸侯長も所詮、諸侯会議のまとめ役に過ぎない。

諸侯たちは全く興味を示さないが"ユマイル・フェーム安全保障条約"にはフェーム諸侯連合が侵攻を受けた際、ユマイル軍がフェームへ出兵できることになっていて、フェーム諸侯連合は物資の提供が義務づけられている。また"帝都フェームの文化的保護に関する条約"は皇帝の直轄地である「帝都フェーム」の統治権をユマイル軍が引き

継ぐということだ。国民国家からすればこれほど屈辱的なものはないだろう、我がユマール民族戦線ですんなり条約締結しようものなら暴徒化した国民に殺されるだろう。

しかし、どの諸侯も気に留めない。なんなら、ユマール軍に守ってもらえてラッキーとしか考えないのだろう。自分の所有物である領地と領民と資産が守れば、ほかに興味はない。

なぜなら、もう満たされているからだ。農民が農産物を作ってくれるし、徴発した料理人が最高の料理を作ってくれる。女が欲しければ一番きれいな領民の娘と結婚すればいい。住居は領主が代々受け継ぐ巨大な城がある。

人間は自分のおかれている環境に満足してしまったとき、もう外へと目を向けようとならないのだ。

こんな重大事態なのに、聞かれるのは本当に「わしらは領主のままなんじゃろうな？」だけだった。外交部が作り、私の頭に叩き込んだ想定問答集は一度も役に立たなかったのである。

事務的な手続きをフィール外交部長ら軍・外交部官僚に任せると、エマリー軍代理と私はユマール軍の警備兵を連れ会議室を出た。

「フェームの諸侯、本当に無関心でしたね」

エマリー軍代理がつぶやいた。

「ああ」

「これもユマイル軍の近代化の賜物でしょう」

エマリー軍代理が嬉しそうに呟く。軍とは勝利を勝ち取るものである。日頃の訓練や戦術、装備がこれほど綺麗にフェーム帝国崩壊へと結びつくと、こうも言いたくなる。

「ああ」

「……何かご不安なことでもあるのでしょうか」

エマリー軍代理が私に聞いてきた。

「こんな簡単に勝てたのは相手がフェーム帝国だからだ。……もう一国ある。ネルシイ商業諸国連合はこんな簡単に勝てない。ネルシイは必ず抗議してくる。フェーム帝国の利権がユマイルに独占されたとなれば看過できないはずだ」

「はい」

「だが、ネルシイの動きが鈍かったのが幸いではあるし、もしネルシイがフェーム帝国に本気で攻め込んでいれば、フェーム帝国には親ネルシイ政権が誕生していた。奪われ

る前に奪えて良かった」

私がそう呟く。

「ネルシイ商業諸国連合の軽武装方針が転換する前に、けりをつけないといけない。

ユマイル軍はこれからが本番だ」

「お任せください」

私は頷いた。

「そういえばドルム・ドクルはどうした？ 関税同盟の時フェーム帝国大使を務めていたはずだが」

ドルム・ドクルはフィール外交部長とネルシイシティで交渉したときに、フェーム帝国の大使を務めていた人間だ。……あの感じの悪い彼である。

「軍は把握しておりません。皇帝と一緒に敗走したんじゃないでしょうか」

「皇帝は敗走した先で暴徒に殺されたと、諜報部のレポートに記されていたが」

「ええ。ですから、ドルム・ドクルも殺されたのかと。皇帝の権威がないのなら、側近なんて無価値です」

「しかし、諜報部はよくこんな情報を持つてくるものだ」

皇帝といえばフェーム帝国の象徴だ。その生死など最高機密情報と言ってもいいのではないだろうか。

「参謀本部では、諜報部に魔法使いが所属していてそれで世界中を盗聴しているんだ、ともつぱらの噂ですよ」

「魔法があるなら、諜報活動ではなく戦略兵器として活用したいものだな」

私は後ろにいるユマイル兵に話しかける。

「私は帝都フェームに宿泊すると決まっているがどこに行けばいい」

「はっ!!この城に貴族室がございますので、そちらをお使い下さい」

「この城か……。敵本拠地で寝るなんて、複雑な気分だな」

「申し訳ございません。ただ、議長を兵舎に寝泊まりさせるわけにもいかず……」

兵士は申し訳なさそうに答えた。

エマリー軍代理が話割って入る。

「議長室は軍が嚴重に警備いたしますのでご安心ください。私腹を絶やしに絶やしたフェーム帝国の貴族だけあり、家具も装飾品も一流ですよ」

「なるほど……フィール外交部長らもそちらか」

「ええ。ただ、私は兵舎です。ルム兵站課長と帝都フェームの統治に関する相談もありますので」

「なるほど……」

いくら敵を殲滅したからと言って、ここは元敵地の真ん中なのだ。何があるか分からない以上、軍は厳戒体制を維持することだろう。

「帝都フェームの統治は軍事顧問という形でやるのだろうか」

「ええ、そうです。帝都フェームには選挙で選ばれた名目上のトップ"知事"がおられますが、同時にユマイル軍事顧問と常駐師団がいて政治に干渉する、間接統治という形になります」

「軍事顧問の候補は？」

「参謀本部としては現地司令官のルム兵站課長をそのまま軍事顧問にする計画です」

「それでいい。優秀な人材がいなくなるが、これほどの適任者はいないだろう。フェーム帝国の利権を維持するためにも重要だ」

私は多すぎる課題に頭を抱えざるおえなかった。

「お疲れでしょうし、少し休まれては」

エマリー軍代理に諭された。

「ああ、そうするよ……。長旅と会議で疲れた。君、部屋まで案内してもらえるか？」

後ろの兵士に私はそう言った。

その日、私は貴族のようであった。ユマイルの議員宿舎もきれいで文句なしだが、こちらは中世の風情のあるものだ。部屋は広々としていて、廊下だけではなく部屋にまで絵が飾られている。

ここにいた貴族はどうなったのだろうか。多くは皇帝とともに逃亡したと報告されているが、何人かはユマイル軍にとられ処刑されている。道徳的なものとはかくとして、国益的には妥当な判断だろう。各地の統治を担っている諸侯を味方につけるのは大切だが、皇帝を守り利益を得る彼らは邪魔なだけだ。むしろ生き残り、諸侯にユマイル民族戦線への反乱を煽られると危険である。

仮に亡命した先でも、もはや皇帝の後ろ盾がない以上、帝都フェームでの贅沢な生活は二度とできない。権力者は大きな権力と富を得られる代わりに大きな責任もある、それはいついかなる国・時代であっても同じだ。

今日は久しぶりに残業なしの健康的時間に睡眠を始めた私だったが、やはりどれだけ高級であっても慣れない寝床は寝づらく、深夜に目が覚めてしまった。

するとどこか歩きたい気分になって、城を歩くことにした。我ながらとても子供じみた発想である。

部屋を出ると、警備に当たる兵士が二人いる。

「お出かけですか？」

二人は私を見るなり敬礼をした。

「こんな時間まで警備とはお疲れ様。眠れなくてね。少し城の中を散歩しようかと」

「警備兵が巡回しておりますが、この区画は宿泊されているのはフィール外交部長とウォール議長しかいません。廊下には美術品があり、あちらにはバルコニーがありますので気分転換によろしいかと」

「この区画と言うと貴族室があるところだろう？驚いたな、貴族室は沢山あるし大体馬鹿みたいに広いのに、たった二人しかないのか」

「そのくらいこの城は広いのだと思われます」

なるほど、こんな贅沢な使い方をしても余るというわけだ。

私は廊下を歩きだすと、兵士二人は私を見送るかのように敬礼をした。

確かに広がった。部屋は沢山あるのに、部屋と部屋の間隔が異常に広い。廊下はあまりに横幅があつて、一人で歩くと不気味ですらある。狭い建物も苦痛だが、広すぎると得体の知れない恐ろしさを感じるのだなあ。

廊下の薄暗いランプに照らされ、一人の人影が見えた。女性であるが、明らかに軍服ではない。侵入者か……？私はゆっくりと慎重に近づく。

「だ……誰ですか……？」

声で分かった。

「なんだ、フィール外交部長か」

近づく、フィール外交部長はほっと肩をなで下ろして笑った。

「ウォール議長ですか。驚かさないでください……。私、びっくりしました……」

フィール外交部長はふりふりの白のワンピースをパジャマとして使っていた。

「じろじろ見ないでください……」

フィール外交部長は赤面してそっぽを向いた。

「すまない……。だが、警備兵でもその姿を見せたのだろう。城内に兵士がいる以上、

他人に見せられない恰好をとるべきではないと思うが」

フィール外交部長はそっぽを向いたまま小声で

「いえ、ウォール議長にはあんまり……恥ずかしいです」

とつぶやいた。私に見せると恥ずかしいのか。嫌われているのだろうか。

「そういうことなら凝視しないよう善処する」

私の答えにフィール外交部長は頷いた。

「ところで、どうしてここに？」

「慣れないベッドは寝づらくてですね……」

「ああ、なるほど。私もだ」

私が自嘲気味に笑うと、フィール外交部長もつられて笑った。

幅広い廊下の横には美術品が飾られている。

「美術品にご興味あるんですか……？」

フィール外交部長が話しかけてきた。

「いいや。美術品鑑賞は上流階級の嗜みだと言われたりするが、私には全く分からない。

所詮は庶民だ」

すると、フィール外交部長は歩いてきて私の隣に立った。

「これは百年ほど前の作品です。ちょうど近世の末期のあたりでしょうか」

「詳しいのか？」

「上流貴族ですから」

フィール外交部長は私に微笑んだ。

この絵は一人の女性が描かれていて、古代人の衣装であるヒマティオンを着ている。そして左手には……『神に等しきわが王』と書かれた本を持っている。

「『神に等しきわが王』……」

「ええ。近世を代表する本で国は王によって統治され、教会であっても干渉してならないと書かれた重大な転換点です」

「権益を集中させたいフェーム帝国の皇帝としてはこの上なくありがたかっただろうな」

「結局、集中させたのは利権だけで権力を集中させることはできませんでしたね」

「ああ。彼らが欲しかったのはうまい汁だけだ。諸侯を解体して中央集権政府を作るなんてできなかったんだ。結局近代のユマイルとネルシイという国民国家発展の頃には、

政治体制が周回遅れになってしまった」

私は呟いた。永遠なんて存在しないのだろう。

「それにしても当時最先端である『神に等しきわが王』を持ち、古代人のヒマティオンを着ているとは、不思議なものだな」

「この作品を描いた画家レッデリー・レートはフェーム帝国の後進性への批判したそうです。『神に等しきわが王』なんか持ち出しても、結局諸侯に言われて農作業をするだけの領民から見ればどこ吹く風だと」

「国民一人一人が国家へ当事者意識を持つには封建制や王政を通り過ぎ、ナショナリズムに目覚めなければならぬ」

「そうですね」

フィール外交部長は頷いた。

「いつかネルシイ商業諸国連合もユマイル民族戦線も、停滞し時代遅れになり腐ってなくなるだろう。フェーム帝国のことを馬鹿にできない」

「ええ」

「まあ、我がユマイルはネルシイに滅ぼされないよう頑張らないといけないわけだが」

私は眠さと重圧から引き攣った笑みを浮かべる。

「平和を愛し、民を思い続ければ、きつとうまくいきますよ」

「そんな理想論な……」

私があきれた声を出す。

「でもそれが政治です」

ハンナが私の頭の中で「そんな甘い考えは通用しないわ」とつぶやいた気がする。

「ああ。無謀な理想をいつか叶えられると信じてやるのが政治だ」

私は反論したい気持ちをぐつと殺してそう答えた。

フェーム帝国崩壊後、フェーム諸侯連合が発足し諸侯の中でも旧王族であり序列の高い、エイツ・クレームがフェーム諸侯連合・初代諸侯長に就任した。彼はユマイル軍事顧問の指導の下、懲罰的攻撃を加えたネルシイ商業諸国連合と停戦交渉を開始した。かつてのフェーム帝国はネルシイが占領した地域の返還と賠償金を要求していたが、

フェーム諸侯連合はあくまで停戦のみに絞られた。これはフェーム諸侯連合の意思というよりも、ユマイル民族戦線の意味だと言えるだろう。我々としては旧フェーム帝国の

権益問題で、不用意にネルシイ商業諸国連合を刺激しなくなかった。

しかし……私も予想できていたことだが、ネルシイ・フェーム停戦交渉は難航した。ネルシイは当然フェーム諸侯連合がユマイル民族戦線の傀儡国家だと分かっていたし、自分たちが軽軍備路線で大動員できない中、ユマイルが旧フェーム帝国の利権をかつさらったのに激しい不満を示していた。

フェーム諸侯連合の発足から一週間ほどたったところ、私とフィール外交長、エマリー軍代理らが本国へ帰ることとなり、十八師団は帝都フェームへ駐留する四師団を残し転用されることとなった。ルム兵站課長らはユマイル軍参謀本部から正式に出向し、フェーム諸侯連合のユマイル軍事顧問に就任した。

帝都フェームを離れるとき、私とエマリー軍代理はルム兵站課長に話しかけた。

「このような仕事を任せて、申し訳ない。危険で不安定なものであり、……端的に言えば出向だからな。だが、決して左遷ではない。これは君にしか頼めないことだ」

「自分は与えられた任務を着実にこなすだけです」

ルム兵站課長は軍人らしく答えた。

「うむ。ありがたい言葉だ。フェームのことは任せたぞ」

エマリー軍代理がルム兵站課長に話しかけた。

「あなたはいつも軍人として祖国に尽くしてくれました。ありがとうございます。……中央に戻ってくる時は必ずポストを空けておく、私が生きている限りね」

「そこは生きてください」

ルム兵站課長がそう答えた。

「何とも言えない。ここから先はきつと混乱続きだから」

エマリー軍代理が笑って答える。

別れを惜しみ、私たちは馬車に乗り込み帝都フェームを去った。一週間程の短い滞在であったが、この帝都フェームを忘れることはないだろう。

ユマイルへ続く道には、灰色の雲がかかっていた。

また、あの数日にも及ぶ長旅を経て、ついにユマイルの首都ユマイザルに到着した。馬車を降りて、真っ先に私を迎えてくれたのはやはりハンナだった。

「おかえり、ウォール」

ハンナはいつもと変わらない笑みだった。帰ってきたんだなと私は感じた。別にこの行政区は家でもないし、故郷でもない。だが、こうしてハンナが私に「おかえり」と

言っているだけで、帰るべき場所なのだとそう感じられるんだ。

「ただいま、ハンナ」

私は力を抜いて答えた。

「どうだった？帝都フェームは？」

「悪くなかった。さすがだ、芸術的な場所だったよ」

「そっか。私も行ってみたかったな」

ハンナは少し寂しそうにつぶやいた。

……少し、あざといな。

「行こう。大陸を統一すれば、きっといつでも行ける」

ハンナは笑った。

「そうね」

「ウォール頑張っていたから、気分転換になったらいいね」

「私はハンナという時間のほうが幸せだ。安心する」

私がぼそりとつぶやくと、ハンナは真っ赤な顔をしてそっぽを向く。自分の言った言

葉が何を意味するか、時間が経てば経つほど鮮明になり、私も恥ずかしくなった。

「馴れ合うのはよろしいですが、仕事の話も聞いたらどうですか」

振り返ると不機嫌そうなフィール外交部長がいた。

ハンナも不機嫌になった。

「ウォール議長は今帰ってきたんですから、仕事の話なんてしなくていい。迷惑極まりないでしょ」

「職務放棄ですか？」

「ちゃんと後で聞くわ。ウォールとは信頼関係があるもの」

「そうですか」

フィール外交部長が不快そうに言い放ち、歩いて行った。

「ごめんね、ウォール。疲れていたのに、変なところ見せて」

「いいや、いいんだ。本当にフィール外交部長と何があったんだ？フィール外交部長、普段は上品で大人しいのに、ハンナとは相当陰悪で嫌っているみたいだぞ」

ハンナはうつむき気味になる。

「前も聞いた。結局教えてくれないのか。それとも私が信用できないのか」

私がハンナに近づくと、ハンナは視線をそらしたまま言った。

「私、ウォールに嫌われたくないの……。だから」

「私は思わせぶりの態度が嫌いだ。悪い女の常套句じゃないか」

「本当よ！！信じて」

ハンナは慌てた素振りをして私を見ると、苦痛と不安にあふれた顔をした。普通の人間ならばさほど気にしなかったかもしれないが、ハンナにそういう顔をされると罪悪感が大きすぎて、思わず視線をそらした。

前聞いた時も、結局私には直接的に関係ないと。別にフィールとハンナに何があるうと大陸統一に決定的支障をきたさないと。そう結論付けたはずだ。だから、別に聞いたって何になる。ハンナが仮に私を信用してくれていても、言いたくないことだってある。

信じようと毎回思うのに……。どうしてもこんなにも不安感は募るのか。

「ああ……」

「ごめん」

ハンナは静かに言う。

ここでもこんなことを議論していても本当に何にもならない。

「私が留守にしている間、大丈夫だったか？」

「ええ。ウォール議長がいつ帰ってきてても大丈夫なように」

「何か変わったことはあったか？」

「変わったこと……。ネルシイのことでしょうか？」

「これからの最優先事項だ。これからは彼らとの対応が主な仕事になると思う」

「それは諜報部がレポートをまとめてあるから、安心して」

ハンナが微笑んだ。本当に頼りになる。

「助かる。安心した」

「私はウォールとずっと一緒にいるよ。だから、安心して休んで。長旅に疲れたでしよう」

「ありがとう」

「一緒に帰ろう。ウォール」

私はハンナとともに建物の中へ入っていった。

本国の議員宿舎のベッドはともぐつすりと寝られて非常に快適だった。着替え部屋

を出ると、私の部屋の前にはハンナが立っていた。

「おはよう、ウォール」

しっかりと支度を既にしていたようで、仕事モードだったが、気分は正直寝たままのところがある。

「おはよう。待っていてくれたのか」

「あんまり待っていないから気にしないで」

「外で立っていないで、合鍵を使い部屋に入ればよかっただろう」

「いや……それはちよつとウォール寝ていたし……」

ハンナは恥ずかしそうに視線をそらした。

「え？……ああ、寝ているであろう異性の部屋に入るのは抵抗感があるか」

私が頷くと、ハンナもぶんぶん首を縦に振って頷く。

「そうそうそう」

「行くか、仕事へ」

「そうね」

議員宿舎の廊下もどこか懐かしい。いつもある当たり前のものは、当たり前ではなく

なった時に、その価値に気付くことができるのだろう。

行政区に入ると、廊下では官僚が歩いている。今日はいつもより多い気がする。

「今日の最初は行政調整会議ね」

「分かっているって……。お母さんじゃないんだから……」

ハンナはムツとした。

「別にはお母さんではありませんけど、ただウォール抱え込みすぎちゃうじゃん。なんでも一人でやろうとするから心配で……」

「そんなことない。私は色々な人に頼りつきりだ」

「そうかなあ……」

ハンナは疑念にあふれた声を出した。

「とにかく会議に行こう。仕事したい」

ハンナが「話そらした……」と呟いていたが、聞かなかったことにする。

ハンナと会議室に行くと、今日は珍しく誰もいなかった。

「珍しいな、私たちが一番早いなんて」

「確かにね」

私とハンナがそれぞれ指定席に行くと、そこには静かな静寂が訪れる。いいや、無論廊下の音は聞こえているが、壁越しでとても小さくなりもはや小鳥のさえずり声に聞こえる。

沈黙の中、私たちはぼうっと問う句を見つめる。

「ふふっ……」

ハンナが手で口を抑えて嘔き出した。

なぜか理由もわからないが、私も少し可笑しく感じられて笑みがこぼれた。

ハンナが手を外してこちらを見ると、少女のように笑っていて、ハンナの子供っぽい一面をまた見ることができたことで私もうれしくなった。私も笑いが堪えられず、笑い、ハンナの顔を見るとなぜかそのたび笑いが止められなくなって、お互いの顔を見ては笑うという無限ループに陥った。

ひとしきり笑った後、ノック音がした。

「失礼します」

と言って、入ってきたのはフィール外交部長だった。

間抜けにも、お互いの顔を見て笑いあうなどという行為をしていたせいで、元に戻す

ことがあまりに遅れた。そのためフィール外交部長が私たちが見つめあい笑っていたという意味不明行為を見てしまった、その事実が余計ばかばかしく感じられてまた笑いに陥る。

「何していたんですか……？」

「いや、気にするな。全くくだらないことで聞く価値はない」

「価値がないなら秘密にする必要ないですよね……？」

フィール外交部長がなぜか食いついてきた。

「別に誰かの悪口を言っていたとか、そういうのではないから安心しろ」

「見詰めあって、随分と楽しみに笑いあっていましたけど」

うーん……、変な誤解を持ち続けるより話した方がいいか。恥ずかしいことだが、有害な情報ではない。

「いや、誰もいない静寂なところでお互いの顔を見ていたら、なんか馬鹿馬鹿しくなつてな。笑ってしまったんだ。いい年をして何をやっているんだと自分でも思うよ」

「そうですか。早く付き合ったらどうですか」

ハンナの方を見てフィール外交部長が低い声を出した。

「……別にあなたに言われることではないわ。ウォール議長は大陸統一で忙しいのよ、私が邪魔をするわけにはいかない」

ハンナが言い切ると、フィール外交部長はそのまま席に座った。

「まあ、後悔のなさらないようになさってください」

フィール外交部長のこの言葉の後、再び静寂になる。が、ハンナと二人の時とは打って変わってどす黒く、淀んだ何かだ。居心地がとても悪い。

フィールとハンナの個人的関係性を私は何も知らないのです、不用意に口をはさむわけにもいかなかった。

誰か来てくれと願う。数分がとても長く感じられたが、ついにその時が来た。

エマリー軍代理がドアを開け入ってきた。

「おはようございます、ウォール議長」

「おはよう、エマリー軍代理」

エマリー軍代理の三十秒くらい後に、気だるげなウーヅ財務部長が入ってきた。

「これより行政調整会議を始める。具体的な議題はなく報告がメインになると思う。各員報告・共有事項があるものはどうぞ」

フィール外交部長が手を挙げる。

「ネルシイ商業連合から大使館を通じて正式な抗議文が送られました」

「ネルシイが？」

フェーム諸侯連合が誕生したら、ネルシイはフェーム諸侯連合がユマイルの傀儡国家だと警戒を始めていた。ネルシイの議員や新聞ではそういった論評がすでに出ていたが、政府として外交ルートを通じ抗議してきたのは今回が初だ。

「具体的な内容は？」

「フェーム諸侯連合はユマイルの傀儡国家であり、ユマイルによる旧フェーム帝国の利権独占を強く非難する、というものです。要求は旧フェーム帝国の共同統治でした」

「やはり利権をよこせと言ってきたか……」

ある意味想定通りだ。

「どうなさいますか？」

フィール外交部長が私に問いかける。

私は少しの間天井を見上げて深く深呼吸をして覚悟を決めた。

「フェーム諸侯連合は独立国であり、どの国であっても内政干渉は許されないと回答し

てくれ」

「よろしいのですか。それでネルシイが納得するとは思えませんが……」

「だろうな」

私はつぶやいた。

「戦争は避けるべきですよ……」

フィール外交部長が珍しく低い口調で言った。

「無用な戦争はしたくないが、大陸統一のために必要なプロセスであるならばやむを得ない」

「不要でも必要でも戦争が起きれば人が死にますと何度言えば……」

「未来の犠牲を減らせるわけだ。今の私たちが頑張り次の世代に託す。人類史における基本だ。すでにフェーム帝国との戦争をやってしまっただろう、国家間戦争としては驚異的な死者数の少なさだが、それでもすでに何万人が死んだ」

「でも……死んでいった人たちは人類史のことなんて気にしていませんよ！！死人は少ないほうがいいに決まっています」

「フィール外交部長」

ハンナ諜報長官がフィール外交部長を睨みつけた。

「あなたの理想論にはうんざり。私たちのこの犠牲は素晴らしい未来のためのものなのよ、どうしてこの尊い行為が理解できないの？」

「死んでしまえば、その尊さなんてもう二度と理解できませんよ」

「そういう五十年しかない人の人生のことしか考えられないから子供だと言っているのよ。これから人類はあと何千年、何万年続くと思う？大陸統一が未来の子供たちにとってだけのレガシーになるか理解できないの？」

「社会は人間一人一人によってできています。統計値だけ見て分かった気にならないでください」

「安い感動は全体像を見えなくするわ。感情で訴え、貧乏人に甘い幻覚を見せても、彼らの所得は上がらない。豊かさとは結局、労働者たちの所得なのよ」

フィール外交部長が酷く動揺した。今までの声から打って変わって静かなものになる。

「ハンナ諜報長官はウォール議長を受け売りしかできないんですか……？」

フィール外交部長が小さくよく響く声でつぶやくと、ハンナが激しく動揺した素振りを見せた。私は何かまずいものを感じて話を打ち切ることにした。

「もういい、ハンナ。……ありがとう。フィール外交部長も前に言ったとおりだ。私の方針に不満ならいつでも辞表を書いていい。これは嫌味とかではない、別に政治的思想が違ふことなんてよくあることだ。君が反ウォール運動をやっても私は恨まない」

「私が外交部長の座を離れても大陸統一の意思は変わらないわけですよ……？」

「当然だ」

フィール外交部長は考え込んだ後

「私は外交部長としてネルシイとのパイプをしっかりと維持します。議長と意向が相反した場合、ウォール議長に従います。それでいいですよね？」

フィール外交部長が私に顔を近づけ、前のめりに言った。

「ちょっとフィール外交部長」

「戦争には出口が必要です」

ハンナの問いかけをフィール外交部長は無視し、私を見た。私はフィール外交部長の視線を真っ直ぐととらえる。

私は頷いた。

「組織の一員として自覚を持ってやってくれるならいい。人にはそれぞれ仕事のやり方

というものがある。ただし、何かあればすぐに私に報告してくれ、いいな？」

「はい」

何か言いたげなハンナを視線で制止する。

「次、エマリー軍代理何かありますか？」

「はい。旧フェーム帝国に投入された十八師団のうち十四師団は首都ユマイザルに帰還しました。のち四師団は帝国フェームに残り、指揮権はルム軍事顧問が保有しています」

「分かった」

「参謀本部としては、現在首都に駐留していますが、動員を解除し各所属へ戻すことを提言します」

「首都に駐留できないのか？」

「収容率は九割近くですので、駐留し続けることはギリギリ大丈夫でしょう。ただ、二週間にも及ぶ戦争ののち、一週間の慣れない帝都フェームへの駐留、往復にも合計一週間弱。実にか月ぶりの故郷です。これ以上は士気の限界です」

「そうか……」

「きっと、ウォール議長はネルシイのことを心配しているのだと思いますが、彼らも人間です。もしどうしても戦わなければならないのであれば、別の師団を転用するべきです」

「確か、今回はフェーム帝国と距離的に師団を使った」

「そうです。ですからネルシイ付近の師団を使うことになると思います」

「今のところネルシイ国境で何か動きはないのか？」

「特に大きな動きはありません。しかし、偵察の頻度が増えているとの報告が上がっています」

「分かった。ルム兵站課長の後任は決まっているのか？」

「参謀本部兵站課の人間を昇格させる予定です。実戦経験は少ないですが、……ルム兵站課長と比べられては可哀想ではあります」

「兵站課長の人事は参謀本部に任せよう。私より詳しいだろうしな」

「はい」

私はハンナのほうを見る。

「ハンナ諜報長官からは何か？」

「ネルシイが現段階でユマイルに戦争を仕掛けようとしている証拠はないわ。……ただ、明らかに情報統制が強まっている。彼らは民主主義国家ではあるものの、同時にナシヨナリズムを持っているわけで」

「つまりユマイル強硬論が高まっていて、水面下で戦争を考えていてもおかしくない」と

「おそらくネルシイ軍はすでに兵棋演習を始めているし、政治家もその可能性に気が付きつつある。……まあ、実際は本当に戦争のことなんて考えていなくて大衆から支持を得たいがために、ユマイル強硬論を唱える政治家も多いのだけだね。だけど、まともなネルシイの政治家は真剣にユマイルとの戦争のリスクを検証している」

私は一人の男の顔が浮かんだ。

「ビュー外務大臣……」

かつてネルシイシティでフィール外交部長と私で、関税同盟の交渉を行った時のネルシイ外務大臣だ。爽やかなイケメンな男だが、同時に優秀な男だ。

「ああ、あのイケメンの……」

フィール外交部長が思い出して呟いた。

「そう？胡散臭い男よ。男の趣味が悪いんじゃない？」

「ハンナ諜報長官に言われる筋合いはありません」

……また喧嘩してるよ。

「ハンナ諜報長官、話を進めてくれ」

「……ええ。彼は主婦に支持を受けるような男だからユマイルへは基本穏健派の立場を取っている、だがそれは単純にユマイルと戦争することがネルシイの国益にならないだけであって、別に親ユマイルだとかそういうわけではないわ」

「賢明な男だな。……非常に厄介だ。諜報部でうまい具合に処理できないのか？」

処理という言葉にフィール外交部長が顔を曇らせた。

「できたら苦労しない……。なんか周りには優男ポジション気取っておきながら、実際は警戒心剥き出しでだれも信用していないあたり、本当に悪い男よね」

フィール外交部長が嫌そうな顔をしていた。ビュー外務大臣が好みなのか、あるいは単にハンナの悪口が気に障ったのか。……前者だとハニートラップ的にまずいんだけど、大丈夫だろうか。

「ネルシイの情報収集を強化してくれ。もし戦争の兆候があるならば、必ず大規模な動

員がかかるはず。できればその前にシグナルを察知してほしいが」

「分かった」

「ウージ財務部長からは何か？」

「ちゃんと戦時国債はユマイル民族銀行やユマイザル中央銀行が消化してくれるそうだと。これで問題はない」

「助かります。財源がなければ何もできませんので」

「ただし、財政健全化を忘れないでくれ。ポピュリズム的な財政出動を許されない。借金はずっと返済しゼロにしなければならぬ」

古典的保守政治家らしい意見だった。

「分かっています。財政破綻する前に大陸を統一しますよ」

ウージ財務部長はいやな顔をしていた。

「他にないなら、行政調整会議を終える。各員、言うまでもなくこれからの課題はネルシイとの向き合い方だ。ウォール政権として一致団結し、この喫緊の課題と向き合ってほしい。では解散とする」

一日の終わり。朝は降っていなかったが、夕方になったあたりから急に雨が降り始めどしゃ降りになった。民間企業のシンポジウムから帰ってきたハンナが乗った馬車が私は待っていた。

少しすると、馬車がやってきて、職員によってドアを開けるとハンナ・オンバーンが降りてきた。少し疲れているようで、俯き気味の彼女もかわいかった。

ハンナは私を見ると、少し無理をして笑った。

「ウォール？出迎えに来てくれたの？」

「ああ」

「傘、自分でささなくてもいいのに。あなたは議長なのよ？」

私は自分が持っている傘を見た。要はお偉いさんなんだから傘くらい職員にささせればいいということらしい。

「傘も自分でささないと、肝心な時に自分でさせなくなる」

「そう？」

「それに、相合傘みたいなものになってしまう」

私の冗談にハンナは笑った。

職員がさそうとした傘をハンナは取ると、ハンナも自分で傘をさした。

「なら、私も自分でさしましょうか」

「自由にすればいい。私に気を使わなくていいいいぞ」

「うん……」

私たちも建物へ向かって歩き出す。この南口から建物までへの距離は結構ある。周りを見ると警備兵が何人か立っていた。横幅も広く、もはや建物までの通路と言うよりも広場みたいだった。屋外にもかかわらず一帯が石畳でできている。

「シンポジウムはどうだった？」

「ええ。産業スパイについての公演」

「産業スパイ？」

「民間企業の技術を盗むスパイのことよ。近年軍事兵器を民間企業が受注していたりするし、鉄道部品と言ったユマイルの競争力がある産業が狙われている」

「なるほど……軍の研究所ならともかく民間企業にはまだ対策が進んでいないのか」

「そうね……。今の法律は高度化している産業スパイに対応できていないように感じる。法整備が必須よ」

建物に近づき、ふと何か気配を感じて私は横を向いた。私の異様な雰囲気気が付いたのか、私より少し先に進んでハンナも止まった。何か強力で人の悪意を感じられたためだ。横を見たとき、私は間違っていなかったと確信し、あるいはどうして早く気づけなかったのかと悔やんだ。

「パパの仇だ！！ハンナ・オンバーンは恨みを思い知れ！！」

一人の……若い女性の警備兵が私たちに歩兵銃を向けていた。スローモーションにも見えるその行為と、彼女の憎しみと凶器の孕んだ目に確実にやるつもりだと私は確信した。ハンナとは少し距離がある。私が覆いかぶさっても間に合わない。一瞬ですべてを決める重要なことを決めなければならない、躊躇すれば二人とも死ぬ。私はポケットから護身用の拳銃を引き安全装置スライドさせた。

ここでこいつを殺さなければ、死ぬ。そしてこいつの視線的に間違いなく狙っているのはハンナだ。一撃で絶命させる。私は警備兵の頭へと照準を合わせると引き金を引いた。拳銃の発砲音と小銃の不愉快な和音が響く。

幸いにも私は警備兵の頭を打ち抜いていた。警備兵は糸切れたオートマトンのように力を抜け、生きている人間ではありえない全身から力が抜け、倒れた。

安心はできなかった、不安と恐怖で叫びそうになるのを抑えハンナの方を見る。

「ハンナ！！」

不安は的中した。最悪の形で、ハンナはうずくまり胸かお腹のあたりが真っ赤になっていた。

私は藁にも縋る思いで近づく。ハンナを仰向けに寝かせると、明らかに出血方で、服からは血があふれて真っ赤に染まっていた。私は左胸の下あたりにある銃創を抑え出血を止めようとした。

私がおそらく初めてハンナの胸を触った。だが、これほどに最悪の形で触りたくはなかった。ハンナの胸は想像以上に柔らかく暖かった、触っていて幸せに感じられると思う。だからこそ、このぬめぬめとして嫌な感触の大量の血が不安を誘った。

ハンナがここで死ぬかと思うと、今までの頭のもやもやは消し飛び、不安と恐怖に支配された。傘はどこかに飛んで行ってしまつて、雨粒が無慈悲に私たちを直撃していた。

「ハンナ！！」

私の必死の呼びかけにハンナが口を開いた。

「ハンナ！！おい、ハンナ！！返事をしろ！！なあ！！」

私の必死の呼びかけは遠くむなしく響いた。

フルフルと震える身体。いつもよりもか細く感じて、繊細過ぎて砂のようにボロボロに跡形もなく消えてしまうのではないかと思えて、怖くて怖くてたまらなかった。雨と血は滝のようにハンナの身体を覆う。

「ウォール……」

うつろな目で小さくか細い声が聞こえた。

「ハンナ！！」

「私……私ね……。ウォールと一緒に入れてよかった」

「なんで過去形なんだ！！まだいる！！これからこれまでも！！」

「この傷で生存は無理よ……」

そういつて、ハンナは寂しそうに笑った。ハンナの視線は下を向いて、血塗れの自分の体を見た。

「私と話して一緒にいてくれたあの時から、私、あなたのことを信じていた。あなたの言う『人間が人間らしく生きられる社会』……大陸を統一して……それで余裕のある社会がみんなを豊かにするって……あなたは言い続けてきた。だってその思想は、困って

いた私をかばってくれた"あなたそのもの"だったから。希望のない闇の中から……私の手を引っ張ってくれたあなたそのものだから……」

「私そのもの……?」

「ええ。あの暗くて狭い家から私の手を引っ張って、軍へ行こう……社会へ行こう……社会を変えようってその言葉がどれだけ私の支えになったか……」

私の行為はハンナのためになっていた。その事実を忘れて私は安堵する。

私のやってきたことは無駄ではなかった。

「ねえ、覚えている。食堂行った時に隣に家族がいたの」

「ああ……覚えている」

「お母さん、お父さん、娘に息子。四人家族、会話があって優しくて暖かくて……」

そういうとハンナが声を詰まらせた。

「ハンナ……?」

「私たちにも……そういう未来……あったのかなあ?」

私は涙を抑えられなかった。自分でも泣いているのが受け入れられなかった。こんなにも悲しくて声に詰まって何も言えない。

「ごめんね、ウォール……あなたは何も変わっていない。弱くて優しくて、理不尽なことが許せない。……あなたは何も変わっていないかったの。なのに……私は……あなたが社会そのものを変革しようとするのを受け入れられなかったの。だからどこかであたが遠くへ行ってしまったと、思ってしまった」

ああ……。こんなものただの告白じゃないか。ハンナとの二十年以上。もっと早く、伝えておくべきだったことだ。けれど俺は……

「許してくれ、ハンナ。私は社会の理不尽さから目を背けて、二人で慎ましく暮らすなんてそんなこと私には選べなかった。なぜなら……私やハンナのように苦しんで泣いている子供たちが今もどこかに居続けるなんて、そんなの絶対に嫌だ」

するとハンナは安心したように笑った。

「うん……ウォールならそう言ってくれると思っていた、優しいね。ウォールなら絶対にできるよ、大陸を統一して豊かな社会の実現を。だから……」

「ハンナ？」

「その時はどうか、私のことを思い出して……」

「いつも私の背中をついてきて、応援してくれるハンナが何よりも心強かった。私はハ

ンナがいてくれたから……背中を押してくれたからここまでやってこれたんだ……。

私……ハンナがいなきゃ何もできない……」

そういうと、ハンナが手を伸ばして私の頬をなでる。血がついてまだ暖かい、ハンナが生きている。私は絶対に手を離さないよう、きつくきつく握りしめた。

「ごめんね、ウォール……一緒にいてあげられなくて。今までありがとう……私、幸せだった」

強く握りしめたはずなのに、絶対に離さないと誓ったはずなのに、私が握りしめたハンナの手は頬から落ちてしまった。力を入れても入れても入らなかった。

ハンナは目を閉じて力が抜けた。まるで人形が切れたように。終わった。こんな形で終わった。あんまりだ、生き返るのではないか、なんとかかそう思いたかった、だが残るのは大粒の雨で、痛いただけだった。段々と大雨で浄化され、体温が消えてゆくハンナの身体を前にして、私が積み上げてきた"絶大な権力"は全く役立たなかった。

ふと我に返って、何か堰き止めていたものが外れてしまい、泣き出した。一度始まった涙は止まらず、気が狂ったように泣いた。これは涙なのか雨なのか、わからないくらい泣いた。

私の心は少年に戻った。目の前にはおぼろげな微笑む幼いハンナがいた気がした。初めて会った時に、ハンナの姿と匂いは私の目の前で存在し続けた。

ハンナは死んだ。

諜報部と庶務部警察課の調査によりハンナを暗殺したのは、ユマイル軍の第十七師団所属エブレイ・ユートク准尉だと判明した。旧労働党政権時代の庶務部長ガジレイ・ユートクの娘だ。当時の庶務部長ガジレイ・ユートクはネルシイから違法献金を受け取り、機密情報を外部に漏らしていた疑惑が発覚しており、捜査に当たった諜報部の責任者がハンナだった。結局ガジレイ・ユートクは自殺し、その後疑惑が労働党関係者たちに飛び火したため、捜査の本丸はそちらに移った。

ガジレイ・ユートクは表舞台から消えたが、彼の死によってユートク家は離散、この時に娘のエブレイ・ユートクがハンナに恨みを持ったのではないかとレポートに書かれていた。親友に「父親は諜報部に嵌められた」と言っていたそう。実際、ハンナを殺害するときに言っていた「パパの仇だ！！ハンナ・オンバーンは恨みを思い知れ！！」とも辻褄が合う。

彼女がこの行政区の警備に赴任したのは、フェーム帝国戦争に伴う師団大転用の人手不足で臨時に呼ばれたそうだった。レポートによれば「たまたま」だったわけだが積年の恨みを晴らす絶好の機会だったはず、彼女はこの機会を逃さなかった。

政界にとって衝撃的な出来事であり、労働者政権を追い込みミステリアスな諜報部の「女帝」が死んだことをマスメディアはセンシティブに報じた。異様な興奮と警戒感の中、葬儀についてどうするか議論が始まる。

幼馴染である私にとって、ハンナ諜報長官の死ではなく、ハンナ・オンバーンの死だったからだ。親友の死である。家族の死である。……そして、好きだった女の子の死でもある。だから、静かに行いたかった。議会では、ユマイザルにある大規模な会場をハンナの葬儀に使う案も出ていたが、反対デモやトラブルが起きるのは明白だ。私は反対派を押し切り、行政区内部の教会で葬儀を行うことにした。

実際今も行政区の周りでは、ハンナの死を陰謀だと唱える保守党支持者と、ハンナの背後関係を調べると訴える労働党支持者が数万人規模のデモを行い衝突している。

だが、この教会はとても明るく暖かった。

死体は冷たく固まったままだった。二度も戻らないたとえば大陸統一しようとも、どれ

だけ多くの人を肅清し、絶大な権力を手に入れたとしてもだ。死は生命である以上避けられない。人間は神になれず、死人を生き返らせることも、時を巻き戻すことも許されない。それは権力者も一般市民も平等だ。

私の順番の時、ハンナの頬をなでる。溢れ出そうな涙は抑えた。

大陸統一は必ず果たす。たとえどのような犠牲を払おうとも、いいや違う、もう私は世界で最も重い対価を支払ってしまった。

ハンナ・オンバーンが死んだ。私の一番大切な物は土に埋められ、大地へと還元される。

「ありがとう……ハンナ……」

私は思い出さぬよう静かにつぶやいた。過去を振り返ってももう戻ることはできない。思い出のハンナは私の妄想のハンナでしかない。

粛々と葬儀は行われ、浮世離れた教会からハンナ・オンバーンは去った。

棺を見送る私はどうしようもない無力感に苛まれた。ここまで異様な自信に満ち溢れて、大陸統一という狂った理想を掲げていたのに、なんだか軍に入った直後の少年に戻ってしまった。だが、遠く遠く遠くどこまでも離れていくハンナの屍が、私の使命を

思い出させる。

ハンナが見送られ私が呆然と立っていると、誰かが近づいてくる。いつもならすぐに気配に気が付けるのに、今は首を動かす気力すら湧かなかった。

「ハンナ・オンバーン諜報長官のことをお悔やみ申し上げる。プライベートでも親密だったと聞いた」

声で分かった。クロス党首だった。私はもういないハンナの棺の方向を黙って見ていた。

「いえ。人はいずれ死にます。こうやって今日より明日をより良くし、次の世代へバトンを託すんです」

私はハンナの棺の見送りの後のせいにか、投げやりで八つ当たりの言動であると自覚していた。クロス党首は何も言わなかった。虚無に近い沈黙の後、クロス党首は口を開けた。

「こんな時に、本当に申し訳ないところだが。ハンナ・オンバーンの死によって、諜報長官のポストにするか保守党内で権力闘争が始まっている」

私はハンナの死を悲しんでいたが、それでもこうして明確な仕事の話をされると振り

向かざる負えなかった。私は酷い男だ。こんなくそつたれな権力なんて放棄し、ハンナの方を見続けるべきだったのだ。だが、それができなかったからハンナ・オンバーンを諜報長官に置き続けてしまったのだ。

「ハンナ・オンバーンは歴代の諜報長官の中でもトップクラスに優秀に見えました。彼女の後継に適した人材はいるのですか？」

私の問いにクロス党首は首を横に振る。

「思いつかないな。あんな気難しい諜報部を制御できる政治家がいるとは思えない。保守党議員は期待しているだろうが、ここは彼らの意向を無視し、諜報部出身の人間を置くべきだ」

「序列的に、諜報部対外課課長のリユー・デルタが適任でしょう。二十七歳で年齢的にも問題ありません。……が、私は面識がないです。こんなことになるなら、面識を作っておくべきだった……」

ハンナに甘えてしまって、諜報部の内部のことは何も知らないのが実像だ。諜報部は秘密主義だ。信頼できない人間を諜報長官に置きたくない。だが、慣例的に諜報長官を空席にするわけにはいかないだろう。

……慣例？私の主目的は大陸の統一だ。そのために色々なことを犠牲にし、最後はハンナまでも殺してしまっただ。それなのに慣例だって？これで大陸統一に失敗したら、ハンナになんてあの世で詫びればいい？

ずっと諜報部にメスを入れられて来なかった。いいや、違う多くの官僚機構に私はメスを入れてこなかった。大陸統一をしたいと言いながら、脆弱な権力体制に頼ってきた。「信頼できるか分からない人間を諜報長官に置きたくありません。諜報長官は当分の間空席にします」

予想通り、クロス党首は嫌な顔をした。

「気持ちにはわかるが、諜報長官をずっと空席にするのもまずい。どうしても不安なら無難な政治家を置いて、傀儡にしたらどうだ？どうせ実際に仕事するのは諜報部の官僚なわけであるので」

「決定了。いい機会でしょう。これから大陸統一に向けて国家は団結・統合しなければなりません」

クロス党首は私の断言に驚いたような視線を送る。

「保守党にも諜報長官の席は当分の間空席にすると伝えておく。いいんだな？」

「はい。お願いします」

「分かった。……議員になって文句を言われても知らんからな」

クロス党首は捨て台詞のように険しい顔をして吐き捨てると、会釈をして私から去っていった。

フィール外交部長が私の前を通ろうとして、目が合う。目のあたりが真っ赤で泣いた跡があり、それが驚きで目を離せないとフィール外交部長も同じだったのか見つめあってしまった。ハンナが死んだ日も会議室で見つめあったなあ……。

「フィール外交部長」

私はたまらず呼びかけてしまった。挨拶だ。だが、フィール外交部長はハンナ・オンバーンではない。見た目も仕事も性格も思想も全く違う。

「ウォール議長……。このたびはお悔やみ申し上げます……なんて声をかけていいかわかりません……」

フィール外交部長はそうつぶやいた。

「……ああ。ハンナの葬儀に参加してくれてありがとう」

私はそう呟くに留めた。クロス党首と仕事の話をして気持ちに紛らわしたせいかな、比

較的マシな返答ができたと思う。

「ええ。良かったです、ハンナさんとお別れできて。何も言わずにさようならをするのはあんまりなので」

「そうだな……。でも、生前ハンナと喧嘩ばかりしていただろう？」

思えば、フィール外交部長とハンナ諜報長官はよく衝突していた。

「そうですね。腹立っていましたが、亡くなった今になってみれば……ちょっと寂しいかもしれません」

フィール外交部長が寂しそうにつぶやく。

「また……ハンナに会いたいな……」

すべての思考を放棄し、感情に身を委ねた結果だった。そんな私をフィール外交部長は苦笑して、

「そんなに想われて、ハンナさんは幸せだったでしょう……」

フィール・アンブレラは去っていた。

葬儀から一夜明けた後、起きると朝日も小鳥のさえずりも、何も世界は変わっていない

い。だが、ハンナがいないという事実だけ突きつけられて、そこから離れることはできなかった。ハンナがいないくても世界が減じるわけではない。

私は着替え、議員宿舎の廊下へ出る。もう、後ろ方肩をトントンと叩いてくれない。部屋のドアの前でなぜかハンナが待っていてばったりなんて二度とありえないんだ。

私はハッとして後ろを振り向いた。

「ハンナ……?!」

確かに後ろにいた気がした。ハンナが私に微笑みかけていた気がした。だが、誰もいない。あるのは空間だけ。いるわけがない。

「私は疲れているんだ……」

私は私自身に言い聞かせるように呟いた。ちゃんと睡眠時間を確保しているはずなのに、異様な疲労感だった。

私は一人とぼとぼと歩く。話そうにも話し相手がない。いつも並走してくれた彼女がいないのだから。流石に誰もいない空間に話しかけるわけにもいかない。

会議室に入ると、私とハンナ以外全員いた。

「おはようございます。ウォール議長」

エマリー軍代理が落ち着いた声を出した。

「おはよう。エマリー軍代理」

すると、エマリー軍代理が立ち上がって

「ハンナ諜報長官のことお悔やみ申し上げます。葬儀の時、挨拶できず申し訳ありません」

「いや、いいんだ。気にしないでくれ」

葬式の後、フィール外交部長に連れられて建物裏に行ってしまったわけで、エマリー軍代理が探しても私のことを見つけれなかったのだろう。

肝心のフィール外交部長は私のほうを見ると、居心地悪そうに赤面しそっぽを向いた。当然だ、あんなことがあったのだから。私も居心地が悪い。

ウージ財務部長には会釈をしておき、私は席に座った。

「これより行政調整会議を始めます。今回はハンナ・オンバーン諜報長官暗殺事件についてです。エマリー軍代理から」

エマリー軍代理が立ち上がり

「この度は我が軍所属の兵士が卑劣なテロ行為を行ったことを陳謝いたします」

頭を深々と下げた。三、四秒下げ頭を戻す。

「軍代理として責任を痛感しており、参謀本部調査局による内部調査が現在進行形しています。その最終調査結果が発表され次第、エブレイ・ユートク准尉が所属していた第十七師団に処分を下す予定です」

「軍人が政権幹部を殺害する異常事態が起きたのに、軍代理のあなたはおやめにならないのか」

ウージ財務部長が呟く。

「軍代理の人事権は議長の専権事項です。罷免されないのであれば職務を全うします」
エマリー軍代理を罷免にたくはない。他に変わる人材もぱっと思いつかないし。だが、あんまりにも上層部がぬるま湯だと現場から不満がたまるだろうし、何より軍を過信していいものかとも思う。これはあくまで内部調査だ。

「フィール庶務部長」

「は、はい……!!」

いきなり話を降られたフィール外交部長兼庶務部長は驚いてこちらを見た。

「今回の事件を庶務部警察課は捜査していないんだよな？」

「え、ええ……。軍勤務中の出来事でしたので、軍に任せるということでした」

「ちゃんと庶務部警察課としても事件化して捜査をかけろ」

「軍への捜査は機密性の高い情報もあるため、難しいかと思います」

エマリー軍代理が横槍を入れた。

「内部調査が自分の組織へ甘くなるのは当然だ。軍人が起こした事件を軍人が調べるのは信頼できない。庶務部警察課は軍が再び信頼を取り戻すためにも徹底的に調べるように」

「はい……!!」

「軍も警察課の捜査へ協力するようにしてください」

「はい」

一息つくくと、エマリー軍代理が質問を投げかけてくる。

「ハンナ諜報長官の後任はお決めにされましたか？」

「いいや。今のところ任命しないとクロス党首に伝えた」

話を聞いていたフィール外交部長は驚いた顔をして

「いや、良くないと思います。諜報部をトップ不在で放置するのはまずいんじゃないで

しょうか」

「私が決めたことだ」

「そうですか……。ネルシイが大規模な軍事演習をやりとユマイル外交部に通達が来ています。諜報部がこの状態、参謀本部調査局が内部調査に拘束されることを考えると、情報収集体制が少し不安です……」

「二週間後？」

「そうです」

「それまでに何とかする」

「何とかって……二週間で諜報部全体を把握するなんて不可能ですって……」

「全部を管理する必要はないが、この機会にちゃんと諜報部の膿は出し切っておかないといけない」

「そうですか。ウォール議長にお任せします」

フィール外交部長が投げやりに言った。

「あと、ネルシイの軍事演習を非難しなくていいんですか？」

「そっちは『注視している』くらいの表現でいい」

「分かりました」

フィール外交部長が頷く。

「ウージ財務部長は軍事予備費のことで軍との調整が残っているだろうしそちらを頼む。参謀本部とうまい具合に調整してくれ」

「はい」

「では各員解散」

「お疲れ様でした」

行政調整会議を終え、私は議長室に戻ろうかと思いき出す。みんなの後ろについていくと、背中をたたかれ呼び止められた。ふと、叩かれたとき思い出がフラッシュバックして、くらくとした。ハンナが……ハンナ課報長官が後ろにいて私の手を叩いているようだった。

「ハ……!!」

私は錯覚に支配され、何かに押され勢いよく振り返った。

「……エマリー軍代理か」

当たり前だ。ハンナが後ろにいるわけがない。ハンナの葬儀はもう終わり、会議室に

もハンナの姿は当然ない。ありえないんだ。なのに強力すぎる思い出に引っ張られ、狂ったことを考えてしまった。

「どうした？」

「内密にお話したいことがあります。午後、軍代理の職務室に来ていただけませんか？」

内密に話したいか……。エマリー軍代理とはそういうことはあまりなかった。一体何があったのだろうか。

「……行政調整会議では伝えられなかったことなんだな」

「だからこうして申し上げているんです」

「分かった。午後五時に私の予定が開くから、その時でいいな」

「了解いたしました」

部屋を出るときに、エマリー軍代理が振り返る。

「完全に余計なお世話ですが、無理なさらないでくださいね」

「……無理しないとこの仕事はやれない。曲がりなりにも私はこの国の最高責任者だ」

「そうでしたね。申し訳ありません」

エマリー軍代理はそのまま会議室を出て行った。

私はランチにある男を誘った。また、会食である。行政区のレストランの個室の席を確保しておいた。ランチなのにディナー級だ。

私が一足早く来ていたせいだろうか。待っていると、男は時間ぴったりにやってきた。彼は私に一礼すると、席につく。

「諜報部対外課課長、リユー・エンデッドであっていますか？」

「ええ。お食事に誘っていただけるとは光栄です。ウォール議長」

「それにしても時間ぴったりにくるとは素晴らしいな」

「ユマイルの腕時計は正確ですから」

初対面の議長にジョークを言えるとは大物だ。ハンナの部下だけあるな。

彼は二十三歳。すらっとした好青年に見えるが、目を見る限りしっかりとした意志を感じる。ネルシー商業諸国連合のビュー外務大臣に近い印象を受ける。何か底知れぬものを感じざる負えない。

「ハンナ諜報長官のこと、お悔やみ申し上げます」

「ああ。ありがとう。だが、諜報部の方も大変だろう」

「はい。その通りです。諜報長官が軍人に殺されたわけですから、到底納得できません」

「そうだろうな……」

「内部調査は甘くなります」

「ああ。そのことだが、警察課も軍を調べることになっている。別に隠すことでもない
ので言うが」

「諜報部は使っていただけなのですか？」

「諜報部は当事者だ、バイアスがかかる。……それに、事情があるとは言え区分は事件
だ。警察課が専門になり、そちらに任せるのが筋だろう」

「……なるほど」

すると、ノックが響いた。

「入っている」

私が許可を出すと、ソムリエが入ってくる。

「私は今日のランチで頼む」

「僕もそれでいいです」

「かしこまりました」

ソムリエはそのまま部屋を出た。

大体会食の食事なんて味がわからないし、考えるのも億劫だ。田舎者でもない限り、メニューを隅々まで見て考えるなんて野望なことではない。

「……こういった時期に大変恐縮ですが、後任者を任命なさらないというのは本当ですか？」

諜報長官の空席のことだろう。クロス党首経由で保守党に伝えたんだ、諜報部の官僚が知らないわけがない。

「本当だ」

「諜報長官が不在だと我々としてもやりづらくなってしまうです」

「分かっている」

「ならなぜ……？」

私はなんと答えようか迷い間を置く。

「諜報部の官僚と仲良くなりたくてな」

私の言葉に、リユー・エンデッド諜報部対外課課長は顔をしかめた。露骨に警戒されている。

「そんな顔をしないでくれ。半分冗談だ」

「……つまり、私たちが信用に値しないと？」

「諜報部だけあって察しがいいな。その通りだ。ハンナ諜報長官亡き後の諜報部に、私は全く関与できない。諜報部はいつも最高の情報を持ってきてくれ、他国の深い意思決定にまで干渉する。一体君たちはどんな協力者を持っていて、どんな情報伝達手段を持っているのか理解に苦しむ」

「それはまさしくハンナ諜報長官の賜物ですよ」

「私は諜報部でのハンナを知らない。部下とプライベートの友人としてのハンナ・オンバーンしか」

「恐ろしくストイックな人です。果たすべき目的のためなら、他人を切り捨てることも厭わないような。ただ……その、根はやさしい方だと思いますし、単純にウォール議長の狂信者なだけだったんだと思います。他人の人生や自分自身の安全よりも、ウォール議長に掲げる夢のほうに大切に感じていたように見えました」

私は何も言えず、ただただ俯くことしかできなかった。

「申し訳ありません……失礼でした」

「いや、いい。ハンナの知らない一面が聞けて良かった」

「……ウォール議長がご心配なのは良く分かりますが、ハンナ諜報長官の代わりになろうとするのはやめたほうがいいと思います。いくら偉大で聡明なウォール議長とは言えども、議長職と諜報長官の両立は業務量的に不可能です」

「お世辞はいい。聡明でも偉大でもない」

「ハンナ諜報長官には及ばないにしろ、諜報部には優秀な人間がいます。官僚に諜報長官をやらせるのがご不安なら、扱いやすい与党議員を誰か引っ張ってくるのでは駄目でしょうか」

「クロス党首にもそう説得させられた」

「常識的に考えてそうだと思います」

私は唸った。ドアが静かにコンコンと叩かれる。

「どうぞ」

ドアを開けると、二人のソムリエがランチを持ってきてくれた。それにしても、ハン

バーグとは昼にしては随分とがつつりしたものだ。やはり高級レストランだけあり匂いが違う、上品な香りがする。

食事は今から食べるのだ。会食では上品に食べることと喋ることで、もう精神力を使い切ってしまうが、これがお昼ご飯なのだからちゃんと食べないといけない。

ソムリエが去ったあと、私は彼に問いかけた。

「何かハンナのことでも困ったことでもあったか？」

「ええ。例えば……」

食事は始まったばかりだった。

リユー・エンデッド諜報部対外課課長とランチをし、午後議長の書類を認可する仕事をやったのち、私はエマリー軍代理のいる軍代理の部屋まで向かった。

私は軍代理の部屋をノックする。

「どうぞ」

よく響く声が聞こえたため、私はドアを開けて中に入った。

「わざわざ来ていただいて申し訳ありません、ウォール議長」

「いやいい」

「ソファアがありますので、おかけください」

すると大きな部屋の右隣に、三人掛けソファアが二つ向かい合って存在していた。私が手前のほうに座ると、エマリー軍代理が向かい合い壁側のソファアに座った。

「わざわざ内密に話したいことという」と

「諜報部のことなんですが」

「ええ」

「ハンナ諜報長官を殺害した人間が第十七師団所属エブレイ・ユートクだ等々の先行調査結果に示されて、今は最終調査結果を作成している段階ですが」

「ああ」

「諜報部は思ったよりきな臭いです。注意したほうがよろしいかと思えます」

私がエマリー軍代理のことを真っ直ぐ見つめる。エマリー軍代理も決して視線をそらさなかった。

「きな臭い？」

「ええ。第十七師団が首都の行政区警備へ転用された際、彼らは人手不足でした。第十

七師団長が参謀本部作戦課の人間と掛け合い、いくつかの師団から人を呼んでもらうことになったんですが、その時に参謀本部側は『第三十三師団のエブレイ・ユートク准尉をよこしてほしい』と師団長に言われたそうです」

「まさか、軍がエブレイ准尉を使って意図的にハンナを殺させたというのか？」

「分かりません。証拠が参謀本部作戦課職員の証言しかなく、非公式の場での発言だったようなので書類等は何も」

「しっかり調べろ。有耶無耶にしてはならない。個人的な恨みではなく軍が組織的にかわっていたなら、もはや文民統制の問題だ」

「もちろんです」

私はため息をついた。

「事実なら問題の次元が全く違ってくる」

「このことなんですが、本来最終調査報告書の発表を待つべきです。しかし参謀本部としては、二週間後にあるネルシイの大規模軍事演習にぶつけて、ネルシイとの国境付近で軍事演習を行いたいと考えています。最終調査報告書を待ってから関係者を拘束してからでは間に合いません。参謀本部内部の人間も関わっているわけで」

「だから今のうちに左遷と調査局による拘束を行いたいと。軍がトカゲのしっぽ切りをやっているようにしか見えないだろう」

「早く行動したいというのは、おっしゃる通りです。我が国だけの問題ならばそれで問題ありませんが、ネルシイとの関係があります。我が軍が全く準備ができていない状況で、ネルシイが軍事演習ののち攻め込んで来た場合どうなさるおつもりですか？」

「つまり、ハンナ諜報長官の死は軍を円滑に進めるうえで障害になっていて早く火消がしたい、そういうことだな？」

私は苛立ちを抑えられなかった。

「そういうことはありませんが、ネルシイは私たちユマイルの国内事情を全く考慮してくれませんよ」

私は天井を見上げた。難しく難解な問題だった。色々な人々の利権が関わって、考えれば考えるほどこんがらがり、疲れる。放棄してしまいたかった。だが、そのたびにハンナの死がよぎる。ここで私が大陸統一を諦めれば、彼女の死は無駄になる。

「……分かった、調査局の拘束を許可しよう。ただし、一つだけ条件がある」

「なんでしょう」

「拘束後、彼らの身柄は庶務部警察課に引き渡せ。軍は疑わしい人間を排除したいのだから、それで問題ないはずだ。参謀本部調査局に預けると、口封じに始末される恐れがある」

「分かりました。フィール庶務部長に私から伝えておきます」

「いや、いい。私が夜、フィール庶務部長に伝える」

エマリー軍代理が苦笑した。

「私はちゃんと引き渡しますよ」

「参謀本部の人間がハンナ諜報長官の死に関わっている恐れがあるわけだ。今の軍を信用できない」

三日後の会議室。エマリー軍代理と話した夜にフィール庶務部長に身柄の明け渡しを伝え、翌日に命令をうずうずと待っていた調査局が対象を拘束。その日の翌日から調査局による取り調べと庶務部警察課への引き渡しを開始された。

今回の行政調整会議でその報告がなされた。

「拘束した人間は、参謀本部作戦課職員が三人。第十七師団長、参謀長が二人。さらに

その第十七師団長の友人だった第二十九師団参謀長を拘束しました。参謀本部作戦課職員
員の三人は昨日のうちに庶務部警察課に身柄を引き渡し、第十七師団関係者、第二十九
師団参謀長は今日中に引き渡します」

発言者はエマリー軍代理。

「庶務部警察課は参謀本部作戦課職員の三人の身柄の受け渡しが完了したことを確認し
ています」

フィール庶務部長が事実確認をした。

「残る四人も早く引き渡すように。暗殺されては困る」

「分かっています。軍をご信頼ください」

エマリー軍代理が不服そうに言った。

「警察課は三人の取り調べをしているわけか」

「はい。しかし三人とも黙秘です」

「先に行われた、調査局によるヒアリングでは何か言っていなかったのか？」

エマリー軍代理に問いかける。

「いいえ。自分に容疑がかけられていると分かったとたん黙秘するようになりました」

「事情聴取から真相解明をすることは難しそうだな」

相当難航しそうだ。

「まあいい。これで現段階での疑わしい人間は軍から排除できたんだな？」

「はい」

エマリー軍代理の言葉を聞いて私は安心する。

「十日後に行われるネルシイの大規模軍事演習に対抗するため、我がネルシイも国境付近で軍事演習を行う。軍はその準備をするように」

「はい」

「フィール外交部長はフェーム諸侯連合、ネルシイ商業諸国連合と緊張緩和を名目に国際的な枠組みを作るよう提案してほしい」

「国際的な枠組み……？」

「ああ。その国際会議の名前をフェーニング連邦にしておいて」

「え……？フェーム諸侯連合はともかくとして、ネルシイ商業諸国連合が応じるとは思えません。ネルシイ側はユマイルと合併なんて死んでもごめんですよ」

「だから、実体はなくていい。フェーニング連邦という枠組みだけ作ってくれればいい

んだ。関税撤廃や国家主権の制約とかは絶対に持ち出すな」

「なるほど……箱だけ作って有耶無耶にして、段階的に大陸統合したいということですか？」

「そうだ」

「そんな上手く乗りますかね……」

「乗るさ。今はフェーム諸侯連合が独立国だと言う体でやっているわけだから、フェーム諸侯連合の利権をネルシイ側に渡さないことにしているが、実体の無いとは言えフェーニング連邦という大陸統一国家を作ってしまったえば、堂々とネルシイはフェーム諸侯連合に参入できる。」

ネルシイの大企業たちはフェーム諸侯連合の利権に組み入ってぼろ儲けしたいと企んでいる奴らばかりで、逆にネルシイ政府は金のかかる戦争なんてやりたくない。フェーニング連邦という空っぽな枠組みを作る代わりに、ユマイルがネルシイにフェームの利権を明け渡すわけで、彼らから見れば実質的な譲歩に見えるわけだ」

「うーん……」

フィール外交部長は納得できぬよう、唸った。

「これが実現すれば平和的な大陸統一になるわけで、ネルシイとの大戦争を起こさずに済む。平和はフィール外交部長の望みじゃないのか？」

「……分かりました。交渉してみます。私もネルシイとの絶対に戦争は避けたいですし、やれることをやります」

「頼む」

「軍事演習の際、絶対に軍を越境させないようにしてほしい。万が一軍事衝突が起きれば、交渉は決裂するだろう。あくまでも、ネルシイが侵略してきたら返り討ちにするというメッセージを送ればいい」

「分かりました」

「エマリー軍代理には難しい役目を押し付けてすまない。軍を信用できないと言っているが、結局外交には相手国と対等な軍隊が必要になる」

「いいえ。それが仕事ですから」

「行政区内の警備はどこがやっている？」

「続けてエマリー軍代理に聞く。」

「フェーム帝国の戦争の休暇明けの第三師団です。第十七師団よりは明らかに信頼でき

ると確信しています」

「そうか。またユマイルの政治家が軍に殺されては、もはやこの国の軍隊なのか分からない」

「二度と同じ過ちは繰り返しません。軍として規律を徹底します」

「軍人に二言はないぞ。しっかり頼む」

双方の大規模軍事演習のさなか、ユマイル外交部による新しい枠組み『フェーニング連邦』の提唱は驚かれるものだった。ユマイル傀儡のフェーム諸侯連合は快諾したが、逆にネルシイ商業諸国連合は強い警戒感を示し、ネルシイ外務省とユマイル外交部の事務方による調整は難航した。

ネルシイ軍事演習最終日、緊張緩和を名目にネルシイシティでフィール外交部長とネルシイのビュー外務大臣が会談。フィール外交部長はかつて「戦争には出口が必要だ」と言っていたが、おそらくこのまま軍事衝突をしていれば大陸統一など妄想になっていただろう。我がユマイル軍はネルシイ全土を占領する能力を持っていないし、フェーム帝国のように首都を占領して諸侯たちに呼びかければ終わりとはならない。ナシヨナリ

ズムがしつかりしたネルシイ商業諸国連合を侵略すれば、永遠の抵抗が待っているだろう。

そういう意味では、フィール外交部長の予言は当たっていたことになる。フィール外交部長に感謝せざる負えない反面、自分の未来を見通せていなかったことに不甲斐な差を感じる。

幸いにも衝突なくネルシイの軍事演習を終了。本来あと二日続ける予定だったユマイル軍の軍事演習は私が中止させた。平和的な枠組みを提唱しておきながら、一方的に軍事演習を進めるのは筋が通っていなかったからだ。

軍事演習終結から二週間後ユマイルの首都ユマイザルでフェーム諸侯連合、ネルシイ商業諸国連合が招かれ初の『フェーニング連邦』についての会議が開かれることになった。

私は国際会議場にフィール外交部長と向かう時に、彼女に声をかけた。

「ネルシイとの調整はさぞかし難航しただろう。難しい仕事をありがとう」

フィール外交部長は満足げにほほ笑む。

「ええ。ありがとうございます……」

「フィール外交部長自身の功績だ」

「誇っていいでしょうか……？」

フィール外交部長が自信なさげにつぶやいたので私が笑う番だった。

「もちろん。……もし、ハンナについてコンプレックスを感じているなら意味のないことだ。フィール外交部長はハンナに負けないくらい実績を上げている。私はフィール外交部長を前から評価してきたつもりだ」

フィール外交部長が静かにつぶやく。

「本当は今、隣に歩いてほしかったのは私ではなく、ハンナさんだったんじゃないですか……？」

私はその言葉に頭を殴られて、思わず立ち止まりフィール外交部長を見てしまった。私は今どんな顔をしているだろうか、怯えた顔だろうか。

フィール外交部長は私を見て目を伏せた。

「ごめんなさい。不適切でした」

「ハンナが生きて、この隣に歩いてほしかった。ハンナに一番見せたかった景色だ」

「本当にお好きなんですね。私と歩いても嬉しくないんですか？」

「うれしいさ。でも、私にとってハンナは特別だった」

こんなことを言ってもハンナは戻ってこない、生前に言うべきだったことだ。だから自然と投げやりになってしまった。

フィール外交部長は何も言わず黙っていた。

私たちは会議室のドアに一緒に手をかけた。

「行きましょう。ウォール議長」

「ああ」

私は緊張していた。会議室を開けるのは怖かったし、おそらく大陸統一国家を樹立できる最大で最後のチャンスだ。私の政権もいつ崩壊するか分からない。あれだけ大陸統一大陸統一と言い続けて、いつの間にかここまで来てしまった。

だが、この期に及んでこのドアをハンナとともに開けたかったと考える自分が憎かった。ふと見慣れた雰囲気が出たと思うと横を向いた。ハンナがそこにいる。いいや、そこにいると思ったただけだった。何度見てもいるのはフィール・アンブレラでハンナ・オンバーンは死んだ。匂いでわかる。フィール外交部長もいい匂いがするが、初恋とともに焼き付いたハンナのものではない。

私は邪念を振り払うよう強く強くドアを開けた。

すでに要人たちは集まっていた。

会議室のテーブルには、ネルシイ商業諸国連合大統領ヴァントル・デテール、その横ネルシイ商業諸国連合外務大臣ビュー・オージ。相変わらず爽やかだ。そして後ろの椅子にはネルシイ外務省らしき職員が四人と、子銃を持った兵隊が二人。警備か、やはり完全な非武装ではないというアピールか。

そしてフェーム諸侯連合諸侯長エイツ・クレーム、外交司のジュイ・フットネス。後ろには役人が三人ほど。

私たちは職員から案内を受け、指定された席に向った。フィール外交部長が座り、私が立ったまま話を始めた。

「皆様、はるばるご遠路誠にありがとうございます。この度『フェーニング連邦』という新しい枠組みの話し合いに参加していただいたことに心から感謝申し上げます。

現在フェーニング大陸は第二次フェーニング大陸大戦の危機にさらされています。かつての第一次フェーニング大陸大戦はこの世のものとは思えない凄惨なものであると言われ、語り継がれてきました。フェーニング大陸は戦火に焼かれ、復興に莫大な労力と

時間がかかったと記録されています。

私たちは二度と同じ過ちを繰り返してはなりません。私たちを発展させてきたナショナリズムは戦争の恐怖に対してあまりにも無力です。仮にネルシイとユマイルの戦争が起きれば、祖国を愛するあなたと私は永遠に殺し合いを続けてしまうでしょう。

それは断じて避けなければなりません。『フェーニング連邦』はナシヨナリズムに代わり、異なる隣人を愛し漸進的に相互理解を進める新しい政治体制へと、緩やかに進歩するものを期待します。

大まかな詳細は各国の外交担当の事務方がすでに調整済みかと思われますので、今回は調印式になります。貴国外交担当に渡した調印文書をご覧ください。また首脳同士の会議ですので何かご不明な点がございましたら、この場でどうぞ」

ネルシイ商業諸国連合大統領ヴァントル・デテールが外務省の人間と話した後に、聞いてくる。

「いまいちこの『フェーニング連邦』という新しい枠組みが良く分からない。国際会議の場でもないようだし、かと言って関税撤廃があるわけでも軍縮条約でもない。本筋がよく見えないものというのが正直な感想です。こんな"これから大陸の未来について話

し合いました。”と書かれた空文の条約にサインをすれば、フェーム諸侯連合の利権を譲渡するとは、ユマイルの実質的譲歩と捉えていいものですかね？」

ネルシイ大統領の発言にフェーム諸侯連合のエイツ・クレームが顔をしかめていたので、フィール外交部長が慌てて補足を入れる。

「フェーム諸侯連合はネルシイの植民地ではありませんし、またユマイルの植民地でもありません。現在独立国です。しかし私たち三国が独立しているがあまり、領土や資源をめぐり争いを繰り返し、時には植民地に近いような事実上の主従関係を構築してきました。これは国を思うナシヨナリズムが生んだ、他国への無理解と偏見という弊害なのです。私たちが形だけとは言え大陸統一国家を作り、少しずつお互い歩み寄れば、最終的に争いはなくなります」

フィール外交部長の言葉にネルシイのビュー外務大臣は唸る。

「この前のフィール外交部長との会談でもお話しさせていただきましたが、それは正直夢物語に近いと感じます。そんなことができるなら、もう人類史の宿命だった争いがないくなっているではありませんか」

「そうですね。現に一週間前まで双方軍事演習をしていたわけですから、ですが争いは

起きず今私たちは交渉のテーブルに立っています。それは意思疎通と対話の勝利といえると思います。もし戦争が起こればネルシイもユマイルも多大な損失を受けることになっていたでしょう」

「この白紙の条約に交戦権を縛れるとは思いませんが」

ビュー外務大臣は調印文書一枚目をひらひらと私たちに見せつけた。

「その通りです。縛れません。私たちは枠組みを作っただけで、どう経済統合を進め争いを無くすかは別途『フエーニング連邦準備委員会』で話し合うわけですから」

「意味あるのでしょうか、それは？」

「あります。今までは"枠組みさえ無かったのですから"。大きな前進ですよ」

フィール外交部長は断言した。

ビュー外務大臣とヴァントル大統領が耳打ちをする。おそらく彼らも大筋どうするか決めているのだろう。流石に近代国家なのだから当然だ。だが、それでもわざわざ今問いかけてきたのは、やはり最後まで私たちの真意を探りたいということだろう。

「分かりました。私たちは調印文書を吟味した結果、本調印文書に署名することにします」

ボトルネックのネルシイは解決したか。

「フェーム諸侯連合は大丈夫でしょうか」

私が聞くと、エイツ・クレーム諸侯長は頷く。

「はい。フェーム諸侯連合は近代化に遅れていますので、本調印文書によってユマイル民族戦線だけでなくネルシイ商業諸国連合からの投資が増えることを期待しています」

「分かりました」

「この調印文書で発足する『フェーニング準備委員会』の優先委員長はユマイル民族戦線が推薦し、委員長をフェーム諸侯連合とネルシイ商業諸国連合が推薦するとありますが、ウォール議長はすでに誰かお考えなのでしょうか？」

ビュー外務大臣が私に聞いてくる。フィール外交部長は黙って私を見た。

『フェーニング準備委員会』の優先委員長は『フェーニング準備委員会』の最高責任者であり、端的に言えばこれから建国される大陸統一国家『フェーニング連邦』のトップになるであろうわけだ。気になるのも当然だ。

「目星を付けています。まだ声をかけていませんが、おそらく引き受けてくれると思いますよ。優秀な人間ですし、……逆にその方以外適任者が思いつきません」

「そうですか。なら問題ありません、ユマイル政府の責任ある任命に期待します」

ビュー外務大臣に納得していただけたようだ。

「ところでなぜ『優先委員長』と『委員長』なんだ。素直に『委員長』と『副委員長』では駄目だったのか」

ヴァントル大統領領が聞いてきた。

「先ほども言ったように『フェーニング連邦』の理念そのものが相互理解のある対等な大陸統一であって、各国が指名した代表者に優劣をつけるのを避けるためです。『優先委員長』と『委員長』の違いは話し合いがまとまらず決裂するのを防ぐためのものであり、優先権が発動するのも調印文書に書かれた通り限定的な場合のみです」

「そうか」

「我々が目指しているのはゼロサムゲームではなく、協調なのです」

私の言葉にみんな沈黙した。当然も当然だ。今までユマイル民族戦線という大陸最大のナショナリズム国家だったのに、急に隣人愛に目覚めたのだから。

だが、私がしたのは大陸統一であり、別に征服する必要があるわけじゃない。

「他になければ調印を行います。各国政府は外交担当に渡された本調印文書にサインを

してください」

『フェーニング連邦』についての調印所に三国がサインした日の翌日。ネルシイとフェーム諸侯連合の首脳たちは在ユマイル大使館へと移り、帰国する予定になっている。そして本日はそのことで行政調整会議が開かれていた。

フィール外交部長、エマリー軍代理、ウージ財務部長。そして空席の諜報長官。

「本日の行政調整会議を始めます。昨日、『フェーニング連邦』についての調印文書にサインが行われました。……条約ではないため議会へ通さなくていいんだよね？」

フィール外交部長に問いかける。

「ええ。近代フェーニング大陸において条約の定義は国家と国家との間で交わされるものであり、国家を消滅することを目的にしたものは想定されていなんですよ」

「降伏時の条約とかあるだろう？そういう扱いでは駄目なのか？」

「降伏時の条約は敗戦国と賠償金の支払いや領土の割譲を約束するものですから、国家間との約束です。国家を滅ぼし新国家が樹立させる場合、また別の法解釈になるようです」

「だから調印文書だの粹組みだの曖昧だったのか」

「武力で滅ぼされた国は山ほどありますが、合意の上で滅んだ国は私たちが初めてなんじゃないですか」

「……こんな重大な案件を議会に通さないのは恐ろしいことだな」

私がそう言うと、フィール外交部長がため息をついた。

「ご心配なら議会で質疑応答と演説をなさればいいんじゃないですか……？」

「多分そうなるだろうな。クロス党首からもやれと言われるだろうし、議会放置するとまずい。そろそろ私たちの任期が切れるから、ピリピリしている」

「ああ。そうでした。私たち選挙で選ばれていたんですね……？」

「随分と余裕だな？」

「選挙は当選するものですよ……？」

「これだから貴族の娘は。どうせ地元に巨大な組織票持っていて、エスカレーターで当選するんだろう」

「貴族の娘ですから」

嫌味に嫌味を返された。

「私は軍人なので選挙に勝つ必要性はありません」

私とフィール外交部長とウージ財務部長は政治家であり議員なので、軍人・官僚であるエマリー軍代理の言葉は無視しておいた。これだから公務員は。

「大陸統一を実現したわけだが、全く実感がわかないな」

「当然ですよ。大陸統一をやりますって決めただけで、中身をどうするかはフェーニング連邦準備委員会で話し合うわけですから」

「ネルシイと戦争にならなくてよかった。大陸統一どころか終わりのなき戦争に突入しただろうし……」

「本当ですよ……。ユマイル・ネルシイ双方が軍事演習している途中からの交渉開始だったわけで、彼らも私たちがとち狂ったのかと考えたようです」

「極めて難しい交渉だっただろう。君には助けられた、ありがとう」

私は立ち上がってフィール外交部長に深々と頭を下げた。

「えっ……ちょっと!! 頭をお上げください」

フィール外交部長があたふたしているようだ。視線が泳いでエマリー軍代理と目が合っていた。

「困ったからと言って私を見るのはやめてください。別に仕事の成果と恋争いは全く関係ないんですから」

「別に恋争いは関係ないでしょう……!!」

「あらそうですか。これは失礼いたしました」

ああ、なんか前もこんな口論していたな。ウーヅ財務部長はどんな嫌そうな顔をしているか。そして、このあたりでハンナがまた嫌味の一つを言って……。ハンナ……？ああ、彼女は死んでいたな。いないんだ。どれだけ馬鹿馬鹿しいことを言っても、ハンナの批評を聞くことはできない。もうあのため口を聞けないんだ。

私は勝手に陰湿な気分になり、自分の気持ちを隠すように座った。

「そういえば、誰が『フェーニンング連邦準備委員会優先委員長』やるんでしょうか？ウオール議長がやられるんですか？」

私は首を振った。

「やらない。さらに言えば政界もやめる」

私の言葉は最初あまり効果をもたらさなかったが、徐々にこの場にいる三人に意味が伝わったようで、目を丸くしてこちらを見る。ウーヅ財務部長でさえ凝視していた。

「え？どういことですか？いきなりすぎでしょう？私、何も聞いていないんですが？
どうして私に相談してくれなかったんですか？あと、大陸統一どうするんです
か……？」

「フィール外交部長、一度に聞くのはやめてあげてください。あと、私情混ざっていますよ」

「混ざっていません……！！」

エマリー軍代理とフィール外交部長の交流は置いて、説明を始める。

「私はユマイル民族戦線のナシヨナリズムを推し進めた政治家だ。保守派の愛国者であり、ネルシイやフェーム帝国の脅威を声高々に叫び、国民から支持を集めてきた。だが時代は変わりつつある。そして、ナシヨナリズムからグローバリズムという隣人愛に目覚めた。産声を上げた『フェーニング連邦』はあまりにも脆弱だ。私がそこに立てば、大陸統合に亀裂が入り崩壊するだろう」

「なら優先委員長に別の人を置くのはいかがですか……？」

「駄目だ。そもそも論、完全な『フェーニング連邦』が誕生すればユマイル民族戦線という国は無くなるだろう。変にナシヨナリストがいたら国を解体できなくなるぞ」

「うーん……」

フィール外交部長は唸った後、考えてこう聞いてきた。

「ウォール議長はご自分でこれから大陸統一を進めたいと思わないんですか？あなたの夢でしたよね？」

フィール外交部長の問いかけに私は黙って考え込んだ。

「私は『フェーニング連邦』という大陸統一の枠組みを作った。そのため大陸統一という公約を果たし、また責任を果たした」

私の言葉はとても脆く不安定に感じられた。

「本当によろしいんですか……？」

フィール外交部長は念押しをしてきた。もう戻れないだろう。

「ああ。もうナシヨナリズムの時代は終わった。次の世代へバトンを渡そう」

「……」

フィール外交部長は黙った。

「で、後継者はどうなさるかお考えですか？」

私は黙って、フィール外交部長に視線を返す。

「はい……？」

「君を『フェーニング連邦準備委員会優先委員長』に推薦する。あとユマイル議長にはウージ財務部長を推薦しておくが、こればかりは私に議長の任命権がないので、議会が最終的に決めるだろう」

フィール外交部長が驚いたようにこちらを見る。

「え？ 私ですか？ 私が大陸統一国家の建国をやると？」

「最も優れた適任者だと私は思っている」

「いえ。そういうわけではないんですか……。いきなりだったもので」

「時間がなかったからな。いきなりになってしまった」

フィール外交部長は黙った。うつむいて考えた後、意を決したようにこちらを向く。

「すぐに決められないのも当然だ。時間を空けてまた……」

「空けなくていいです。私がやります」

フィール外交部長は私を見据えて真っ直ぐ見た。

「私も政治家です。これほど名誉ある仕事をやれるチャンスを手放すはずないです」

フィール外交部長が力強く言ってくれたので、私は肩の力を落とした。

「ああ。いいや、そう言ってくれると思っていた。フィール外交部長、弱気に見えてなんだかんだ我が強いから」

「はい？」

「いいや、何でもない。何も言っていない。気にしないでくれ。……ありがとう、フィール外交部長。君しか頼めなかった」

「具体的にどう発足させるんですか？」

「外交部からフェーニング連邦準備委員会に出向してもらう。……外交部の人間がこの組織に一番適切だろう、殆ど構成国との調整になるからな」

エマリー軍代理が手を挙げた。

「軍からも出向者を出したいです。よろしいですね？」

「ああ。頼む。変に外交部だけだと面倒なことになる」

「それなら諜報部からも出したほうがいいかと。彼らの恨みを買うのが一番危険な気がします」

エマリー軍代理が助言してくれた。

私はハンナ諜報長官の顔を思い浮かべたが振り払った。もうハンナは関係ない。

「同感だ。諜報部からも出向者をあたってみる」

「……結局最後まで後任の諜報長官を選びませんでしたね」

フィール外交部長の耳の痛い話は黙殺する。これはあまりにも答えづらい。

「ちょっと待ってくれ。なんでわしが後任の議長になっているんだ」

ウージ財務部長が埒が明かないと気が付いたのか、会話を割り込んできた。

「財務部長を務めたわけで適任者だと思うという話です」

「いや……わしの意思とか……」

「優先委員長については私が人事権を持っていますが、議長については議会が持っているので、私があくまで推薦するだけです。そう難しく考えないでください」

「はあ……」

ウージ財務部長が納得できぬよう呟いた。

「そういうわけなので、私の引継ぎとフェーニング連邦準備委員会の発足が最後の仕事だ。これで行政調整会議を終わる」

「終わったか。いいや、終わらしたというべきか」

クロス党首が呟いた。会食で私が辞任すると伝えた時だ。この会食は何度目だろうか。もう後、数えるくらいしかないであろう。

そう考えるとこのストレスフルな会食でさえ、懐かしく感じる。

「はい。議長をやめます。引継ぎとフェーニング連邦準備委員会の発足が完了し次第、辞任するので、大体一か月後くらいかと」

「選挙までにはやめる算段か」

「……国民の付託を得る選挙なので、新しい政権候補の下行われるべきでしょう。選挙が終わってから辞任というのは流石に品位がなさすぎます」

「それもそうか……。君が辞任してから、保守党の予備選か……。これは大分カツカツなスケジュールになりそうだ」

「それは申し訳ないといか言いようがありません」

「全くだ。若い人間だからか、それとも君だからか。君には随分と振り回された。やりたいことをやる人間だったようだからね」

「……今まで大変お世話になりました。クロス党首の後ろ盾がなければ、今日までのウォール政権はありえませんでした」

私は立ち上がり、クロス党首に深々と頭を下げた。

「うむ……。やりたいことはやれたかね？」

私は顔をうつむき考え答えた。

「はい。フェーム帝国からユマイル民族戦線を守り、ネルシイ商業諸国連合を引き込み、悲願だった大陸統一に道筋を付けました。私は議長として、人間が人間らしく生きられる豊かな社会という理想に、この国と大陸を近づけました」

「それは素晴らしいことじゃ。君を議長に推薦した甲斐があった。君のような若い力が、この硬直していたユマイルに必要なだったのだ」

「……ありがとうございます。そう言っていただけるのはとても幸せです」

「君の行いが正しかったかどうかの客観的証明は歴史がしてくれる。それに、大陸統一の経済的恩恵が得られるのはあと何年か待たないといけないだろう。今はむしろ戦火と軍拡による負担の方が大きい気がする。経済成長をしても富が偏りすぎぬよう再分配をしなければならぬ。実際に民が豊かさを実感できるのはまだ先だ」

「先は長そうです」

私はうんざりしてつぶやいた。これからのフィール優先委員長のストレスを考えると、

私までお腹が痛い。

「その『フェーニング連邦準備委員会』の構築は順調なんだろうか？」

「もちろん。フェーニング連邦準備委員会優先委員長のフィール・アンブレラが頑張ってくれていますよ。彼女はとても優秀です」

「『フェーニング連邦準備委員会』がその大陸統一国家の礎になる。彼女が君の後継者ということではないかね？」

「ええ。その通りです。これから大陸統一国家建国という難しく、相互理解の必要な作業をこなすのに適任な人物です」

クロス党首がため息をつく。

「しかし、実際にフェーニング連邦が誕生するまでフェーニング連邦準備委員会優先委員長とユマイル民族戦線議長が並立することになる。連携が取れなければ悲惨なことになるぞ」

「そのことなのですが、私はウージ財務部長を次期議長に推薦しておきます。彼は大人です。フィール優先委員長とも面識がありますし、空気を読んで協調してくれるでしょう」

「君が議長を続けるのではダメなのか？」

「私ではダメです。私はもはやユマイルのナシヨナリストになってしまいましたから」

私はバックに手を入れ新聞を取り出した。保守党系の新聞である。クロス党首に手渡す。

クロス党首はざっと目を通してやめた。おそらく彼もこの新聞をすでに読んでいたのだろう。

「保守党系の新聞は君を宿敵フェーム帝国を滅ぼし、ユマイル主導の大陸統一を実現した愛国者だと持ち上げているな」

「逆に労働党系の新聞は相変わらず狂信的ナシヨナリストだと。さらに困るのはネルシイ商業諸国連合でも労働党系の新聞に近いような私の評価がなされている点です。ネルシイで反ユマイル感情が高まり造反されれば、それこそ大陸統一は破滅です。強力なリーダーシップの時代は終わり、今は融和政策が必要ですから。もう私の時代は終わりました」

「それにしてもウーヅ財務部長か……」

「彼はこれと言って政治思想がない実務家です。流石にエマリー軍代理を議長にするわ

けにもいきません、軍人ですしネルシイの反ユマイル感情が悲惨なことになりますよ」

「それもそうだなあ」

クロス党首はうなって

「ともかくとして、ウォール議長が次期議長にウージ財務部長を推すのは保守党内に共有しておく。だが、保守党議長候補は予備選で決まるから何とも言えない」

「わかっています」

「……諜報長官の後任は最後まで選出しないのか」

「ええ。それは次の政権に任せます」

「ハンナ諜報長官の死がショックだったか」

私は何も言わず黙ってしまった。

「いや、いい。君は頑張った。ここまでやったのだから、もう考えなくていい。辞任したらゆっくり過ぎなさい」

クロス党首は私に微笑んだ。

出勤最後の日。明日から無職である。ごちゃごちゃとした資料を整理し引き継ぎ書類

を作成するのに二週間ほど、そしてフェーニング連邦準備委員会の発足に一月ほどかかった。

その貴重な一か月の間、私としてできることをやった。ネルシイ万博の時に私が引き抜いたウッデイ・ライ技術少尉とも話をした。結局電信を軍事利用することは間に合わなかったが、これは民間でも活用できる代物だ。いいや、むしろ民間での利用のほうが経済的に良い相乗効果を生むだろう。これからフェーニング連邦が発足したとしても、おそらく研究開発は止まらない。科学技術による技術革新は人類のあくなき欲望だからだ。彼には研究を続け、世の中に貢献してほしいと思う。

また、諜報部のリユー・エンデッドとも話をした。彼は不機嫌そうであった。私が最後まで諜報長官の後任を選出せず、フェーニング連邦発足は完全に外交部主導で行われてしまったからだ。私は謝罪したとともに、大陸統一のために諜報部の私利私欲を出さぬようくぎを刺しておいた。おそらく、次期議長は諜報長官を選出するだろう。その時に考えればいいと私は思う。

一か月間、数年過ごしたこの議員宿舎と行政区の別れは寂しいものだった。何よりも議員宿舎のハンナの部屋の前を通るのが一番つらかった。もういない、会えない。なの

にハンナはこの議員宿舎の部屋にまだ居て、私を待っているようなそんな気がし、それが私の心をひどくかき乱した。どこへ行っても隣を歩いてほしいのはハンナ・オンバーンで、夢の中の軍に入る前の幼少期の私も、隣にはボロボロの服を着たハンナが歩いていた。もう一度、ハンナに会いたい……。

「……ウォール議長……ウォール議長起きてください」

「う……ん……」

夢と現実の境界というのは実に気持ちが悪い。夢だと自覚してしまっているのだから、夢の続きは見れない、けれど現実に戻るのは意識があと少し足りていない。

もどかしい時間な気がする。

起きると近くに女性の顔があった。すらりとしたシャープな顔、目元もきりつとしている。無造作に切られた短いベリーショートヘア、髪はつやがありさっぱりとしていた。

「ハ……ナ……？」

あった。こういうことがあった。いつのことだろう。確実にあったはずなのに私はもう思い出せない。

「お疲れみたいです、ウォール議長」

「……ああ。ハンナ諜報長官」

ハンナ・オンバーン。私の政権下で諜報長官を務めている。そして幼馴染でもある、年齢も私と同じ二十六才だ。

……いや違う。ハンナじゃない。彼女はハンナじゃない。別の人だ。ハンナは死んだんだ。どうして現実を直視できていない。

「フィール外交部長……」

「本当にお疲れみたいです。あと私はもう優先委員長ですよ」

フィール外交部長……優先委員長が私の前に立っていた。私は突っ伏し寝てしまっていたようだ。

フィール優先委員長の言う通り、私は疲れてしまったのだろう。明日から議長じゃないと思うとどうも今まで貯めに貯めてきた何かが噴き出してきて、ただたたきつらくなる。

「そうだったな……。何か用事？」

「お見送りに官僚が集まっています。報道機関へも一般公開していますので、来ていただけると」

「ああ、そうだな」

私は頷き立ち上がって、伸びをする。終わった、明日は仕事をしなくていい。

私はフィール優先委員長とともに仕事をしていた議長室を出る。ドアから部屋の風景を振り返った。もう二度とここには来ない。この光景に会うことはないだろう。私は深呼吸をすると振り返り、ドアを閉めた。

『フェーニング連邦準備委員会』のほうはどうだ？優先委員長としての職務は」

「大変です。でも同時にやりがいを感じるものですよ。四割はユマイル民族戦線から出向者ですが、残りの四割はネルシイからで、二割にフェーム諸侯連合からですから。多様性に満ち溢れています。彼らとの対話と調整は良い刺激を受けてます」

「それは良かった。君を選んだかいがあった」

「軍縮条約でのネルシイとの交渉は難航していますが、経済統合の話はとても順調です。次のユマイル議長がどんな方かで難易度が変わりますが」

「一応、クロス党首にウージ財務部長を推薦しておいたが……。予備選の結果次第だ」
「出るんですよね？ウージ財務部長」

「ああ、予備選には出るそうだ。新聞にも公表してある。……若干渋々ではあっただろうが」

「でしょう。ウーヅ財務部長もいきなり任命されてさぞかし驚いたと思いますよ」

「……だな。君たちには迷惑をかけてばかりだった」

「ええ、大変でした。ウォール政権での日々は」

フィール優先委員長が苦笑をした。

「でも、楽しかった」

フィール優先委員長が急に明るい声を出したものだから、私が驚いて彼女のほうを見た。

「忙しく辛いこともありますが、社会をよりよくしようというのは面白いものです
ね」

フィール優先委員長が笑顔のほうに笑顔を向けた。それがとても輝いていて嬉しそう
で、それを直視できずにそっと視線を逸らす。

「やったかいがあった。だが、まだ途中だ。フィール優先委員長には社会に恩恵を還元
してもらえよう頑張ってほしい」

「もちろんです。それが仕事ですから」

……かつて私もそう言った。私のやったことはきつと無駄ではなく、脈々と受け継が

れているはずなんだ。

「……ハンナに誇れるだろうか。私のやったことをハンナはどう思うだろうか」

私はただ静かに独り言のように呟いた。フィール優先委員長と私。広い広い行政区なのにほかには誰もいない。世界には私たちしかないのではないかと錯覚するほどであった。

長い長い沈黙の後、フィール優先委員長がぼそりと言う。

「きつとハンナさんはウォール議長がやったことを評価してくれると思いますよ。彼女もウォール議長の夢にあこがれていましたから」

私は力が抜けるような感覚に襲われる。涙をぐつとこらえ力を入れて前を見る。

「あ……ああ。きつとそうだといいな……」

私は声にならぬような声を吐き出した。

私たちは行政区のロビーにつき、大きな扉を開ける。光が差し込み眩しかった。目を細めると、そこから大きく暖かい音が聞こえてきた。拍手だ。たくさんのそれでいて沢山だ。

そこには人で埋まっていた。人々……。官僚たちだ。それでいて参謀本部の軍人

たちもいる。そうだ。私の政策や命令は私一人では当然できない。命令や指示を受けて、それを計画し実行してきた人間がいる。それが彼らだ。このたくさんの人々が私の大陸統一という無謀で恐ろしい夢の実現を支えてきたのだ。そして彼らにも故郷があり人生があり、恋人や想い人家族がいるかもしれない。

彼らは機械ではなく人間だ。私の考えや命令を何も考えずに執行していたわけではない。きつと不平不満があっただろう。

私は強い拍手の中、二人に出迎えられた。ウーヅ財務部長とエマリー軍代理だ。

エマリー軍代理が一步前に出てきて花を渡してくれた。

「お疲れ様でした。ウォール議長」

「ああ、ありがとう。ミュー中将の世話頑張ってる」

私が冗談交じりに言うのと、エマリー軍代理が苦笑いをする。私たちは強く握手をした。彼女が引くと、ウーヅ財務部長が花を手渡してくれた。

「ありがとう。予備選頑張ってください」

「全く……こちらの身にもなってほしいものだ」

ウーヅ財務部長は最後までウーヅ財務部長らしく、嫌味をつぶやいた。

私はウーヅ財務部長に握手を求めると、嫌そうな顔をしながらも応じてくれた。

二人が去ったあと静かになる。ここまで私を支えてくれた彼らに礼を言うべきだろう。「官僚の皆さんそして政治家の皆さん、ユマール国民の皆さん。すべての人々の今までの協力で心よりお礼申し上げます」

私は深々と頭を下げると、また大きな拍手が起こった。

「あなた方がいなければ私は何もできません。政治とは一人ではできるものではないからです。誰かが政策を考えても、それをみんなで実行できなければ、単なる妄想です。

ですが、幸いにも私は優秀な部下たちに恵まれました。外交部、諜報部、軍、庶務部、財務部。ユマールの官僚たちはとても優秀で、私の無理難題を完璧にこなしてくれました。あなた方のその行動のおかげで大陸統一の道筋は生まれ、私の夢は叶いました。この行いはいずれ豊かで平和的な社会を作り、人間が人間らしく生きられる気高い理想に近づけると確信しています。

本当にありがとう！！君たちのこれからの幸運をお祈りします！！」

私は大きないつまでも鳴り止まないと錯覚してしまうような中、ロビーを出て行政区から出て行った。

ふと見ると、ハンナも私のことを見送ってくれているような気がしてしまった。

私は議長をやめ政界から姿を消した。世界が急激に変化する中、私はフェーム諸侯連合のとある領地に住むことになった。かつて帝都フェームへ行く途中に見た時から、この牧歌的な田舎に憧れていた。水車があり、馬車が走る。ビルや巨大建造物がなく草原と剥き出しの道路が広がっている。

私は私財を投じて、孤児院と家を建てた。洋館の大きい家だがそれでもフェーム諸侯連合の物価は安く、ユマイザルの一等地に一軒家を立てるのよりも安い。同じようなものを買うのに地域間で物価差がある。これは格差の象徴だった。

孤児院を建てたのは他にやることなかったのももちろんそうだが、罪滅ぼしでもあった。かつてのフェーム帝国との戦争で一般市民にはそれほど被害は出なかったが、それでも孤児が生まれた。かつてのハンナや私のような孤児だ。彼らがせめてまともな生活と食料にありつけるべきだと考えていた。自ら戦争を起こしておきながら自分勝手だと分かっているが。

孤児院の運営はこの領民たちを雇って行っている。こうすれば雇用も生まれ地域に貢

献できるだろう。私は時々顔を出すようにしている。フェーム帝国とユマイル民族戦線との戦争が孤児になった間接的・直接的原因な場合もあり、やはり感情的にどうかと思っていた。だが、子供たちは私に対して懐いてくれ友好的に接してくれた。まだ知らないだけなのかもしれない。しかし、子供たちの真っ直ぐな視線に私は感動をせざるを得ない。この孤児院の子供たちが立派な大人に成長することを私は切に願っている。

四年後。私はコーヒーを入れ外を見ながら、日課の新聞を読んでいた。新聞にはかつてフェーニング連邦準備委員会優先委員長を務め、今はフェーニング連邦初代大統領のフィール・アンブレラが出ていた。かつてのどこか自信なさげな風貌はどこかへ消えて、立派な堂々とした立ち振る舞いである。もう私の助けなどなくとも職務を全うできるだろうし、そもそも論彼女は私のことを覚えているだろうか。

私が新聞を読んでいると、誰かが近づいてきた。メイドだった。

「失礼します。来客だそうです」

「来客？どなた？」

「エマリー・ユナイテッド様です。"ウージ・ゲート"の証人喚問で、ウォール様をお迎えに上がったと」

私は思わず緊張した。かつて、エマリー軍代理としてウォール政権で共にしたかつての仲間だったからだ。

「懐かしい。早速出迎えよう」

私は立ち上がり、メイドとともに入り口へ向かう。

数台の馬車が止められていた。中からエマリー・ユナイテッドが出てきた。私は懐かしさから思わず近づいた。

ストレスのせいだろうか、やはり四年もたてば年を実感する

「エマリー軍代理……失礼、もう軍代理ではないよな」

「はい。今はフェーニング連邦軍参謀本部長なので」

「フェーニング連邦軍の制服組トップか……。偉くなったものだな」

私になつかしさのあまりしみじみというと、エマリー参謀本部長が「いえ……」と謙遜していた。

「お茶でもいいかが？もしお時間よろしければ」

エマリー元軍代理を誘うと、彼女は微笑んだ。

「ええ。是非」

エマリー元軍代理と私は家に入り、リビングへと向かう。後ろからは二人の男性兵士と一人の女性兵士が警護に付いていた。

「警備がつくのか」

「ええ。立場が立場ですし」

「それもそうだな」

フェーニング連邦参謀本部長だ。暗殺されれば大問題になる。

私はリビングに案内して、メイドにお茶を頼むことにした。

「エマリー元軍代理も紅茶でもいいですか？」

「はい。問題ありません」

「警備の方は？」

三人に聞くと黙って首を振った。

そのためメイドには二人分の紅茶を入れてもらうことにした。

「遠路大変だったでしょう」

「ええ。こんなに山奥だと思いませんでした」

「"フェーム州"はまだインフラが整備されていないのでね」

「フェーム州」は旧フェーム諸侯連合のことだ。フェーニング連邦発足後ユマイル民族戦線はユマイル州となり、ネルシイ商業諸国連合はネルシイ州、フェーム諸侯連合はフェーム州となった。連邦制であるため、州には高度な自治権が与えられている。

「同感です」

「この地域は物価も安い。フェーニング大陸は広く、豊かな人ばかりではない。彼らにも恩恵を得られるようにしなければ社会の不満がたまる」

私がつぶやいた。

「この場所にいてそうお考えなのですか？」

「ああ。フェーム州には高等教育どころか初等教育すら受けていない人がいる。高度な自治権は放置することを意味しない。しっかりと再分配することが大事だと思う」

私の言葉にエマリー元軍代理は頷いてくれた。

「だが、ここはいい場所だ。のどかで自然豊か。人々は皆支えあって細々と生きている。私はずっと所得と工業化こそが豊かさだと信じてきたが、必ずしもそうとは限らないのかもしれない」

「私も隠居したら、こういうところに住みたいですね」

「それはいいと思うぞ。議長をやめてからくたびれてしまった。何もやりたくないと考えていたが、この土地はその疲れさえも潤してくれる」

メイドが紅茶を二人分持ってきてくれた。エマリー元軍代理と私が会釈をした。

エマリー元軍代理が無言で一口飲む。

「美味しいです。ありがとうございます」

エマリー元軍代理の言葉に、メイドが静かに頭を下げた。

「ウォール議長の健康が私は心配でした」

「見ての通りあんまり良くないな。老後の生活をしている気分だ」

私は自分の目の下のクマを考えながら言った。

「寝不足なんでしょうか？」

「寝れない。ハンナが出てくる。悪夢を延々と見させられるのはいい気分がしない。ハンナにまた会いたいな……」

私が呟くと重々しい沈黙があたりを襲う。

「……こういうことを言うのは良くないのかもしれませんが、ハンナ諜報長官は今のウォール議長を見なくて良かったかもしれませんよ」

「……？」

「だって、こんな腑抜けたウォール議長を見たらハンナ諜報長官、恋から覚めてしまったかもしれませんし」

思わず私は乾いた笑顔が湧いてきて、それが止まらなくなって、悲しみよりもフラットで無機質な感情が止まらない。ただ、詰まったような声を出して、私は酷い表情をしていたと思う。

「それもそうかもしれないな。ハンナが死ぬよりも……ハンナが私に関して冷めてしまうほうがよっぽどの拷問だったかもしれない」

ハンナが私のことを軽蔑した目で見て、ほかの男へ行くのを考えたら寒気がしてきた。見るに堪えない。俺は自死を選んでいただろう。

ふと、新聞のことを思い出した。

「フィールは？元気にやっているか」

「ええ。フィール大統領はまさしくこの国の新しい指導者と言っていると思います。彼女は国民から負託を受けたフェーニング大陸の新しい指導者です」

エマリー元軍代理が力強く言い切った。私は安心した。強くなったなフィールと私は

思った。実際、新聞を見ても指導者として相応しい人間になった。

「ウォール議長の心配は杞憂だと思いますよ」

「かつて、エマリー元軍代理は『お相手がそれまで待ってくれるといいですが』と言っていたな。二人とも待ってくれなかった。ファイルの話はうれしいが、ハンナは……そこに行ってほしくなかった」

「ウォール議長……」

エマリー元軍代理は静かに憐れむ声を出した。

「政界へは戻られないんですか？」

「戻らないと決めた。私はユマイルの民族主義者から英雄視され、ネルシイや旧フェーム帝国の復興を掲げる過激派からは憎悪の対象だ。私の政界入りはフェーニング連邦の崩壊を招く。今は社会の分断を癒さなければならない。ユマイル民族戦線、ネルシイ商業諸国連合、フェーム諸侯連合。多様性を認め、新しい社会を築く必要がある。もう、私の時代は終わったんだよ」

エマリー元軍代理は何も言わなかった。ただただ沈黙が覆う。

「それならば……老後の趣味でも考えてはいかがですか？」

「ああ。私財を使って孤児院を始めたんだ。隣に大きな建物があっただろう」

「ありました。綺麗な建物でした」

「建てたばかりだからな。大陸統一に伴う戦争やテロで両親を失った子供たちを保護している。私も当然運営者として様々なことをしているが、立場が立場だけに子供たちとは直接接することは少ないな……」

「素晴らしいご趣味じゃないですか」

エマリー元軍代理の言葉に私は胸が痛くなった。

「犯罪者が医者を気取っている。大陸統一を始めたのは私で、彼らが親を失ったのはそれらが間接的・直接的な要因。これでは偽善者だ」

エマリー元軍代理は視線をそらして

「それでもウォール議長は今まで社会を思ってきました。それが例え自分の理想であったとしても、結果的に社会のためになるならば……それは誇っていいはずです」

「……ああ。そうならばいいな」

今更時は戻ってこない。失われた命も。ハンナも……。

「そろそろ行きましょうか。ウォール議長は証人ですし、連れて行かなければなりません」

ん」

エマリー元軍代理がつぶやく。

「新聞で"ウージ・ゲート"を初めて知ったが、正直私は全く知らないぞ。役に立つ証言ができるとは思えないが」

"ウージ・ゲート"とはかつてウォール政権下で財務部長、ユマイル民族戦線最後の議長であるウージ・ボーンに関する政治疑惑だ。フェーム帝国との戦争の際に大量に発行した戦時国債が、ユマイル民族戦線解体時に不正に横領されたのではないかと言われている。

「知らないのなら証言の時にそうおっしゃっていただければ大丈夫ですよ」

「……どちらにしろ拒否権はないわけだ。行こう」

私たちは紅茶を残し、リビングを離れる。

「クロス党首はなんて、おっしゃっていた？」

「ウォール・グリーン of 証人喚問に賛成していましたよ」

「賢い政治家だ。損切りも早い」

俺は自嘲気味に笑った。

「ウォール議長――！！」

私たちが庭に出たあたりの時、高く無遠慮な声が響いて、柵を乗り越えて孤児院から無邪気に手を振る少年がいた。鼻水が出ているし、遊んでいて転んだのか服に土がついている。

私は手を振り返した。すると少年は手を振る速度を尋常ではないほど加速させる。

「好かれていらっしゃるじゃありませんか」

エマリー元軍代理は私に声をかけてきた。

「ああ、ありがたいことにな。彼、すごいんだぞ。将来の夢はフェーニング連邦の大統領だそうだ」

「あらまあ」

エマリー元軍代理は嬉しそうに声を上げた。

「今のうちに挨拶しておいた方がいいんじゃないか？将来の上司だ」

「それは大変です。菓子折りを持っていくべきでしょうね」

「彼の好物は駄菓子だ。覚えておくといい」

私の言葉にエマリー元軍代理は笑った。

「彼が大統領になるまで長生きしないといけないですね、ウォール議長？」

「ああ、見れるといいな」

私が遠い目をして呟いた。

入り口につくと軍の人間と……制服から見るに治安当局だろうか、三人ほど出迎えてくれた。

紅茶をいれた人とは別のメイドが、私の荷物を軍の人間に渡し、馬車に乗せていた。

「ウォール議長を馬車までご案内して」

エマリー元軍代理がそういうと、二人が案内してくれた。まるで罪人になって連行される気分だ。

「こちらです」

私は一番後ろの馬車に案内されるとドアを開けて、入るよう促される。そして向かい側に治安当局らしき人間と軍服の人間が座る。本格的に罪人だ……。

私はうんざりとして、私の家と孤児院を窓から見つめた。

少しして馬車が進みだした。段々と、離れていく。いつ帰ってこれるだろうか。メイドには下手すれば一週間帰ってこれないという話をしているし、それを前提に進めてい

る。エマリー元軍代理と話していると昔を思い出した。議長としてユマイルの指導者になつたあの日のこと。そして、ハンナとの日々のことものだ。

私はユマイルの行政区に何か大切なものを忘れてしまったのだろうか。私はこの四年間どこか魂が抜け、ふわふわとしていた。生きているはずなのに本当に生きているのか疑わしくて、実は夢で、起きたら目の前にハンナがいるなんてこともあり得るような気がしてしまう。

長くうとうとしていたような気がする。何も考えられない寝起きだったせいか。ふと、少年のころのような心持で窓から風景を見た。笑顔の幼いハンナの面影が見える。

「ハンナ……？」

私は窓の風景に移ったハンナに視線を引き寄せられていると

「フェーム帝国バンザアアアアアアアアアアアアアアアアアイ!!」

反対側から大きな声が聞こえた。振り向こうとした刹那視界は暗転し、ぐるぐると回される。ただ遠くへ飛ばされる感覚を味わい、外の空気を味わう。激しい爆発音が聞こえたはずなのに、耳が痛いだけで何の音かよく理解できなかった。

「ウォール元議長の馬車が爆破されたぞ」

「フェーム分離派か?！」

男たちの悲鳴に近いような叫び声が聞こえる。パニック状態になっているようだ。横には燃え盛る馬車と木片が見えて、上には大自然の青空と火の粉が見えた。

「ウォール議長!!」

近寄ってくる女性には聞き覚えがあった。あれだけ一緒にいたんだ忘れるはずがない。

「エマリー参謀本部長!! 危険です!!」

エマリー元軍代理の部下たちが数人駆け寄ってくる。

「エマリー……軍代理……」

私はかつての役職で呼び手を伸ばす。手には力が入らず弱々しく、老人のようだった。

エマリー元軍代理が強く私の手を握ってくれた。かつてハンナが死ぬ時の私のように。

「立ち上がりたいが、下半身に力が入らないんだ」

「下半身ありませんから……」

エマリー元軍代理が痛々しく笑う。

「そうか……」

下半身が爆発で吹き飛ばされたなら、もう私は生きられないだろう。私の人生は色々

なことがあった。難しく変なこともし、不幸な事さえもあった。いつも自分の選択に自信を持てず、間違っている気がしてならなかった。だがこうして死を宣告されると、痛いというよりも穏やかな気持ちになって、今までの行いを客観視できた。

「私のやってきたことは……正しかったんだろうか……」

エマリー元軍代理が涙を堪える。強く強く握りしめた手は離れそうになかった。

「それは分かりません。でも意義のあることだと思います。大陸統一の恩恵を必ず民に届けます」

エマリー元軍代理が決意のごとく言ってくれた。私はそれを聞いて暖かい気持ちになり、何か重荷が外れた気がした。

「ああ……。それを聞いて安心した……」

私は静かに視線を閉じ、真つ暗な空間をどこまでもどこまでも落ちていく。

「ウォール議長！！ウォール議長！！」

落ちれば落ちるほどエマリー元軍代理の声は遠く静かになってった。私が落ち続ける、ふと海底のような場所に落ちる。白と黒だけの場所。

だが、目の前にはハンナがいた。ハンナが私に手を差し出す。私がかつてハンナに

「軍へ行こう。ここから出よう」と言ったあの時のように。あの時から私たちの物語が始まった。あの時ハンナの手を引っ張って、社会を生きやすいものに変えてやると決意した。この決意が今まで私を生かし続けてきた。

もう悔いはない。私は微笑むハンナの手を取った。

フェーニング大陸物語

- 2022年8月31日 執筆
- 著者 ペンギン内閣
- 編集 ペンギン内閣

© PenguinCabinet, 2022